

山田美妙雜稿

中學全科辭典校註
二

特別

15

1664

54



15

1664

54

あはらや 粟屋 荒れはてたる家、廢宅。
あはらや 荒れはてたる家、廢宅。
あはらや 荒れはてたる家、廢宅。

あはらや 粟屋 荒れはてたる家、廢宅。
あはらや 荒れはてたる家、廢宅。
あはらや 荒れはてたる家、廢宅。

あはらや 粟屋 荒れはてたる家、廢宅。
あはらや 荒れはてたる家、廢宅。
あはらや 荒れはてたる家、廢宅。

あはらや 粟屋 荒れはてたる家、廢宅。
あはらや 荒れはてたる家、廢宅。
あはらや 荒れはてたる家、廢宅。

あひがも 間鴨 ① かもと、あひるとの間に生れたるもの、二、あひる。

あひさき 間黄 ① 徳川時代の奥女中などが 正月七日に禮服のうちかけの下に着用したる黄色の小袖の稱。

あひさき ① 合口 ② 冬、と夏服との間に着用する洋服。

あひさき ① 合口 ② 鏝なくして こひくちと縁と合ふやうに造りたる短刀、七首。

あひさきはせいし 會澤正志、人名、水戸の儒臣、名は安、通稱は恒藏、彰考館總裁となる、文久三年七月十四日歿す、年八十二、新論、孝經考、正志雜記等の著あり。

あひさん 亞砒酸 ① 化學、記號、H₃AsO₃、砒素又は其礦物を空中にて燃焼すれば、白色の粉末となりて昇華するものにして猛毒なり、水酸化アルカリの溶液にはよく溶解して 亞砒酸鹽を生ず。

アヒミア Abyssinia ① 國名、エピアの東南にある高原、人口は凡そ四百萬、伊太利の保護國なり。

あひしらふ 應接 ① あへしらふに全なし。

あひじろし 合印 ① 軍中などにて、敵と味方と紛れぬ爲めに、豫め定められたる 物具に付くる標。

あひじろ 間白 ① 徳川時代の奥女中が 禮服のうちかけの下に着たる白き小袖のこと。

あひた やすあき 會田安明 ① 人名、數學家、通稱算左衛門、字は子貞、羽前上の人、數學に精通せり、文化四年十月二十六日歿す、年七十一。

あひちごく 阿鼻地獄 ① 佛敎の語、八大地獄の一にして最も苦惱多き所なりといふ。

あひつ 合圖 ① 軍中などにて、豫め約束し置きてその時に至り烽火、旗又は鉦太鼓の類などにて、事を告げ知らすこと、又 豫め約束し置きて、その時、手眞似、かけ聲などにて、事を知らすこと。

あひつ 會津 ① 地名、岩代國會津平と稱する平原の中心にある者松の別稱。

あひつちゆうなんごん 會津中納言、人名、上杉景勝の異稱。

アヒトス Ahydros ① 地名、ヘレスポンドのアシア側の一市にして、クセルクセネが歐洲に侵入せし時、船橋を架せし所として有名なり。

アビオン Avignon ① 地名、フランスの舊都市の名、ローン河の左岸に建つ。

あひやく 相役 ① れなれ役をつとむるもの、同役。

あひる 鶯 ① 動物、Domestic duck、形、かもに似て大なり、足に廣き蹼あり、水に泛び、陸に歩む、飛ぶこと能はず、雌は常に鳴きて喧し。

あひるは、鶯の一種で、水鳥である。アヒルは、鴨の一種で、水鳥である。

アヒルは、鴨の一種で、水鳥である。

アヒルは、鴨の一種で、水鳥である。

あひる、鶯の一種で、水鳥である。アヒルは、鴨の一種で、水鳥である。

と能はず、雌は常に鳴きて喧し。文采少し、雌は常に鳴きて喧し。

あふ 亞父 ① 亞は次なり、之を尊敬すること、父に次ぐの義にして、國の功臣をよぶ語。

あぶ ① 豆 ② 動物、虫の名、Tobanus、種類、甚だ多し、牛馬につきて血を吸ふものあり、蠅に似て大なり、花蜜を吸ふものあり、色、黄にして形、山蜂の如し、あをあぶと稱するものあり。

アフガニスタン Afghanistan ① 地理、アフアの一國の名、印度の西にあり、首府をカブールといふ、久しく英露の爭權地たりしが、現在は英國の屬國たり。

アフガン Afghan ① 人種、アフガニスタンに住する民族なり、其族十有餘種あり。

あふぎ ① あはせ ② 属合 ③ 遊戯の名、属に詩歌などをかき、之を合せて、勝負を決するもの。

あふぎ ① がひ ② 扇貝 ③ 一、しやこの一名、二、わけまきにたなし、三、はたてがひの一名。

あふぎ ① たるき ② 属垂木 ③ 神社などの軒に、属の形に開きたるもの。

あふぎ ① しば ② 属の芝 ③ 山城國宇治の平等院の堂傍にあり、蓮三位聖徳が自刃せる所なりといふ。

アブキル Aboukir ① 地理、海の名、埃及のアレクサンドリアの近海にして、西紀一七九九年、英のチルソン提督が、フランス艦隊を撃破せし所たり。

あぶく 仰 ① 一、上に向く、あをむく、二、轉じて、尊敬する、貴ぶ。

あぶくま ① 阿武隈川 ② 川の名、盤城國白河郡大熊澤より發す、白石川を合せ陸前國境に沿ひて海に注ぐ、あぶくま ① 達期 ② 人に逢ふとき、逢ふ機會。

アアサイド Au Sid ① 人名、メルシアのギンギスカン王統第九代の王、柔弱なりしを以て、寵臣、皇后政を恣にする、一三三五年薨す、年三十。

アアサイド Line of apside ① 天文、遠日點と近日點とを結び付くる直線なり。

あふさか 逢坂 ① 地名、近江國滋賀郡にあり。

あふさか ① やま ② 逢坂山 ③ 地名、山の名、近江國滋賀郡にあり、古、逢坂關のありし所なり。

あふさ ① さるさ ② 左右 ③ 一方善ければ、一方、悪しなどの意に用ふ。

あふち 棟 ① 植物、一名、せんだんのき、高さ丈餘、葉の形は、なんてんに似て鋸齒あり、夏、淡紫色の五瓣の花を開く、實は圓し、秋熟して黄色なり。

あぶつ 阿佛尼 人名、十、夜日記の著者、権大納言藤原為家の妻、初め、安喜門院邦子内親王に仕ふ、後、藤原為家、北林禪尼又は阿佛尼といふ、建治三年、為氏と對面中、鎌倉にて歿す。

アフデルカデル Ahd-el-Kader 人名、アフリカマスカラの酋長、十五年間、フランス人と戦ひしが、西紀一八四七年、遂に捕虜となる、後、免さる(西紀一八〇七一八〇二)。

アフデルラマン Ahd-el-Raman 人名、イスパニアのメワル人の將にして、西紀七三二年、カロマルテルとツールに戦ひて敗北す、七五六年カリフとなる、アフデルラマン二世は、コルドバ四世のカリフにして、八二二年即位し、八五二年歿す。

アフアラマン三世 は九二二年即位、九六一年歿す。アフアラマン三世は九二二年即位、九六一年歿す。

あふとつ 凹凸 土の窪めるを凹といひ、土の高きを凸といふ。
アフドラ 阿布都拉 人名、哈密の人、清の高宗、彼をして回部を治めしめしが、政を順みず、故に亂民起り、露國は、邊安保持の名の下に亂民を誘ひ、遂に彼を殺せり、時に西紀一八七一年なり。

あふひ 葵 植物、草の名、高さ三四尺ばかり、葉は圓くして五稜をなし、鋸齒あり、五生す、春、葉の間に五稜の花を開く、白くして黄、紫を帯ふ、此花の薬は熱すれば、横裂して花初を散す、種類は甚だ多し。

あふひがひ 葵貝 形、やや、葵の如き形をなす貝。
あふひごけ 葵苔 植物、草の名、葉は、れんげさうに似て、節毎に一葉一花を付く、花は五瓣なり。

あふひまつり 葵祭 加茂神社の祭、陰曆四月中の酉の日に、此祭にかもあふひを以て神事を行ふなり。
あふひやすづく 葵康繼 人名、刀鍛冶、越前國の人、寛永頃の人、江戸に住す、葵の三葉を、刀銘とす。

アフベクル Ahbeker 人名、フェニアの父、ムハメッドの鼻、初めてシマフとなる、西紀三三四年歿す。

あぶみ 燈 足踏の義、馬具の名、鞍の所脇にかけ、騎る人の足をかゝるもの。
あぶみ 近江 地理、國名、東山道の最西端にある國。
あぶみ 近江表 近江國蒲生郡の邊より産出する燧表。

あぶみ 近江無 植物、蕪の一種、大津の邊より産す、根は平くして圓く、直径七八寸あり。
あぶみ 近江蚊帳 近江國坂田、蒲生の邊より産出するもの。

あぶみ 近江聖人 中江藤樹のこと。
あぶみ 近江三船 人名、葛野王の孫、又、章博士、博學にして文章をよくす、神武天皇以來、持統天皇までの謚號の撰者、又、懷風藻といふ詩集を撰せり、之れ本邦詩集の嚆矢なり、延暦四年歿す、年六十四。

あぶみ 近江八景 地理、近江琵琶湖の邊にある、景にして、比真暮雪、矢走歸帆、石山秋月、瀬多夕照、三井晚鐘、堅田落雁、粟津晴嵐、唐崎夜雨の稱。
あぶみ 近江富士 山の名、近江國、三上山の別稱なり。
あぶみ 近江令 天智天皇の時、唐制に倣ふて制定し、持統天皇の時、頒布せられし法令にして、大寶令

あぶみ 燈 足踏の義、馬具の名、鞍の所脇にかけ、騎る人の足をかゝるもの。
あぶみ 近江 地理、國名、東山道の最西端にある國。
あぶみ 近江表 近江國蒲生郡の邊より産出する燧表。

あぶみ 近江無 植物、蕪の一種、大津の邊より産す、根は平くして圓く、直径七八寸あり。
あぶみ 近江蚊帳 近江國坂田、蒲生の邊より産出するもの。

あぶみ 近江聖人 中江藤樹のこと。
あぶみ 近江三船 人名、葛野王の孫、又、章博士、博學にして文章をよくす、神武天皇以來、持統天皇までの謚號の撰者、又、懷風藻といふ詩集を撰せり、之れ本邦詩集の嚆矢なり、延暦四年歿す、年六十四。

の基礎となるものなれども、今傳はらず。
あぶみ 仰 向上に向く、仰ぐ。
あぶみ 四面鏡 物理、球面を一平面にて取り取り、其内面凹なる所を反射面、四面鏡となしたるものなり、球の半徑を此鏡の曲率半徑といひ、反射面の中心と、球の中心とを連結したる直線を、鏡の軸といふなり、物體が、球の中心點の内部にあると、外部にあるとに依りて、其反射の状態を異にす。

あぶみ 脂 一、動物の體中より出づる滑に粘りて、凝れるもの、二、人の肌、手、足などより出づる粘るもの、即、膩なり。
あぶみ 膏石 一、黒褐色にして、油の如き光澤ある石、美濃國赤坂の山中に産す、二、石炭の一名。
あぶみ 油繪 繪の一種、徳川時代、文化年の頃に、司馬江漢が長崎にて洋畫を學び之を畫きたるを嚆矢とす。

あぶみ 油滓 菜種より油を搾りとりたる殘餘の滓、肥料とす。
あぶみ 油桐 植物、桐の類、桐に似て葉は尖れり、鋸齒なし、實は圓く平たし、搾りて油を取るを以て油桐と稱す、材を白桐に代用す、やまざり、いぬざり。

あぶらーしめじ 植物、菌の名 しめじに似て滑に光

わり 毒あり食ふ可からず。

あぶらな 油菜 植物、被子類 十字科に屬す、葉は

互生して色 濃し、莖

あぶらなの果實

高さ四尺ばかり 葉を帯

ぶ 春の末、四瓣の黄花

を咲く 甚だ美なり 夏

季に 果實成熟す、其種

子よりは 油を搾取するなり。

あぶらーのつかさ 主油司 昔時 宮内者に屬し

國より調進する油を司りしところ、後 内膳司に合併す。

アブラハム Abraham 人名 ヘブライ人の族長にし

て ユダヤ人種の祖先たり ユウフラト河の上流に住ひし

が 西紀前二〇〇〇年頃 カナーン地方に移住す。

あぶらーむし 油虫 動物、節足動物、昆虫

類、有翅類に屬す、夏

秋の間 壘所などに多

く生ず 雌は無翅なり

植物に寄生する小虫に

して體後の二小管より

ナクノネナ

甘味の液を分泌す、全身 油をなす。

あぶらーむし 油虫 動物、ありまきの一種。

あぶらーもり 油守 古、殿中にて 燈を司りし女官。

あぶらーやし 植物 熱帯アフリカに産す、菓實の肉を

搾り煮出したる脂肪を土、の食料に充つ、又歐洲にては之

を輸入し各種の製造に供す。

あぶり 障泥 泥、飛を衣を汚すことを防ぐ爲めに 革

或は毛皮にて作り馬の兩脇を覆ふ具。

アブリア Apulia 地名、古戰場、イタリヤの東南に

ある地方の名、第二ヒューニック戦争の戰場たり。

アフリカ Africa 地理 五大洲の一、面積は歐洲の

三倍なり、赤道直下に位し約二億の人口を有す、人跡未達

の地多かりしが 近時四方より探検する人出でて 漸次文

明の域に進まんとす、英佛獨の諸國の領地多し。

アフリカ さかやし (アフリカ酒椰子) 植物 高サ十間

餘となり雌雄異株にして 雄樹の花芽の四輪を傷け 浸出す

る液にて 椰子酒を醸造し得、一名テレーアヤシと云ふ。

アフリカーしゆうこう アフリカ周航 航海 ホルトガ

ル王ジョアンはヘンリーの遺志により 海洋遠航を盛にせし

を以て、一四八七年ガアズは喜望峯に達し、コビラムはア

フリカ東岸を航しソフアラに達し、一四九八年バスコダ、

ガマはアフリカ周航をなし印度航路を發見す。

あぶりやうーし 押領使 古 盜賊 惡漢等を鎮撫する

爲めに 諸國に遣されたる使。

あふる 燈をふみて 馬を急がす。

あふる 煽 一、扇子、團扇の如きものを動かして風を

起す、二、轉じて 風を滾りて火勢を盛にす、三、ただつ

煽動す。

あふる 溢 満ちあまりてこぼる、餘りて出づ。

あふる 炎 一、火にかけて 程よく焼く、二、火にあ

て 暖め 又は乾かす。

あふる 零落 ちちふるにぢなす。

アフルーアッバス Abul Abbas 人名、アッバスの孫

アリーの子なり、西紀七四九年 オムミヤ朝 最終のカリ

フなるマハムン二世を破り 自ら一統のハリフとなり、ア

ッバス朝を興す、在位四年、七五四年六月歿す。

アフルガジ Abulghazi 人名、薩祖の汗、在位二十

年間、即位後 文學に耽り 歐洲に傳はる唯一の薩祖史を

著はし 半途にて歿せり 時に西紀一六六三年。

アフルチ Abruzzi 地名、イタリヤのアペニン高原

地の名なり。

アフルハイル Aful-Khair 人名 ホラサンマナー十

詩人、回々教の一派の教義の説明に努めたる人。

アフルファゼル Afulfazel 人名、アクバル大帝の

大臣、モガル帝國、アクバル大帝治世の史を著す、一六〇

二年 アカンに遣はされ 歸途 刺客の手に倒る。

アフルフダ Afulfuda 人名、有名なるアラビアの

史家、歴史、地理、傳記、數學等に關する著書多し、其内

數種は ラテン語及英語に譯されたり、(一二七三—一三

三一)。

アフリカ ぞう (アフリカ象) 動物 鼻長類の條を見よ。

あふーレンズ 凹レンズ 物理、中央の凹みたるレンズ

のこと。

あべーいせのかみ 阿部伊勢守 人名 幕末の偉人、

名は正弘、有名なる幕府の老中なり、安政四年歿す。

あべーうじ 安倍氏 氏の名、右大臣御主人の裔、晴明に

至り 陰陽天文博士となり家業を興せり、奥州の安倍氏は

淡田の長忠頼より家を興せり、貞任に至りて亡ぶ。

あべーかは 安部川 川の名、駿河國安部郡にあり。

あへぐ 喘 息を急にす、急しく呼吸する。

あべーさたふ 安倍貞任 人名、頼時の子、厨川二郎

と號す、天喜五年 源頼義と戦ふ、一旦和して又戦を開き

九年に亘る 衣川に破れ 厨川に利あらず、遂に戦歿す、

時に康平五年、年四十四。
あべしげつぐ 阿部重次 人名、正次の三子、三浦重成の嗣となり、秀忠に近侍す、功ありて果進し、家光薨し殉死す、年五十一。

あべしやうたう 阿倍将常 人名、薬学者、名は輝任、號は丹山といふ、陸中盛岡の人、清國に漂着し、十八年間本草學を修む、歸朝後、前人未發の卓説を唱道し、徳川幕府に仕ふ、寶曆三年正月二十八日歿す、年百〇四。

あへしらふ 應答 一、挨拶する、二、もてなす、あひしらふ、あしらふ、三、とり合はす、點綴す。
アベスタ Avesta 教理、ゾロアスターのツアラツストラが紀元前十世の頃唱へたる教理にして、イランの多神教を改革したるもの。

あべせいめい 安倍晴明 人名、有名なる天文博士、始め賀茂忠行及び其子保憲に就いて、天文の術を學ぶ、且、陰陽卜占の術に通じ、判斷凡て命中せざることをなしといふ、花山天皇に仕へて、大膳大夫、左京大夫より、播磨守に昇進す、かの熊山院の讓位を、卜知せしが如きは有名なる談なり、其子孫は天文、曆道、陰陽の學を傳ふ。
あべただあき 阿倍忠秋 人名、慈善ある政治家、豊後守と稱す、徳川家光に仕へて、老中に補せられ、政事に

參與す、慶安四年將軍家病に傳たり、責任廉直、頗る仁政をなす、由井正雪の叛するや、寛刑を以て之を處理せり、又、江戸に棄兒ある毎に、之を拾ひて鞠育せりといふ、延寶三年五月歿す、年七十四。

あへて 敢 無理に、強ひて。
あへなし 無敵 張合なし、甲斐なし、たのみなし。
アベニン Avening 地理、イタリヤの山脈にして、アルプス山の支脈たり。

あべの 阿部野 地名、攝津國住吉郡にあり、北畠顯家の戦死せしところ。
あべのなかもろ 阿倍仲廣 人名、中務大輔船守の子、寛龜二年、年十の時、遣唐留學生となる、彼地にて名を朝衡と改め、玄宗皇帝に召されて高官となる、一度歸朝せんとして果さず、在唐五十年頗る榮達せり、龜六年正月唐にて歿す、年七十、李白、王維等と交わりしと。

あべひらふ 阿部比羅夫 人名、大彦命の後裔、齊明天皇の時蝦夷を討ち肅清を討つ、天智天皇の時新羅を討ち百濟を援ふ。
アベマキ 植物、穀斗科植物にして、「ワタマキ」「ワタクマキ」又は「コルククマキ」杯の異名ありクマキに類似すと雖も、葉裡に白毛を備へ梢灰白色なり、ワタマキにす

るも、少し大にして先端は尚強く、尖れり、殻斗淺し、樹皮を剥きコルクを製す即ち麥酒會社の用ふるコルクなり。
あべむねたふ 安倍宗任 人名、頼時の次子、鳥海三郎と稱す、衣川に破れ、頼義と京師に到り、義家の家にあり、後、薙髮して、筑紫に居れり。

アヘン 阿片 鴉片 化學、未熟なる罌粟の實を傷け、滲出する乳狀液を集めて、乾燥したるもの、數多のアルカロイド、例、モルフィン、コデイン、ナルコチン等を含む其中、モルフィンの量最も多し、故に麻酔性を有す。
アヘン Aachen 地名、獨逸最古の都府、カロロ大帝墳墓の地、今は商工業の一大中心たり。

アヘンせんざう 阿片戦争 戦争の名、清宣宗道光年中の英清の戦争なり、清廷風して、償金二千五百萬兩と香港とを與へ、且上海以下五港を開くことを約して落着す。
アヘンでうやひ Aachen 條約 歴史、西紀一六六八年アヘンに於て結ばれたる條約なり、佛王ルイ十四世はためにイスパニアに於ける其侵地を返還せしめられたり。

アヘンの一わび Aachen の和議 歴史、オースリヤ繼承戦争の終局の和議、西紀一七四八年プロシアのアーヘンに於て結ばる。

アベンチーのなか Aventine Hill 阿ベンチン丘は、ローマ七丘の一。

あべよりとぎ 安倍頼時 人名、貞任の父、陸奥六郡の領主、浮田の長、永承五年、子貞任と共に人民を劫掠し部落を合せ、南は白河關、東北は卒土濱に及び、勢威盛にして、武を恃み納租を意りしかば、朝廷、源頼義を鎮守府將軍として、之を討たしむ、會々大敵に際し、一旦兵を解きしが、間もなく再戦し、天喜五年、衣川に戦歿す。

アベラルツス Aepardus 人名、フランスの神學者にして又煩瑣哲學者なり、(西紀一〇七九—一一四二)。
アベルサ Avelza 地名、伊太利のテラ、ザ、ラポロ州にある都府にて、ナポリとカプアとの中間にあり、ノーマン人之を起したり。

アペレス Apelles 人名、アレクサンドル大帝の朝に仕へたる希臘の古代最も有名なる畫家。
あほ 阿保 阿は倚なり、保は養なり、倚頼して、養育せらるるをいふ。
アボ Abo 地理、島の名、フィリッピン諸島中のチグロス島の南にある、島。

アボガドロの一定りつ Avogadro の定律 化學物質は其性質を生ずる非常に小さい微粒、即ち分子よりなり

分子は、其分裂によりて生ずる微粒にして、何なる方法によるも、最早、分裂せしむる可からざる、最小微粒なる原子より生ずるなり、アボガドの定律とは、同温度同壓力に於て等容積の氣體中には、同数の分子存在するてふ假説をいふなり。

あほう 一、きゆう 阿房宮 秦始皇帝の宮殿なり、陝西省西安府長安縣の西北にあり、始皇帝三十五年朝宮を渭南上林苑に營み、先づ前殿を造る、之を阿房宮といふ。

あほう 一、どり 信天翁 動物、鳥の名、海に棲む。

あほし 網干 地名、播磨國揖保郡にある市街。

あほしんわう 阿保親王 人名、平城天皇第三の皇子、母は宮人葛井藤子、人となり謙遜にして、材幹あり、才武を兼ね、弘仁の亂に、大宰員外帥に貶せらる、播磨勢、伴健岑等の叛せし時、之を天皇に奏し、厚く賞せらる。

アポストロス Apostolos 人名、イエスキリストの弟子なり。

アボシ Avon 英國の河の名。

アポロニオス Apollonios 人名、ピュテラス派の哲學者にして、魔術をなし、死後に至りて崇拜せらる。

アポロドルス Apollodorus 人名、ローマ帝世時代の初期に出でたる建築家なり。

アポロニア Apollonia 地名、伊太利アオロスの右岸にある都市なり、コリントス及コルキラ人之を建て、商業地となり、後軍事上の要地となり。

あま 海人 海に入りて漁を業とする人、蟹。

あま 尼 女の法師、比丘尼にたなし。

あま 亞麻 植物、草の名、Linum usitatissimum、亞麻科の草本にして一年生なり、莖は高さ三四尺、葉は柳葉に似て小さく、莖をめぐりて互生す、夏の初め、莖の上に淡蓮花色の花を開く、五瓣あり、實は茶色にして、薬用に供す、織維よりは、絲を製し、布を織る。

あま 一、あがり 雨上 雨の收まりたる後、雨後。

あま 一、あし 雨足 雨の降りすくこと。

あま 一、かう 阿媽港 今の澳門なり、葡萄牙の領地。

あま 一、かう 尼講 寺院にて、婦人の信者の集合する所の組合。

あま 一、がくれ 雨隠 雨をさくこと、雨やどり。

あま 一、がける 天翔 大空をかける、天をかける、鳥なごにも又、靈魂なごにもいふ。

あま 一、がさき 尼ヶ崎 地名、攝津國川邊郡にあり、享祿四年細川高國の戦死せし所、尼ヶ崎城は高國の創業にかかるといふ。

あま 一、がは 雨合羽 油紙などにて作り、雨を防ぐために着用するもの。

あま 一、かは 雨皮 生絹にて作り、輿、車などに、防雨具として用うるもの。

あま 一、かはず 雨蛙 動物、蛙の一種、色は青緑なり、又は灰色なることあり、木の枝に居り、雨の降らんとする時に叫ぶ故に此稱あり。

あま 一、がべに 尼紅 タヤけの空。

あま 一、がへる 動物、背面緑色、腹面白色、趾頭に吸盤を有し巧に樹木に攀ち上る、鳴響能く發達し、左右の両翼中央に於て相接し、一大囊を有するの感あり、降雨前には盛に鳴響を發す、兩棲類に屬す。

あま 一、かわ 亞瑪港 珊瑚の上品なるもの稱、あまかんあまかうともいふ。

あま 一、き 甘木 植物、かんざうにたなし。

あま 一、ぎ 雨着 合羽など、衣の上に着て雨を防ぐ衣、雨衣のこと。

あま 一、ざん 天城山 山の名、伊豆國第一の高山、高さ、百七十丈。

あま 一、ざり 雨霧 小雨の如き、甚だ深き霧。

あま 一、ざ 天草 地名、島嶼の名、肥前國の南方にある

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

あま 一、ざらうじ 尼子氏 佐々氏の裔、出雲に住す、足利

末世に至りて 初めて世に顯はる、戦國時代には一時中國

に雄を稱せしも 毛利氏に破られて遂に衰ふ。

あまこーかつひさ 子勝久 人名、義久の叔父なり、

義久の毛利元就に亡ぼされてより 山中幸盛等恢復を計り

勝久を推せしも事成らず、後 元春に攻められ自刃せり。

あまこーつねひさ 尼子晴久 人名、晴久の祖父、文明

十八年富田城を復し 一州に守たり、後大内義興と兵を搦

義隆と戦ひ克たず、天文十年死す、年 十四。

あまこーはるひさ 尼子晴久 人名、政久の子、祖父經

久の後を受けて 山陰の兵權を掌握せり、連年毛利氏と戦

ひ遂に富田城に孤立せり 永祿五年病歿す、年四十九。

あまーごひ 雨を 旱魃の時、降雨を神に祈ること。

あまーごも 天衣 天人の着用する薄き衣。

あまーさうぞく 雨装束 雨のふるときの装束。

あまーさかさま 逆 さまかさまに反し。

あまーざかる 天離 離の方は都より遠くはなれて見ゆ

るよう 離といふにかけていふ。

あまーさき 動物、さぎの一種、形通常のさぎより小く

頭は 黄赤色にして 後、白く變ず。

あまーさへ 刺 雨にさらすこと、雨の降るに覆

あまーざらし 雨曝 雨にさらすこと、雨の降るに覆

物もせずして、満るる儘に任せおくこと。

あまーじたり 雨滴 雨の軒などより落つるしたたり。

あまーしま 海士島 島の名、因幡國の北方の海中にあ

る島なり。

あまーしやうぐん 尼將軍 源賴朝の北の方 政子のこ

とをいふ、賴朝歿後 自ら幕政を繼ぎし故なり。

あまーろるる 天聲 高く空中に響ゆること。

アマゾン Amazon 河の名、アメリカにある大河、長

江實に四千哩を流れて 大西洋に朝す。

アマゾンーいし 天河石 礦物、セーネキを見よ。

あまたーかへり 數多返 幾度も、あまたたび。

あまーたき 雨澤 澤名、因幡國 清美郡雨瀧村にあり

高さ十三丈 幅一間餘。

あまたーたび 許多度 たびたび、しばしば。

あまーだひ 甘鯛 動物 魚の名、鯛の類 太さ五六寸

より一尺に至る 口尖り 鱗小さく 色は淡赤くして 青

みわり 味甚だ美なり。

あまーちや 甘茶 一、樹の名、さあまちやを見よ、二

さあまちやの莖 葉をとり 採みて青汁を去り 煎じたる

もの 又 或は甘茶を茶に交へて煎じたるもの、四月八日

の灌佛會に用ゆ。

アーマチュア 物理、之を磁石の間極間に廻轉して、

其中に電流を生ぜしむ可きコイルを云ふ、其形状種々あり

あまーつかぜ 天津風 天の風、空を吹く風。

あまーつかみ 天津神 天にまします神。

あまーつーくに 天津國 日の神のまします所、たかま

のはらのこと。

あまつーくぬーのみこと 天津久米命 人名 久米直

の祖、天孫降臨の時天忍日命と共に弓矢をとり先驅せし神

なり。

あまつーらら 天津空 一、天空、二、禁中、朝廷。

あまーづつみ 雨隱 雨を憚りて家に籠り居ること、

あまごもり、あまがくれ。

あまつーのりーかう 天津祝詞考 書名、平田篤胤の著

なり 天津祝詞とは大赦の詞なりとの説を非とし 別に祝

詞の存することを論断せしものなり。

あまーつばぬ 雨燕 動物、鳥の名、形 あまどりより

も大にして 兩翼尾よりも長し 全身黒く 足短く 小く

して腹の毛にかくる、雨降らんとする時 空中に群かりと

び 虫を捕ふものなり。

あまーつーひつぎ 天津日嗣 天皇の御位尊稱、天位。

あまーつーほし 天津星 空の星、天上の星。

あまーつーみや 天津宮 天津神のたはせし天上の宮殿。

あまーかづら 甘藷 植物、蔓草の名、深山に生ず、細き

蔓を以て他樹につく 葉は楕圓形、鋸齒あり、蔓の末に

小なる白花 傘の如き狀をなして咲く 古 此蔓より汁を

とり 砂糖の代りに用ひたりといふ。

あまーつーなごめ 天津乙女 一、天人、天女、二、五節

の舞を舞ふ女。

アマデオ Andeus 人名、サハヤ第一の侯なり妻の

死後、法王に獲はる フェリス五世は即ち之れ也。

あまーてらす 天照 一、大空に照りわたる、二、天が

下をしるしめし給ふ。

あまてらすーたほみかみ 天照大御神 神の名、名は大

日靈貴、伊弉諾尊の御女にましまして 天皇の遠き大御祖

なり。

アーマドナガル Ahmadnagar 市名、デッカンのパー

マン朝後(後分起したる五回教國の一なり、ビンシア山脈

の南西海岸にありて、今は印度カンベイ省の一市なり。

あまごよーつーひぬ 天豐津媛 人名、懿德天皇の后、

息石耳命の御女なり 孝昭天皇及 武石彦齊友背命を生む

孝昭天皇即位の後 皇太后となる。

あまーどり 雨鳥 動物 鳥の名 燕に似て 腹黄色に

して、雲雀の如き斑あり、雨降らんとする時、飛ぶ。
あまな 山慈姑 植物、草の名、葉の襟、水仙に似たり、葉間より莖を生じ、莖端に六瓣の白花を開く。
あまなふ 甜 糖 ききいる、うべなう、引きまく。
アマニゆ 亞麻仁油 化学、アマニ油は亞麻の種子を搾りて製したる油なり、ペンキ、印刷インキを製す。
あまねし 運 行き渡りてあり、いたらぬ限なし。
あまの 天野 山名、南河内郡天野村所在の山、金剛寺立てり、後村上帝の七年間の行在なりき。
あまの いはぐら 天磐座 天孫の天上に於ける御座。
あまの うきはし 天浮橋 天地の間に架かれりといふ神代橋。
あまの うら 海部浦 浦の名、紀伊和歌浦の別稱。
あまの なしほにののみこと 天忍魂耳尊 人名、素戔嗚尊の子にして、天照太神の太子。
あまのかく やま 天香山 地理、大和國十市郡香久山村にあり、畝傍山、耳無山と互に鼎立の位置にあり。
あまの がは 天河 数多の小遊星が、密に集まりて川の如く長く、大空に亘りて見ゆるもの、秋の晴れたる夜などには殊に著し、銀河。
あまの かはら 天河原 天河の河原なり。

あまの さへづり 蟹 漁夫のものいひをいふ、恰も鳥の轉るに似ればなり。
あまの しじやこ 釣家蛇 動物、虫の名、黄白色にして頭は黒し、形、むかでの如く、背には高所、二つありて駱駝の如し、地上に穴をほりて棲む。
あまの でんしららふ 天野傳七郎 人名、兵學者、水戸の藩士、真野文左衛門に従ひ、愛州流の剣法を學び、遂に一家をなす、兵學に通せ。
あまの どうかけ 天野景景 人名、藤原氏にして、景光の子、石橋山の戦に、遠景の苦戦によりて賴朝は脱するを得たり、其後頼朝に仕へて多くの功あり。
あまの のぶかけ 天野信景 人名、大和國の人、尾張藩に仕ふ、文武に通じ、其著蹟、尻に最も名あり、享保十八年九月八日歿す、年七十三。
あまの はごろも 天羽衣 一、天人の着る衣、二、神の着る衣、三、天皇が神等の爲に沐浴の時、召し給ふ御衣の名。
あまの はしたて 天橋立 地名、日本三景の一、丹後國興津郡興津海に突出せる、一帯の地にして勝地なり。
あまの はら 天原 地名、あまねく、天上をさしていふ。
あまの ひぼこ 天日槍 人名、新羅王の子、垂仁天皇

の御代に歸化す、播磨國穴栗、淡路國出邊の二邑を賜はりてここに住めり。
あまの まひつづののみこと 天目一箇命 人名、天太玉命の臣、筑紫伊勢の齋部氏の祖。
あまの やりへゑ 天野屋利兵衛 人名、名は直之、晩年、剃髮して、松永士齊と稱す、有名なる俠客なり、赤穂義士が、復讐の用に供せし一切の武器は、皆その調達せる所なり、享保十二年正月二十七日歿す、年六十六。
あまの のり 甘海苔 海苔の一種、冬季、海中の石につく、生なるは緑黒色、乾けば紫黒となる、下等海苔なり。
あま はせづかひ 天曉使 天上を走る使者。
あま はたし 雨畑石 甲斐國巨摩郡雨畑より産す、硯を作るに用ゆ。
あま びと 蜃人 漁夫、漁師のこと。
あま み 庵美 地名、薩摩の大島なり。
あま んず 甘 意に適して、よしと思ふ、満足する。
あま め 蜃女 女の漁人。
あま も 大葉藻 植物、海藻の名、葉はしやうぶに似て、細長く、生なるは青く、るれば黒し、生なるは夢の肥料となる、一名、もしはくさ。
あま やどり 雨宿 雨の晴るるまで、樹陰、家などに

宿り休むこと。
あま のものがたり 雨夜物語 源氏物語の椿木の巻中の一部分、雨ふる夜、二三の男集まりて、女の性行につき品定めすることを記せる條。
アマリン ハ Amara-Sinba. 梵語、貴重なる著述を殘せる、度人の僧なり。
アマラスタ Amalastha. 人名、東ゴート王テオドリックの女、父死せし時代りて政を執りし婦人なり。
あま りりよう 雨龍 龍の一種、尾は赤色にして、細く長しといふ。
アマルガム Amalgam. 化学、水銀と他の金屬との合金をいふ。
アマルガム はふ アマルガム法 鑛石より金屬を得る時に、其金屬と水銀とのアマルガムを作り、更に水銀を蒸溜し去りて、金屬を得る方法なり。
アマルフ Amulfi. 地名、イタリヤのナポリのサルデーニヤの北にある港の名。
あま むぶね 蜃小舟 漁をなすに用ふる小舟。
あま むぶね 蜃小舟 動物、貝の名、形あまりに似て、殻厚く、横に筋ありて深し、内外白くして、縁は紅紫なり、多く紀伊の海邊に産す。

あみ 楛 楛 動物、Mysis. わびの一種、阿辛等に製する小形の甲殻類なるが

其のびに近似せるは勿論なり、歩行肢に

比すべき肢は五對の外に、前の三對はより八本となり、各肢の尖に二本の枝ありて毛多く發達し、游泳の用に供す

大きは七分あり。

アミアン Amiens. 地名、フランスの北部ソム江畔に

あるピクレー州の舊都市、其寺院は、純粹なるゴート風なるを以て有名なり、一八〇二年、英佛平和條約を茲に結

べり。

あみいば 動物、原生動物、體は一個の細胞よりなる、

生殖方法は、體の二分することに依る、又體面に被膜を分泌し、内容は胞子を稱する數多の小體に分裂し各胞子は成長すれば

ばいみわ

あみがさ がひ 楛 楛 動物、貝の名、形あみがさに似て、色黒し、殻の表面にまつたけの裏の如き條あり

あみがさもち 楛 楛 餅 形あみがさの如く、中にあ

んを包みたるしんこ餅といふ。

あみ がひ 楛 楛 動物、貝の名、其外部を一望する時は、珊瑚に類するが如しと雖も、貝は多數の小房相接して成り、每房中に一個の虫住居せり、學術上、之を苔蘚虫類と稱す、此類は海中に最も多く存して或は樹形をなし、或は岩石の面に擴がりて附着す。

あみすて 一かご 楛 楛 編袋 あみがひの二種

籠 竹にて眞中を籠の如くにあみ

周囲はわますにあみ籠、魚を丸煮する時に用ゆ。

あみだ 阿彌陀 梵語、佛の名、眞宗と淨土宗の本尊。

あみだ がさ 阿彌陀

和を乞ふ。

アミールアルコホル 化学 アルコホルの知き味とフェル油に似たる臭氣を帯ぶ、甚だ有毒にして下等なる酒を飲みたる後頭痛眩暈するは此アルコホルの爲なり。

あむ 編 一、打交つて組み合す、二、材料をわつめて一部の書籍とする。

あむ 一かは 阿武川 川の名、長門國にあり。

アム 一かは Amu Darya. 河の名、トルキスタンにあり、アム河なり。

あむ 一しろ 編席 竹にて編みたる席なり。

アムステルダム Amsterdam. 和蘭の首府の名なり、アムセル河口にありて大貿易港たり。

あむ 一づち 射塚 あづちになし。

アムリツァール Amrisar. 地名、北印度のマンシヤアにある宗教上の大市なり。

アムハースト はく Amhurst. 地名、北印度のマンシヤアにある宗教上の大市なり。

人名 一八一六年支那に派遣せられし、北京に入る能はずして歸る、一八二三年印度領知事となる、翌年ヒルマと戦ひ、アサム、アラカン、チナセリムの地を得たり、(一七七三—一八五七年)。

アムハースト ちよう Amhurst Town.

○ 中學全科辭典

笠 形よめがさらに似て大きく、形神笠の如し。

あみだ 一きやう 阿彌陀經 佛教の聖典、淨土宗、法相宗等に之を用ゆ。

あみだ 一によらい 阿彌陀如来 あみだになし。

あみだ 一がみね 阿彌陀ヶ峰 山の名、山城國華頂山の別稱、豊太閤を祀る。

あみだ 一のたき 阿彌陀漆 漆の名、伊賀國名張郡にあり、最も大なるものは高さ十八丈、幅一間餘。

あみ 編戸 竹はりがねなどを編みて作れる戸。

アミドール Amidolene. 化学 記號 C₆H₅(NH₂) (CH₃) 又 トルイナシと云ふ、コールタール中に存するメナル、ベンゼンより製するを得。

アミドベンゼン Amidobenzene. 化学、アニリンにあなし。

あみ 一のいは 網袋 網のれもし。

あみ 一のもの 網乗物 乗物の周圍に、網をかけたるもの、重罪人を護送するに用ゆ。

あみ 一のもの 編物 凡て編みたるもの、殊に毛糸などに作りたるもの。

あみん 阿敏 人名、清太宗の從弟、天聰元年朝鮮王に應ぜざるを以て、阿敏をして朝鮮を討たしむ、朝鮮遂に

○ 中學全科辭典

アムル Amur. 黒河、河の名、露領シベリア及支那の平原を貫流する大河、實に四千哩餘あり。

あん 案 一、机、二、したがり、草稿、三、かんがへ推量。

あん 庵 一、はり、いは。

あんいつ 安逸 一、勞苦をせずして安樂にすること。

あんい 安永 一、後醍醐天皇の御代の年號、(紀元二〇三二年より二四四〇年まで)。

あんわう 安王 一、人名、周三十三代の王、威烈王の子なり、在位二十六年にして崩す。

あなか 行火 一、足を暖むるもの、足あぶり。

あなか 晏駕 一、天子の崩せしをいふ、崩御。

あなかう 鯨 一、動物、魚の名、東海に産す、形、平扁にして盤の如し、尾細長なり、全體琵琶に似て、鱗なし、口大きく、長鬚を有し、海底に緩歩して、小魚を呑む。

あながう 暗號 一、他人に知らせぬ爲めに、符牒を以て定めたる合圖。

あなかうてんわう 安南天皇 一、天皇の御名、人皇第二十代の天皇、在位三年、紀元一一一六年八月九日崩す、年五十六。

あながう 暗合 一、物事の互に知らざるに、相合へること、暗に符合すること。

あなかうてんわう 安閑天皇 一、天皇の御名、人皇第二十七代の天皇、在位二年、繼體天皇の皇子、紀元一九五五年十二月七日崩す、年七十。

あなかもん 安嘉門 一、宮城十二門の一、宮城の北にある三門の一、偉鑿門の右にあり。

アングラ Angara. 一、河の名、シベリアのエニセイ河の支流たり。

あんき 安危 一、安きと危きと。

あんき 暗記 一、そらに覚ゆること、そらんずること。

アングリアン Anglian. 一、人名、フランスの公爵家にしてナボレオン一世に反抗し、不法裁判後、銃殺されたり(西紀一七七一—一八〇四)。

アングリアン Anglian. 一、地名、フランスのセイアエロアル州の一村落にして湧泉場あり。

アンキアルースケレシ Urtia-Skeleshi. 一、地名、小アジアの一小邑の名、一八三三年、ロシアが自國の利益の爲めに、土耳古と條約を結びし所。

あんきもん 安喜門 一、内裏十二門の一、内裏の北、支那門の右にあり。

あんきや 行脚 一、佛教の語、僧が諸國を遍歴して佛道を修行すること。

あんぐ 暗愚 一、甚しく愚なること、白痴。

あんぐう 行宮 一、天子の行幸のとき、少し座す時の居所の稱、行在。

アングラペクナ Angra Pequena. 一、地名、アフリカの西南にある港、獨乙領の中心たり。

アングリカキヤクベツ Anglican Church. 一、西紀一五四七年、イギリスに起りし、耶穌教教會。

アングル Angles. 一、ケルマニ民族の一族にして、第五世紀に於て、ブリテンを侵し、イングラントの稱を此地に命ぜり。

アングランド Angleland. 一、國名、八二七年リエッセック王、エグマートの建てたる國なり、イングラントの起りなり。

アングレーム Anguleme. 一、佛國の舊市にして、壯麗なる寺院あり。

アングロサクソン Anglo Saxon. 一、英國に住するチュートン人種の名、第五世紀頃、今の獨乙北方より英吉利を犯し、其土人アットン人種を逐ひて王國を創立せるものなり。

あなくわう 安化王 一、人名、姓は朱氏、明の裔なり、正徳五年兵を擧げて反し、後計畧にかり捕へられて死を賜はる、亂十八日にして平ぐ。

あんぐわん 安願 一、高僧、興福寺の住職、世に安願菩薩といふ、承和頃の人なり。

あんけい 安慶 一、地名、清國安徽省の府なり。

あんけいちよ 安慶緒 一、人名、唐の安祿山の子、祿山非望を企つ、慶緒を弑して立つ、後其將史思明に讓る、後隙を生じ、思明に殺せらる。

あんげん 安元 一、高倉天皇の御宇の年號。

あんど 安居 一、佛敎の語、一、僧が日を定めて佛道を研究する會、多く夏季之を行ふ、二、僧の他出せずして毎年夏期に行ふをいふ。

あんこう 動物 一、魚類、硬骨類に屬す、其丈け三二尺にして海底にある海藻、又は砂中に匿れ、只其頭上より生せる鬚

1877
53

を以て 他魚を誘ひ 漸々口の近くに寄りたるときに 俄に之を呑むといふ 吾人の魚を釣ると全く同一の筆法なりといふ。

あんこく 暗黒 暗きこと、くらやみのこと。

アニコナ Ancona 地名 サイラキウス人が建てたる伊太利の真港にしてアドリア海に望み、ベチチアに亞ぐ人口五萬六千 (N. 43.31 E.)

あんこくじ 安國寺 僧 夢想國師が 足利直義に説き勸めて 諸國に創建せしめしものなり。

アンゴラ Angola 地名 アフリカの西海岸にある地方の名、ポルトガル領なり。

アンゴラ Angola 名 アソアトルコの都府の名。

アンコル Angkor 名 カムボジアの首府、アンコルの古の北五哩の所にあり。

あんさい 一、安斎叢書 書名、伊勢貞丈の著、有職故實に關することをかきあつめたるもの。

あんさいしよ 行在所 行宮にたなし。

あんさいくわくもん 行在感問 書名、牧園精の著、南朝三代の事蹟を感問を設け漢文にて書きたるもの。

あんさいくわく 暗殺 殺すこと、人知れず殺すこと。

あんさいくわく 按察 吟味して調ぶること、足利時代に於て地方制度の上を用ひたる語。

あんざつし 按察使 胸中にて計算すること。

あんざん 暗算 胸中にて計算すること。

あんざんがん 安山岩 礦物、一名 富士岩、我國火山岩の主なるもの、長石、輝石等あり 又雲母安山岩、石英安山岩あり、富士、淺間の如きは主として此岩石より成れり。

あんざんじゆ 安産樹 植物、熱帯地方に生ずる植物にして枝は多く分出して両方に巻き風む、葉は よめなにて似て小く厚し、安産の効ありといふ。

あんじ 案紙 下書に用ゆる紙、原稿用紙。

あんじ 晏子 人名、名は嬰、字は仲、諡を平といふ、支那戦國時代の人、齊の釐公、景公に仕へて名相たり、博覽強記にして 節儉力行を以て推されたりとぞ。

あんじ 案 一、考へること、二、氣づかふこと。

アンジー Ajmer 名 フランスの北方にある古代地方の名、已に英領たりき。

あんじのいらん 安史の亂 歴史 唐中世、安祿山と史思明との反を言ふ。

アンジエー Angers 名 フランスのメイン河畔にあるアンジエーの古都。

1455
1387
18

アンジェリコ Angelico 人名、トスカナ州に生れたるイタリヤの畫工なり、ローマに死す、(一三八七—一四五五)。

あんししゆんじう 晏子春秋 書名、晏平仲の著といふは誤なり 平仲の言行を記せるもの。

あんしつ 暗室 光線の入らぬ黒き壁の室、寫眞屋にある暗室の如し。

あんしつ 庵室 隱者の棲む家、いはり。

あんしん 安心 心やすらかにして 心配なきこと、又、佛教にて生死の悟を開きて 少しも心中に恐怖なきことをいふ。

あんじや 行者 僧となるべき人の 未だ成らずして寺に居るもの。

あんじやく 暗弱 身體虛弱にて且つ性質痴鈍なることをいふ。

アンジャベル 植物 オランダ語の轉化せるもの 石竹の一種、葉長く 花八重にして 紅、白又は 白に紅點あるもの 薬用とす。

あんしゆ 庵主 庵室の主人。

あんしゆ 晏姪 人名、宋初代の相、遂に臨淄公に上り 食邑萬二千貫封 三千七百戸を賜ふ、至和元年歿す 年六十五、帝之を悼み 廢朝二日、元獻と諡す。

あんしよ 按司 古の琉球の官名、王子の次に列す。

あんず 杏 植物、幹、枝、葉共に梅に似て花は淡紅なり、花八重なるは結實せず 一重なるは結實す。實は梅に似て大に 味甘く酸し。

あんず 案 一、考へ、思ふ、工夫す、二、轉じて物思をなす、心配する。

あんずうめ 杏子梅 植物、梅の類、花は一重にして淡紅なり、實は酸味少くして杏に似たり。

あんせい 安政 仁孝天皇の御宇の年號。

あんせい の一ざく 安政疑獄 徳川家茂の時 鎖港開港の兩派軋して 井伊直弼の六老となるや 萬白九條尚忠と相通して 鎖港論者の一掃を計り 三條實萬、鷹司輔熙、徳川齊昭及び吉田松陰、賴三樹の民間の士等數十人を捉へて 幽閉し或は死罪に處せしことをいふ。

あんせう 暗礁 海面の下にかくれたる岩石。

あんぜん 安全 危きことなきこと、無事息災なること、恙なきこと。

あんぜん 安全燈 物理、デビー氏の發明せしもの、火炎の周圍を細き金網にて包みたるもの、之を使用す

れば假令爆発性の瓦斯
火炎にふれて發火する
も 爆発は唯網の内部
のみに止る、其の故は
金網が熱を傳導し去り
て 空氣中に散在し外
部の瓦斯を爆發せしむるに足る程の高温度にのぼらしめざ
るに因るなり。

アンセルムス Anselmus. 人名、ルツカアの僧にして
有名なるイタリヤ經文の著者なり、(西紀一〇三六—一〇
八六)。

あんろう 安宗 人名 明の皇帝。

あんろく 安息 藥をなさずして 安かに息むこと。

あんろくーさん 安息酸 化學、記號、 $C_6H_5 \cdot COOH$ 。
遊離して種々の樹脂類にカンメンゾンイン及ペリヤーハルサ
ン中に存す、又馬尿酸となりて牛及馬の尿中に存す、ベン
ゼンの一水素原子を、一のアルキル基にて置換したる物質
は、皆酸化劑によりて、其アルキル基をカルボキシル基に
變ずるに因りて此の酸を生ず、特有の臭氣あり 醫藥に供
せらる。

あんろくーじつ 安息日 耶蘇教にて日曜日の稱。

あんーだ 編板の轉、板を編みて架となし 竹を釣とし
て昇ぐもの、罪人 旅人 手負人などを運ぶもの。

あんーたい 安泰 安かなること、無難なること。

アムタマン Andaman. 地名、曼陀曼。

アムタルキダスーでうやく アムタルキダス條約 歴史
スパルタの將アムタルキダスがペルシアとサーサスに於て
結びたる條約なり、之より小亞細亞都市の過半ペルシアに
屬し、スパルタの勢力はペロポネネサスに縮まり、自餘の
ギリシア諸國に獨立權を許したり(三八七年)。

あんーたん 暗惰 暗くして靜かなるをいふ。

アムタルキダス Amalidas. 人名、スパルタの大將、
西紀前三、七年ギリシア諸邦とペルシアとの和約は、氏が
權祖折衝の功多きによる。

アムダルシア Andalusia. 地名、グアダルキビル河の
流域なるイベニアの一地方なり。

アンチオキア Antiochia. 地名、西紀前三世紀にシリ
ア人の都せし所、オロンチス河畔にあり。

アンチオコス Antiochos. 人名、シキリ王の名、第一
世 二世 三世 四世相繼ぎて王たり。

アンチゴリス Antigonos. 人名、アレキサンドル大帝
の一將、フリヤアの統治者なり。

アンチステテス Antisthenes. 人名、ギリシアの哲學者
ソクラテスの弟子、犬儒學派の祖なり、西紀前四〇〇年
頃の人。

アンチタウルス Anti-Taurus. 山脈の名、タウルス山
より東北に走る山脈なり。

アンチパトロス Antipatros. 人名、武將、政治家、マ
ケドニアの一將、メルサカスの死後は、政權全く其掌中に
歸す、(西紀前三九七—三二七)。

アンチゴリン Antiphrine. 化學、白色小板狀の結晶體
にして、百十三度にて融解す、其水溶液は、鹽化鐵により
て赤色を、亞硝酸によりて青綠色を呈す、解熱劑として醫
藥に供用す。

アンチヘブリン Antiphebrine. 化學、化學上にては之
をアセット、アニリドと云ふ、白色針狀の結晶にして、解
熱劑として醫藥に供用す。

アンチモン Antimony. 化學、記號、 As 、非金属原素
窒素族に屬す、原子量二一〇・二、主として砒アンチモン
礦 As_2S_3 として産す、金屬性の光澤ある白色の脆き固體
にして比重は、六・六七にして四百二十五度にて融解す、
重に合金を造るに用ゆ、活字金は百分中に十七八分のアン
チモンを含める鉛の合金なり。

アンチモンくわーすいろ アンチモン化合物 化學、 A
ンチモンと水素との化合物なれども純粹のもののは得られず
常に水素を混す。

アンチモンーのーごうきん アンチモンへの合金 化學、活
字金、印刷用鉛板、ブリタニヤ金等あり。

アンチモンーのかごうぶひ アンチモンの化合物 化學、
アンチモン化合物水素、三鹽化アンチモン、五鹽化アン
チモン、三酸化アンチモン、四酸化アンチモン、五酸化ア
ンチモン、正アンチモン酸等あり。

アンチモンーイオン 化學、アンチモンは三價及五價の基
型の化合物を造る、而て三價のものは鹽基性水酸化物を作
り五價のもの水酸化物は酸素酸なり、皆僅に鹽基性及酸
性を呈す、故にアンチモン化合物の特性を示す化合物は少
し三價のものは天然に存し安定にしてよく知らる、五價の
ものは強き酸化劑の爲に三價のものより生じ又容易に三價の
ものに還元せらる、アンチモン鹽の溶液は一般の鹽の如く
作用するが故に三價のアンチモンイオンは生じ得るなり、
但し是等の鹽は三價の基型の水酸化アンチモンより導かる
るものにして水溶液中にて加水分解せらる、故に酸の過量
を加へざれば透明なる水溶液は得られず、故に三價のアン
チモンイオンは精確には知られず只無色有毒なりと言ひ得

るのみ、少量は吐瀉に用ふ。
アンチーリバノン Anti-Libanon. 地理 リバノン山の東北パレスナにある山の名。
アンチル Antilles. 群島の名、北米より南米に広がる列島にして、カリブ海を擁す。
アンチルスーリゆう アンチルス流. 地理 大西洋に於ける北赤道海流が、アンチルス列島に至りて出す一支流なり。
あんつん 安童. 人名、元の相、姓は札剌兒氏、新突魯の長子なり、至元二年中書右丞相を拜し、建議する所悉く聽かる、年四十九にして歿す。世祖悼惜し、後成宗の大徳七年東平忠憲王に封せられたり。
あんてい 安貞. 後堀河天皇の御宇の年號。
あんてい 安帝. 人名、東晋十代の主、劉祐の相國宋公となるや、事を以て人をして帝を廢らしむ、在位二十三年。
アンデス Andes. 山脈 南アメリカを南北に貫通して走る大山脈にして百餘の噴火山を有す。
アンデル Andrew. 人名、アンデル、ヒサノはイタリアのヒサに生れたる建築家且つ彫刻家なり。
あんーど 安堵. 堵は牆なり、牆内に安んじ居ること、轉じて安心すること。
あんどうーぶびやう 安堵奉行. 室町幕府の官名。
あんどうーかめ 安藤龜. 人名、安藤朴翁の妻、和歌に巧なるを以て隠々宮中に召さる、新式部と稱す、寛永八年歿す。年三十九。
あんどうーせいあん 安藤省庵. 人名、筑後の柳川藩の儒者、名は守約、性、孤敢、島原の亂の時、病床にありしが、之を聞き、奮然征討に従へり、明の遣臣朱舜水が長崎に流落せしとき、己が傳録の半を割きて之を與へ師事せりといふ。元禄十四年十月二十日歿す。年八十。
あんどうーろけん 安藤素軒. 人名、朴翁の長子にして水戸彰考館の總裁となる。最も我古典に通じ、又和歌よくせり。
あんどうーねんざん 安藤年山. 人名、名は爲章、通稱新介、朴翁の子、素軒の弟、共に儒者たり、水戸義公に仕へ大日本史、禮義類典の編纂に與かる、享保元年十月歿す。年五十八。
あんどうーのぶまさ 安藤信正. 人名、對馬守と稱す、幕府の老中、外臣接待の事を司とる、人となり剛直果斷にして外人に接するに常に強硬を主とす、文久四年十月八日歿す。年五十三。
あんどうーぼくたう 安藤朴翁. 人名、名は定爲、了翁

の子、丹後國桑田郡千歲村の人、木下長嘯の門に入り、歌道を學び、伏見宮に仕へて、從五位内階頭となる。元禄十五年八月廿八日歿す。年七十六。
あんどうーれうたう 安藤了翁. 人名、名は定明、通稱は新太郎、藤原惺窩の門人、伏見宮に仕へて從六位下右京亮となる。寛永十四年歿す。年六十一。
あんどうーてんわう 安徳天皇. 人名、皇第八十代の天皇、御名は言仁、高倉天皇の第一の皇子、在位五年にして、壽永四年三月二十四日、長門國壇の浦にて崩す、壽僅かに八歳なり。
アントニア Antonia. 人名、獨帝フランシス一世の女にして、一七七〇年ダウフィンに嫁し、後又、ルイ十六世に嫁せしが、一七七三年死刑に處せらる。
アントニウス Antonius. 人名、有名なるローマの演説家、コンスルとなれり、スルラに屬して、マリウスの軍の爲に殺さる、(西紀前一四三―一八七)。
アントニオ Antonio. 人名、スペインの僧なり、(西紀一五三〇―一八二九)。
アントニウスーピウス Antoninus Pius. 人名、ローマ皇帝にして、其治世中は國內平和なりき、(西紀八六―一六一)。
アントファガスタ Antofagasta. 港名、チレの港名にして、銀、硝、酸鹽等を出す。
アントン Antony. Antone. 人名、埃及の高僧、通世主義を持し、砂漠に隱棲する事十年、一度アレキサンドリアに召れて亦歸れり、(西紀二五―三五七)。
あんーどん 行燈. 木にて框を作り、紙を張り、中に油皿を置きて、火を點す、あんどう。
アンドラ Andora. 名、グレチー山脈の東部にある一小共和國なり、フランスの保護をうく、住民は皆牧畜を以て業とす。
アンドラ Andhra. 地名、印度南部に於ける王國にして、首府をベンジラとす。
アンドラシー Andrasz. 人名、ハンガリーの政事家、首相の時、奥國の爲に陸州の外交場裡に其敏腕を振ひたり、(西紀一八三―一八九〇)。
アントラゼン Anthracene. 化学、無色の板状結晶體、美麗なる青色の光を放つ、之は石炭を乾溜するとき、ベンゼン及ナフタリン等と共に生ず、又一般化学的方法によりて製せらる、アリザリン染料を製するの原料なり。
アンドラデ Andrade. 山脈、メンゲエラの中央より北走する山脈、アンドラマ、コルガとす。

あんごらちよう 案達羅朝 歴史 印度マダガスカルの王朝の名なり。

アンドラデ Andrade 人名 アンドラデ、チアスはブラジルの武將、イオ、グラナデア、スレ戦及びアラグアイ役は戦功ありて男爵を授けらる、(西紀一八〇七—一八六九)。

アンナ Anna, Anne 人名 英國の英明なる女王、イギリスとスコットランド二國を合併し、又イスパニアの王位繼承戦争に干渉せり、(西紀一六六五—一七一四)。

あんない 案内 一、文案の内の事、二、物事の内情、三、土地の様子を知りて導くこと、四、しらせ、つげしらすること、通知。

あんないじやう 案内状 一、事を告知する状、通牒、二、人を招待するときの干紙。

あんないのへん 安和の變 歴史 冷泉帝の時橘繁延等爲平親王を奉じて、位に即かしめんとせしむ、共謀者源満仲變心し事發覺し、主謀者流刑に處せられたる亂なり、安和四年の事なり。

アンナポリス Annapolis 地名、フアンシー湾にあるノワ、スコチアの港、又米國のワシントンの東二十八哩に

ある合衆國のメリーランドの首府も同名なり。

アンナム Annam 地名 即ち安南にして 交趾支那の北、東京の南にあり、長狭の地方にして地味肥むたり、首府を順化といふ、人情風俗 支那に類似せり 現今フランスの保護の下にあり。

あんないてわう 安寧天皇 人名 三代の天皇、在位三十八年、即位の三十八年十二月六日崩す 壽四十九。

アンナコッフ Annenkoff 人名 露の將軍、一八八〇年中央亞細亞に新領土を開かんとし、萬海鐵道布設を始めた人なり。

アンノボン Annobon 地名、キチア海にあるイスパニアの島なり。

あんいはい 安排 一、程よく排べて置き摺ること、二程よく味をつけること、三、ほど、かげん、具合、程、四、病のはと、病勢。

アンバイア Empire 審判官、仲裁人。

あんいび 安否 安らかなるを否らざると、かはりあるとなき。

アンフィクチオニヤ Amphiticyony 歴史 オリンピア祭を行ふ爲め、隣邦共同せる同盟なり。

アンフィポリス Amphipolis 地名、ギリシャの天神

セラスの安置せられたる山。

アンフィリボス Amphippos 人名 マケドニアの王なり。

あんぶくいでん 安福殿 古の禁中の御殿の名、校書殿の左にあり、東面して春興殿と相對す。

アンブロシウス Ambrosius 人名 西紀四六五年英王となる、五〇八年西サクソニアの王クレテックと戦ひて敗死す。

アンブロシオ Ambrose 人名 トリエルに生れミラン僧正となる、アリア異教の熱心なる反對者、ラテン教會の父と仰がる、(西紀三四〇—三九七)。

あんい 晏平 戦國齊の相、靈公晏公に仕へ、節儉力行を以て重用せらる。晏子のことなり。

あんい 晏平 戦國齊の相、靈公晏公に仕へ、節儉力行を以て重用せらる。晏子のことなり。

あんべい 安平港 臺灣の南部にある港。

アンペラ 舶來の席の一種、パイタラの葉を以て編む、敷物、砂糖包となす、南洋諸國に産出す。

アンペール Ampere フランスの數學者且つ物理學者なり、電流及び磁氣學に關する發見、及電信機に於けること等の應用に付て名高し、(西紀一七五—一八三六)。

アンペールのいはぶく アンペールの法則 物理、吾人もし、電流が足より頗の方に流るる如く、導線に沿ふて、吾人の體を置きたりと假定すれば磁針の北極は、常に左手の方に動かさるべし」といふ電流と磁針との關係を示す法則なり。

アンペールのいせつ アンペールの説 物理、磁氣と電氣との關係を説明せるものにして、磁氣體を以て全くソレノイドと同一なりとせり、其説に曰く鐵の如き磁氣體の分子には各其周圍を流動する電流ありて、微小なるソレノイドをなせども、普通の状態にありては其方向不定なるが故に互に其作用を消滅せしめ、聊の磁性をも表はさず、今或原因により、分子ソレノイドが何れも一定の方向をとりて排列する時は即ち磁氣を帯ぶるを見る。

アンベルス Avenez 地名、ベルギーの都市にして宏壯なる建築物、大なる美術館あり。

アンボイナ Amboina 島名、マレー群島中の一島にして香料を産出す。

あんまろく 植物 木の名、葉は小さく、枝は柔かにして花は朝開き、夕に萎む、まねむのきに似たり。

アンミアヌス Ammianus Marcellinus 人名、ローマ軍隊の一兵卒、而してローマ帝國史の著者たり、西紀三九〇年歿す。

あんい 安眠 やすらかに眠ること、やすやすと

眠ること、やすやすと

眠ること、やすやすと

眠ること、やすやすと

眠ること、うまさ。

あんにめい 闇冥 暗黒なること。

アンモニア Ammonia. ④ NH₃. 化学、鹽化アンモニアに生石灰を混して熱すれば生ず、無色の瓦斯にして特殊の臭氣を有して刺激するなり、比重は〇・五八九、零度に於て一容積の水はよくアンモニアの千容積以上をとかす、アンモニアの水溶液をアンモニア水といふ、有機物の腐敗に際しては多量のアンモニアを發生す。

アンモニアソーダ ④ アンモニア曹達法 ④ 化学、炭酸曹達を製する一法、極めて經濟的の製法なり、之は佛國政府が懸賞を以て募集したる方法にして、發明者の名によりて又ソルベーの法ともいふ。

アンモニウム ④ 化学 一價の基なり。

アンモニウムイオン ④ 化学 之は一價のイオンにして、カリウムイオンに似て性質極めてよし。

アンモニアかごぶつ ④ 化合物 ④ 化学 之には鹽化アンモニウム、磷化アンモニウム、炭酸アンモニウム、硝酸アンモニウム、白金アンモニウム等あり。

アンモニアすい水 ④ 化学 之はアンモニア瓦斯の水に溶けたるものにして、NH₄OH の如き反應を呈するが故に水酸化アンモニウムとも稱す、日本薬局法の一割のアンモニアを含み強きアルカリ性なり、毒虫に螫するたる時此液をつくるは毒虫の注入したる酸を中和するによる。

アンモニアはこう ④ 醗酵 ④ 化学 尿菌の作用にて尿素を分解してアンモニアと炭酸瓦斯となす作用なり。

あんや ④ 暗夜 ④ やみの夜、くらきよ。

あんらく ④ 安楽 ④ 苦勞なきこと、安かに樂しきこと、あんらくいす ④ 安楽椅子 ④ 椅子の一種、普通の椅子より大にして、倚りかかれは足の方の動くやうに作れるもの、又長くして臥する様に作れるもの、其他種々あり。

あんらくじゆいん ④ 安楽壽院 ④ 山城國紀伊郡竹田村にあり 本尊は阿彌陀如来及十一面觀音なり、鳥羽上皇の離宮たりしを保安四年寺院となし給へるもの、上皇の仙骨を葬り奉りて 安樂壽院の陵と稱せり。

あんらくわ ④ 安蘭花 ④ 植物、樹の名、形くわりんに似て春の末に淡紅の花を開く、實もくわりんに似て小く香味少しく異れり。

あんり ④ 行李 ④ 使者のこと、唐の時には隨從の人をいへり、後 行裝の義に用ゆ。

アムルサナ Amurana. ④ 人名 カルムクの汗、スンガリアの酋長、時に實權、又那使臣の手にあるを喜ばず、支那守備兵を追ひ、其將を殺して進む、後支那討伐隊のために

破られ西比利亞に逃れ、瘧死す。

あんわ ④ 安和 ④ 冷泉天皇の御宇の年號。

あんわののみかご ④ 安和帝 ④ 冷泉天皇を申す。

あんゑ ④ 安慧 ④ 人名 高僧、河内國大縣郡の人、兜心院十禪の一人なり、貞觀十年四月寂す、年七十四。

あんなん ④ 安禪 ④ やすらかにれたやかなること、安全なること、無事なること。

あんゆう ④ 安邑 ④ 地名 山西省の解州なり、禹か舞の禪を受けしより百年間夏の首都なり。

あんら ④ 安羅 ④ 國名 辨韓の十二國の一。

あんらくこうしゆ ④ 安樂公主 ④ 人名 唐中宗の女、武崇訓に下嫁す、後帝位に復するや倭臣多く出入す、崇訓死して、武延秀に嫁す、遂に瀛王に斬られ、廢せられ庶人となりしも睿宗位に即き、二品の禮を以て葬る。

あめ ④ 天 ④ 一、大地を覆ふて蒼々たる空、日月星辰のかがれる所、二、日の神のまします所、三、基督教にいふ神の居る所、四、詩歌 戲曲などにていふ神仙 魔王などのすむところ。

あめ ④ 雨 ④ 地文、太陽の熱の爲めに海洋 河川等より蒸發されたる水蒸氣が空氣中に冷却するときは、凝結して細微の水分子となり、其まらりて雲となりしものが、更に水

分子の量を増加して、相結合して點滴となり降下するものを雨といふ、雨は再び泉水、河水、海水となる 故に水は其形を變じて常に大なる循環をなすものなり。

あめ ④ 動物 貝の名、形 稍 よめがさらに似て長さ一寸あまり、肉の色 淡赤にして 味美なり。

あめい ④ 蛙鳴 ④ 蛙の鳴く聲をいふ、其聲 喧しきを以て 置き形容にも用ふ。

あめいし ④ 鉛石 ④ 表面粗にして質もろく、碎けば内部のあめ色なるもの。

あめいせんせい ④ 蛙蟬聲 ④ あめいにれなし。

あめいろ ④ 鉛色 ④ 少し赤みを帯びて、すきとはれる黄色、水鉛の如き色なり。

あめうし ④ 鉛牛 ④ 牛の毛色の鉛色なるもの、黄牛。

あめく ④ 團 さげふ、わめく。

あめしづく ④ 雨霽 ④ 雨のしたたり、あましづく、又涙を形容していふことあり。

あめしやくのーごんじ ④ 雨如車輪 ④ 大雨の形容、漸降大雨 滴如車輪」といふより出づ。

アムダバト Amudabad. ④ 地名 印度ケセラット州の都會にして前世紀には壯麗なりき、人口は十四萬八千餘なり (GEOG. MAGAZINE)

アームド Armed 人名 アームド一世は特部皇

土其其、帝王なり、(西紀一六〇三—一六二〇在位)。

あめつち 天地 天と地、天地。

あめつちのーみち 天地道 天地を通じて公平なる道

理、天理。

あめにーもくしーかぜにーくしけりる 沐雨栴風 風塵の間に奔走して勞苦すること。

あめーあし 雨脚 雨の降るさまを形容していふ語、あまわしともいふ。

あめーのーいはぶら 天磐笥 石にて作れる神代の笥。

あめーのーいはやど 天岩屋戸 神代に天上にありしあめのうはの戸口。

あめーのーうづめーのみこと 天御女命 命の名、天照大神のあま、岩屋戸にかくれ給ひし時、其の御前にて

大神の御心を慰め奉り、又天孫御降臨の時に供奉し、猿田彦命にあひて、之が先導をなしたる女神なり。

あめーのーうな 鰐 動物、魚の名、形、鰐に似て、背より尾に通じて、黒き甲あり、肉は白く又淡紅なるあり

古 近江國より貢物として奉りしもの。

あめーのーたしひーのみこと 天押日命 神の名、高皇產靈神の子、天孫御降臨の時、弓箭を取りて先驅せり、大

伴連等の祖なり。

あめーのーこやねーのみこと 天の屋根命 神の名、高皇產靈神の子、天孫降臨の時共に此國に來る、藤原氏の祖先たり。

あめーのーした 天下 一、國土の總稱、天下、二、日本全國。

あめーのーたなばたひめーのみこと 天之御饗姫命 神の名、天照大神の岩屋にかくれ給ひし時に神衣を織り奉りし神なり。

あめーのーごごたちーのかみ 天常立神 神の名、天地開闢の時に、はじめてあらはれたまへる神。

あめーのーごみーのみこと 天宮命 神の名、天太玉命の孫、神武天皇の即位の時に、齋部をひらきて、天璽、鏡劍を捧げたる神。

あめーのーはこも 天羽衣 天人の着る衣、あまのはこも。

あめーのーはつちをーのかみ 天羽輪神 神の名、天照大神が岩屋にかくれたまひし時に、文布を導りたる神、倭文の祖なり。

あめーのーいははや 天波波矢 あめのまかをやにたれなし

あめーのーひわしーのかみ 天日鷲神 神の名、手力

男神の子、天太玉命の臣、天照大神の岩屋にかくれたまひし時に、木綿を造りし神。

あめーのーらごたまーのみこと 天太玉命 神の名、高皇產靈神の子、天照大神の岩屋にかくれ給ひし時に、幣を造りし神、齋部氏の祖なり。

あめーのーまかこーや 天真鹿兒矢 神代に鹿を射る爲めに用ゐたる矢。

あめーのーまひとつねーのみこと 天目一根命 神の名、天照大神の岩屋にかくれたまひし時に、刀、斧などを造りし神。

あめーのーみあへ 天御饗 天上にての饗應。

あめーのーみなかぬしーのかみ 天之御中主神 神の名、天地開闢の時、始めて高天原に生れたまへる神。

あめーのーみはしら 天御柱 一、天上にありといふ大宮の柱、二、天地をささへもつといふ想像の柱。

あめーのーみや 天宮 天上にある宮。

あめーのーむらくもーのーつるぎ 天叢雲劍 三種の神器の一、なほ、三種の神器の條を見よ。

あめのもりーはうしう 雨森芳洲 人名、名は俊良、字は伯陽、通稱東五郎、號は即ち芳洲、京都の人、木下順庵の門に出で、對島侯に仕ふ、寶曆五年正月六日歿す、年八

十八、八十の時、初めて和歌に志し、古今集を論ずること千遍、其作る所も亦一萬首に上れりといふ、桐葉茶話、漫錄、たはれ草などの著あり。

あめーのーやすーのかは 天安川 天上にありといふ河の名。

あめーふらし 雨降 動物、軟體動物、腹足類に屬す、殻なし、海濱、岩石、海藻の間に這行す、美麗なる彩色あり、頭に、二本の角あり、物にふる時は、紅紫色の汁を出して、身をかくすこと、烏賊の如し。

アメン Amen 耶蘇教にて祈禱の終りに唱ふる語なり。

アメリカ Amelia 人名、プロシア王、フレデリキ、ワイルヘルムスの妃なり、一八〇五年フランスと開戦せんとを王に勸む、西紀一八一〇年崩す。

アメリカ America 地理、南北アメリカを合併したるの稱、其面積は歐洲と、亞非利加を合せたるよりも大にして、アシアよりは尙小なり、東は太平洋に、西は太平洋に面す。

アメリカーいしやし 石椰子 植物、メーケ椰子を見よ。

アメリカーがしんてい United States of America アメリカ合衆國 地理、北アメリカの中央に位する連邦

にして 北は英領カナダに南はメキシコに接す、首府をワシントンと稱す。

アメリカーベスプッチ Amerigo Vesputi. 人名。フ

ロレンスの航海者、始めは西班牙 後には葡萄牙の保護を受けて 前後四回新世界に航せり 其航海は西紀一四九九年より一五〇〇年に渉れるが故に コロンブスの発見より後なれども 此人の名を以て新世界の名とせり、(西紀一四五一一一五一一)。

アモイ Amoy. 廈門。地理 港名 臺灣海峡中にある

一小島の支那貿易港なり、夏港にして年々の輸出入額は頗る多く 茶 砂糖 紙などは其重なるものとす。

あもく 亞目。動物 目の細別を用ゆる分類學上の語。

あや 文。一、物の面にあらはれたる種々の象、模様、二、仕組のすぢわけ、趣向。

あや 織。織物の名、あやを織り出したる うつくしき絹なり。

あや いろ。文色。あやめにちなし。

あや うち。漢氏。應神天皇の朝に 漢人阿知使主父子十七縣の民を率ゐて歸化せり、其族は續縁に巧なりき。

あや がき。綾垣。一、あやのとばり、二、遊獵などの時に特に 地上に張る幕の脚、三、すしめ。

あや がひき。綾甲斐絹。織物の名 綾織の甲斐絹。

あや かる。有。一、物につれて似る、物に感してしもの如くなる、二、他の物に似たる。

あや くず。綾葛。織物の名、葛の皮にて織りたる布にして 綾あるもの。

アヤクチ Ayacucho. 地理 ヘルーの繁榮なる都市 一八二四年西班牙より獨立せり。

あやし。一、考へ及び難し、不思議なり、二、常に異り珍し、三、ふかしく、うたがはし、四、賤し、見苦し。

あやしむ。怪。怪しむ見る、不思議に思ふ、疑ふ。

あや すぎ。綾杉。植物、木の名、棋の一種、其葉は杉に似て やや細く 柔かにして 背は白るし、又之を掛杉とす。

あやつり にんぎやう。操り人形。淨瑠璃に合せて 人形を操り 演劇をなすもの、江戸時代には諸種の音楽と共に 甚だ歡迎せられたり。

あやつる。操。一、糸を仕掛けて 引きつりて はたらかす、二、かけひきをなす、巧にあやなす、うまく取扱ふ さらさずに使ふ。

あや なさ。わざ。文無事。不道理なること、漫りなること、大義にそむけること。

あや なし。無文。わけわからず、條理立たず。

あや にく。生憎。一、意外に、思はず、二、折わるく 機を失ひて。

あや のすまつくり。漢部。雄略天皇の頃 百濟より來れる すまつくり。

あや はがさ。綾羽笠。楡の へぎにてあしるがさの如く作りたる 笠のこと。

あや はごり。漢織。人名、雄略天皇の朝、吳の國より來りて來りたる技藝の工人、蠶織を業とす。

あや びご。漢人。支那漢の人のこと。

あや ふし。危。一、難に近づく、あやなし、二、六か しそうなり、受合がたし。

あや べ。綾部。地名 丹波國何鹿郡にある市街の名、九鬼氏の舊藩地なり。

あや まる。過。一、あやまつ、まちがふ、仕損ふ、二、罪を詫ふ、あやまちを謝す。

アヤン Ayau. 地名、アフリカ東海岸の州の名、獨乙の保護の下にあり。

あや め。菖蒲。植物、草の名、一、古歌にいへるは 本名 あやめくさにして 今の菖蒲なり、なほ其條を見よ 二、今 花を賞するは はなわ。めの略、其條を見るべし。

あや め。漢女。雄略天皇の朝、漢國より きぬぬひ女をたてまつりし事あるより 或ち疑ひする女をいふ。

あや め。文目。わけ、差別、條理。

あや めがさね。菖蒲。端午の節句に用ゐる官家の朝服、色は 花田萌黄なり。

あや めがたな。菖蒲刀。菖蒲をつけたる木刀の稱、五月五日、男の兒の初節句を祝ふに用ゆ。

あや めがひ。菖蒲貝。動物、貝の名 蛤に似て色 紫を帯ぶ、此貝を三つよすれば 菖蒲の花の形に似たるより 此の名あり。

あや めかぶと。菖蒲胃。あやめを束ねて作れる胃、五月五日の節句に あやめだちと共に 男兒の初節句を祝ふに用ゐるなり。

あや めさげ。菖蒲酒。菖蒲の葉を切りて 酒に漬けたるもの、五月節句に飲む。

あや めのこし。菖蒲與。中古 五月五日に 六衛府より奉りし與、根菖蒲をくみて 棟梁とし 細木を以て柱とし 殿の形をつくり、楡の葉と菖蒲とを以て 葺きたるもの。

あや めのせつぐ。菖蒲節句。五月五日の祝ひ。

あやめの一まぐら 菖蒲枕 菖蒲を五六寸程に切りて束ね前後をこよりにて結び 両方の小口に 蓬をはさみたる枕にして 五月節句に用ゐる。

あやめ一ふく 菖蒲葺 五月五日の節句に 軒端にあやめを葺くをいふ。

あやめ一がさ 綾蘭笠 蘭にて編みたる一種の笠。

あやめ一阿諛 阿諛 ことばへつらふこと、面談と同じく 相手の氣に入るやうにすること。

あやめ一貼 動物 魚類 硬骨類に屬す、春の初め 河海の間に生じて 河に浜る 鱗細くして 腹白し 雌は首小

さく、身 廣ろくして 色 黄を帯ぶ 雄は身狭くして 淡黒し、秋の末 また河海の間を下りて 子を産み 後に

死す、わい、香魚。

あやめ一宵 似る、わやかる。

あやめ一滴 滴 流れ出づる、滴る。

あやめ一熱 熱 熱して赤くなる、つゆ。

あやめ一こくむ 貼子液 貼の子を すくひとる。

あやめ一りたら 愛猷織里達 人名 元の系屬、順帝の子、至元十三 皇太子となる、二十四年字羅雅、閣下を犯すに方り出て走り二十七年北庭昌に走り、後二年明兵應昌を襲ふに及び道れて其終る所を知らず。

アユチア Ayuhia 地名、シヤムの舊都の名、メナン河上にありて王宮 寺院 壯麗を極む。

あやめ一なめ 貼並 動物 海魚の名 まうどの類、身狭く 鱗細く 眼口 大ならず、身 茶色にして黒き斑あり 尾に赤みあり 味美なり。

あやめ一せう あゆひ抄 書名、富士谷成章の著、國語の六種の活用を論じたるもの。

あやめ一はこぶ 歩行 歩みて行く。

あやめ一もどき 貼擬 山城國の桂川に産す、貼に似て口のはどりに泥濘の如き鬚あり、大なるは一尺ばかりに達するものあり。

アユルババトラ Ayur-ba-batra 愛育拔抜力八達 人名、元の世祖の孫、ダルマバラの子、武宗の同母弟なり 兄に次ぎて 西紀一三二一年位に即く 元の仁宗即ち之れなり、(西紀一三二五—一三三〇)。

あやめ一鰻魚 動物 魚の名、形 鰻に似て 頭長く 鱗 小く 色は黄黒にして 斑點あり、小なるは一、二尺、大なるは三尺位あり、味 淡し 北海に産す。

あやめ一阿刺 人名 韃靼五刺部の重臣、後 部長字來に襲はれ死せり。

あやめ一魚 魚を料理したる後に 尚 骨に残りの肉のつ

きたるもの、二、轉じて 善き所をとり、其餘りのすつべきもの、殘餘のこと。

あら 嗚呼 嗚にねなし。

あら一あら 粗粗 凡そ、さつと、大略。

あら一あらし 粗粗 甚た粗し、龐末なり。

あら一あらし 荒荒 甚た荒し、極めて亂暴なり。

アラウッチン Alai-uddin 阿老瓦丁 人名、サエラルウチンの子、父につぎてアリーのサルタンとなる 勇略にして 全印度を統一する勢ありしが 西紀一三二六年に死し 後、國も亦瓦解せり。

あら一いつちん 阿老瓦丁 人名 元代の砲匠 西域木 砲軍の人、其徒に推されて京師に入り、官舎を給せられ、大砲を作る、後砲を作りて功あり、包鵠驛平軍匠を授けられ、萬戸に副たり、皇慶元年卒す。

あら一いろ 荒磯 荒波のうちよせ来る磯邊。

あら一いろ 荒磯 荒磯に 打ちよする浪。

あら一いろ 荒磯 荒磯に 打ちよする浪。

あら一いろ 荒磯 荒磯に 打ちよする浪。

あら一いろ 荒磯 荒磯に 打ちよする浪。

あら一いろ 荒磯 荒磯に 打ちよする浪。

あら一いろ 荒磯 荒磯に 打ちよする浪。

あら一いろ 荒磯 荒磯に 打ちよする浪。

あら一いろ 荒磯 荒磯に 打ちよする浪。

あら一いろ 荒磯 荒磯に 打ちよする浪。

あら一いろ 荒磯 荒磯に 打ちよする浪。

○ 中學全科辭典

るや之れに會し西洋の事情を知り、西洋紀聞、采覺異言を著す、白石家實にして勉學に資なれども鋭意不撓、遂に大成す、性傲儒不爾氣あり、著書多し、從五位下筑後守となる、享保十年五月十九日卒す、享年六十九。

あらいのせき 荒井關 地名 鎌川時代に於ける東海道

の有名の關の一なり 駿河國濱名郡新居町に其趾を存す。

アライヤマ Alai-yama 阿ライ山 地理 山の名、カシガルヒエルガナとの間にある山なり。

あら一う 荒鷗 動物 鳥の名、鷗飼が 初めて使用する

の鷗のこと、馴れぬ鷗。

あら一うみ 荒海 荒浪の立つ海、大海。

あら一うみのしやうじ 荒海の障子 清涼殿の弘廂の

北にある障子、荒海に手長 足長の障をかきたるなり。

あら一いづ 鷹蝦夷 地名 三蝦夷の一にして 之れは中

間にあり、毎年他の蝦夷の如く入貢せず、齊明帝の時阿部

比羅夫を征しせり。

あらかじぬ 豫 まへかたより、かねて、まへびろに。

あら一がね 粗金 一、山より堀り出したる儘にして

未だ精錬せざる金屬、二、鏡。

あら一かは 荒川 川の名、武藏國秩父郡大瀧村より發

し 下流は豊島川となる、貼を産して名あり。

あらかば 粗皮 一、皮の未だなめざざるもの、毛皮
 生皮、二、粗がら。
 あらかは いひひら 荒川家衛 人名、清原武真の子、
 三年役の時、兄真衡の敵吉彦秀武を援けて、源義家の軍
 たりしが、義家の弟義光の來り援くるに及び誅せらる。
 あらかは たけさだ 荒川武貞 人名、清原竹貞の子、
 後三年の役に誅せらる。
 あらかは まひら 荒川真衡 人名、清原竹貞の子、後
 三年の役に誅せらる。
 あらかは てんざん 荒川天散 人名、名は秀、字は敬
 之、山城國の人、伊藤仁齊の門に學び、最も經史に通曉せ
 り、紀伊侯に仕へて儒官たり、享保二十年歿せり、年八十
 三なり。
 あらがひ 諍 争におなじし。
 あらかべ 粗壁 粗塗のままなる壁にして、未だ、な
 かぬりをせぬ壁。
 アラカン Arkan. 地名、メンケル湖の東にある一帯
 の地にして、土地低く、砂糖、大麻、米等を産す。
 あらき 窟宮 古代、未だ屍を 葬らざりし前、暫し
 收め置きし所をいふ。
 あらき 粗木 材木の切り出したる儘にて、皮を去ら

ざるもの、樸。
 あらきしまのいかみ 荒木志摩守 人名、攝津國の
 人。馬術を、齊藤好玄に學び、其の奥義を研ひ、荒木流馬
 術の祖なり。
 あらさだ ひさたい 荒木田久老 人名、名は正實、通
 稱は宇治主税、五十槻國と號す、伊勢内宮の神主、荒木田
 久世の嗣子なり、加茂真淵の門に學び、最も古典に通じ、萬
 葉集に精曉せり、「機ノ落葉」を著す、文化元年八月十
 四日歿す、年五十九。
 あらさだ もりたけ 荒木田守武 人名、伊勢内宮の神
 主、俳諧の祖と稱す、天文十八年八月八日歿す、年七十七
 歳なり。
 あらさだ 一れい 荒木田麗 人名、慶應雅の妻、博覽強
 記にして、「池のもくづ」「月のゆくへ」等の著あり、安永
 年間頃の人。
 あらき またじもん 荒木又右衛門 人名、劍術家、名
 は吉村、柳生但馬守、宮本無三四等に就きて劍法を學び、
 郡山の城主本多甲斐守政勝に仕へて、劍道師範役たり、後
 義父の仇河合又九郎を討ち、後、薩摩家に仕ふ、寛永十四
 年八月廿四日歿す、年四十一。
 あらきやう 荒行 修験者などの、甚しき艱難をなめ

て 修むる行。

あらく 散 ちりになる、ちらばる。
 アラクセス Araxos. 河名、西部亞細亞にあり、アルメ
 ニヤ高原に發源し、寬定吉思海に入る、露、波の境をな
 す。
 あらけなし 暴 荒らわらし。
 アラコ Arago. 人名、フランスの有名な物理學者
 且つ星學者なり、西紀一八三〇年天文臺長に任ぜらる、(西
 紀一七八六—一八五三)。
 アラントア Arachosia. 地名、古の波斯帝國の一州に
 して、現今のアフガニスタンに當る。
 アラント Aragon. 地名、スペインの西北部にある一
 州の名、昔時は、一王國たりき。
 あらごも 荒鷲 新しき鷲にして、之にさはれば粗々
 とするもの稱。
 あらし 嵐 雨に強き風の交りて、吹き荒ぶもの、風雨
 のこと。
 あらし 粗 細やかならず、粗末なり、麁。
 あらしのうへ 嵐上 嵐の吹く上の方。
 あらしな 荒男 荒らくれたる男。
 あらしやま 嵐山 山の名、山城國龜山の南、大堰川

の上方にわり、さくら、紅葉などの名所、京都附近に於け
 る最も佳勝なる地なり。
 あらぢ 荒 一、荒れしむ、害ふ、二、荒るるにまかす
 辯はずにたく、三、騒がす、劫やかす。
 アラスカ Alaska. 地名、北米合衆國の領地、北アメ
 リカの北端にあり、一帯帯水にて、アジア大陸と相對す
 住民はインド人及、エスキモー人より成る。
 あらがめ 桃花染 染色の名、薄赤き色、桃色。
 あらたまの 新玉の 年月日、夜、春などにかけてい
 ふ枕詞。
 あらたまる 改 變る、新になる、よくなる。
 あらたまる 革 病重くなる、危篤となる。
 あらたむ 改 一、新にす、變ふ、二、糺す、調ふ、吟
 味す。
 あらたよ 新代 一新まりたる代、二新したる御代。
 あらちのせき 新發關 古時、越前國新發山にあり
 し關、日本三關の一。
 あらちやま 新發山 越前國敦賀郡にあり、古、新發
 關のありし所。
 あらじやう 荒造 未だ全く出来上らぬもの、下せし
 らへ。

あらづもり 粗積 ㊦ たはかたに はかること、概算。
あらて 新手 ㊦ 未だ戦はずして 疲れぬ兵隊。
アラック酒 ㊦ 植物 ワミヤシを見よ。
あらと 粗砥 ㊦ 砥の面の粗々しきものにして 粗研に用ゐる。

あらとぎ 粗研 ㊦ 粗砥にて 研きたるままの研。
あらとぎ 新床 ㊦ 畳の床の新しきもの。
アラトス Aratos ㊦ 人名 ヤリシアの人にして アケア

アラトス Aratos ㊦ 人名 ヤリシアの人にして アケア
の同盟の主張者なり。マケドニア王 フイロポの爲めに殺
害さる、(西紀二七一―二二三)。
アラナジュン Alanahun ㊦ 人名 印度の判臣、唐太宗

アラナジュン Alanahun ㊦ 人名 印度の判臣、唐太宗
使を以て 交通を求む アラナジュン之を拒む 遂に敵軍
に圍まれて 擄とる、(西紀一六五〇年)。
あらぬたもひ 不有思 ㊦ あるまじき思。
あらぬかた 不有方 ㊦ 思はざる方、意外なる方。
あらぬこと 不有事 ㊦ 一、意外なること、二、無實な
ること。

あらぬさま 不有様 ㊦ 思はぬ様。
あらぬすさび ㊦ 有るまじき戯、あるいたづら。すさ
びは 自分の心の進みてなすことにて慰みなり。
あらぬすぢ 不有筋 ㊦ あるまじき筋。

あらぬすぢ 不有筋 ㊦ あるまじき筋。
あらぬすぢ 不有筋 ㊦ あるまじき筋。

あらぬものたもひ 不有物思 ㊦ 有るまじき物思。
あらぬり 粗塗 ㊦ 初めに粗く 塗ること、下塗、中途、
上塗に對していふ。

あらは 新刃 ㊦ 刃物に新につくる刃。
あらはか ㊦ 植物 木の名、楓の一種、葉は七ツにさけ
て 下に白き毛あり、花は枝の末にさく、下野日光山に
多しといふ。

あらはしごも 願衣 ㊦ 裏腹のこと、裏腹の色には
親疎に従ひて 濃淡のちめありし故に 之によりて 親、
祖父母、兄弟の爲などいふことの知らるるものなるより
かく云ふなり。

あらばしり 新走 ㊦ 新酒の最も早く出来たるものをい
ふなり。
あらはず 願、現 ㊦ 一、現になす、かくしたるを公にす
二、書を作りて世に出す、著述す。

アラハバード Allahabad ㊦ 地名 印度北西州の首府に
してガンガ河とジャムナ河との合する所にあり、鐵道にて
カルカッタ市及ボンブー市と相通じ人口十七萬五千あり、
〔5,92N. 81,50E.〕

あらはならぬはふれい 不現法令 ㊦ 表だたぬ法令、
古、天皇(三后)の親戚若しくは三位已上の人 死罪を犯

あらはならぬはふれい 不現法令 ㊦ 表だたぬ法令、
古、天皇(三后)の親戚若しくは三位已上の人 死罪を犯

したる時 直に處分せず、まづ隠して 減刑を天皇に奏請
せしむ。
あらはに 願、現 ㊦ 一、隠れずに、あらはれて、覆物
なくして、二、隠れずに、發きて。

アラバマ Alabama ㊦ 地名 合衆國の一州の名 アアラ
マ川を横斷す、鐵 石炭等を産出す。

アラハン 阿羅漢 名 宗教 無明を打破して涅槃に入るの
聖者を言ふ。
アラビ Arabi ㊦ 人名 西紀一八八二年埃及に起りし革
命戦争の時の主領たり。

アラビ Arabi ㊦ 人名 西紀一八八二年埃及に起りし革
命戦争の時の主領たり。
アラビア Arabia ㊦ 地理 半島の名、アジアの西端に
ある 世界最大の半島、大なる砂漠あり、氣候炎熱、交
通機關不完全、唯隊商あるのみ、昔時は世界文明を支配
せし地。

あらひがは 洗革 ㊦ 桃色に染めたる革。
あらひがはのよつひ 洗半鐵 ㊦ 桃色に染めたる革を
織したる鐵。

あらひぐま 洗熊 ㊦ 動物 熊の一種、凡て食物は必ず
水にて洗ひたる後 食すといふ。
あらひざらし 洗酒 ㊦ 衣服などを 洗ひて 白くさら
したるもの。

あらひざらし 洗酒 ㊦ 衣服などを 洗ひて 白くさら
したるもの。

あらひじり 荒聖 ㊦ 荒々しき行爲をなす僧。
あらひじりがみ 現人神 ㊦ 現世に 人の體をなして
あらはれたる神。

あらひはり 洗張 ㊦ ふるき衣服を洗濯し 板にはりて
乾かし 淨かにすること。
あらひよね 洗米 ㊦ 洗ひ清めたる米にて 神などに供
ふるもの、即ちせんまい。

アラアヒコム ㊦ 植物 苜蓿科のアカシヤ屬に屬する數種の
木本より取りし塊狀物質にして、水に溶解す、工業及醫用
とす。

あらぶ 荒 ㊦ 一、荒る、荒れたつ、二、開けずにあり、
荒る、荒茫、三、情 疎くなる。

アラフラ Arakura ㊦ 地名、大西洋の一部にして 濠州
の北部にあり。

アラベラ Arabela ㊦ 人名 ウェームス一世の姪にして
エリサベス女皇の崩御後、王位を望みたりとの疑を受け
幽閉せらる、西紀一六一五年遂に歿す、年三十八。

あらまし 増 ㊦ 行末の心あて、こころづもり、預期。
あらまし 増 ㊦ 行末の心あて、こころづもり、預期。
あらまし 豫事 ㊦ 豫しめ思ひはかりておくこと、
アラマンニ Amanani ㊦ 人名 イタリアの人にして

詩人にして 日外交家なり。
アラムト 人名、元の世祖の弟、旭烈兀の將にして武名を揚げたる人なり。

あらみ 新刀 新にきたへたる刀。

アラン 地名、ラーベタナイスとの間にあるスキテ人の國名。

アラン Alan. Allen. 人名 一、米國の牧師にして著作家、西紀一八四一年に生る、二、英國の博物學者にして西紀一八四八年に生る、三、米國の士官にして革命戦争の際にカナダに侵入して虜となる、(西紀一七三八一—一七八九)、四、イギリスの化學者にして且つ慈善家なり、(西紀一七〇一—一八四三)。

あらんさい 遠藍菜 植物 田野などの濕地に生する草なり。

アラソフエス Aranzuez. 地理 市の名、アドリッドの東南にある西班牙の一市府なり。

あらめ 荒布 植物 海岸の名、海産の石につきて生ず、葉の形 扁平にして長く、叢生す、色黒く、縦に粗き皺あり、酒して食用とす。

あらめーたごし 荒目織 織の たごしかたの名、糸目を粗くとはして織せるもの。

あらもの 荒物 齋所道具 及び 草鞋 紙などの如き粗き器の稱。

あらやま 荒山 一、險阻なる山、二、神佛などの崇りある山。

あらゆ 荒湯 湧きかへりて 恐ろしき温泉。

あらゆる ある限りの、あるすべての、所有。

あららぎ 蘭 植物 草の名、深山に生ず、春の初め舊根より出芽す、葉は さばうしゆに似て縦筋なし、花は 葦に似て大きく、六瓣にして色 深紫なり、又白きあり 實も亦葦に似たり 根は水仙に似たり、一名 ぎやうじやにんにくといふ。

あららざ 蘭 植物 樹の名、いちぢに木なし。

アラット Arrat. 山名、アルメニアにある山にしてノアの船の止まりし所と稱せらる 露國に屬す。

アラリック Alarich. 人名、アラリック一世は 西ゴート王、四世紀の終より五世紀の初めに亘り、ギリシャを征し、イタリヤを攻めしが 西紀四一二年コモンサに於て死せり 年三十四。

アラリック二世は西ゴート王、其領地は ゴール全部及びイスパニアの大部を占めしが 一旦戰敗れ 西紀五六七年クロウイス王に殺さる。

アラル Aral. 地理 湖名、トルキスタンの湖水にして長は二六五哩、巾一四五哩あり。

あられ 霰 地名、空中の水蒸氣 急激に凍結して球状又は 不規則の形をなして降るものをいふ。

あられ 霰 一、織文、又は染文の名、いしだたみの細かきもの、二、餅を小さく賽目に刻みて、いうたるもの、三細かき糊をいりこがして 湯に點じて飲むもの、四、みぢんこに砂糖をませて 小く方形に切りたるもの、五、砂糖を賽目に固く製せるもの。

あられいし 霰石 礦物、岩石の隙隙又は罅床の中に存在し 時に温泉の水より沈澱することあり、成分は 方解石、大理石、石灰石と等しく、炭酸カルシウムより成り塊状 粒状 樹枝状等をなす、色は 白、黄、赤、綠色等あり 酸類に溶け易し。

あられがひ 霰貝 動物 貝の名、さざこの類、殻の外側に あられの如きもの並び着きて 其のさま 恰かも霰蓋の如し。

あられざけ 霰酒 濁酒の麴の 溶けずして 霰の如くなりて交れるもの。

あられもなし 有るべくもなし、意外なり。

あらあはくが 新井白蛾 人名、有名なる易學者、名

は祐登 字は謙吉、白蛾は其號なり、江戸の人にして古典に通し 和歌をよくせり 寛永五年五月十四日歿す 年七十八。

あらあはくせき 新井白石 人名、政治家且つ學者、名は君美 字は在中 白石は其號なり 江戸の人、徳川家宜の侍講たり、政務に參與して 功勞最も多く 從五位下筑前守に任せらる 博覽強記にして 和漢、洋を兼ねて其著す所の書は三百餘種なり、享保十年五月十九日歿す、年六十九。

あり 蟻 動物 節足動物 昆虫類 膜翅類に屬す、頭、胸、腹の三部に判然たる區畫あり、口は物をかみ又は液をなむるに適す、翅は 膜質にして兩對共に線少し、完全なる變態をなす、蟻は極めて複雑なる社會生活を營む、其數五十萬に達することありといふ、雄雌は翅を有するもの所謂羽蟻にして 夏秋の候 群をなして飛ぶ、巢中にあるものは 其多數、蟻蟻にして、翅なき通常の蟻なり、社會一切のことを經營分擔して 決して秩序を紊すことなし 蟻は時々、群をなして他巢を襲ふことあり 又他巢を奪掠して 幼虫を捕虜となし、之を育てて、其生長したるものを奴隸として使用す、蟻は ありまきと共に共同生活をなす即ちありまきより甘き液を行るを以て之を保護し、冬期

間は其節を保護す、暖氣に至れば之れを 樹枝上に移すなり 實は虫類社會としては驚くべきものなり。

アリ **Alī** 人名、ムハメッドの従兄にして 其弟子の一人、人格は高尚にして義氣に富み 勇敢にして愛情に富み、西紀六五六年 カリフとなりしが 後 バグダッドの寺院にて暗殺されたり。

アリ **Alī** 地理 河の名、ローマ府の附近にてナヘル河の支流なり。

アリ **Arī** (Harriv) 地名、ヘラットの古名なり。
ありあけ 有明 月が未だ天にかかりたる儘に 夜のわくこと、残月。

ありあけ 有明 名香の名、ちんの一稱。
ありあけ あんどん 有明行燈 終夜、火を點し置く行燈のこと、日夜燈。

ありあけ のはま 有明渡 瀆の名 讃岐國豊田郡にあり 風景甚だよし。

アリアーじんしゆ アーリア人種 人種の名、原始時代において 中央アジアに居を占めしが 漸々 或は西して 欧州に入り 或は南して インド、ヘルシヤに入る、欧州に入りしものは分岐して ケリシヤ、ラテン、スラブ、ゲルチ等の人種となる 南したるものはインド、ヘルシヤ

等の人種となる。

アリアッテス **Aljattes** 人名、リナアの有名なる王、西紀前六八一年位に即き、メシア王と戦ひしが 日蝕にあふて 遂に和睦す、在位實に五十七年。

アリアノス **Arrianos** 市名、伊太利のナポリの東北、一五〇〇呎の高所にある、都市にして、壯麗なる寺院等あり。

アリアーバタ **Aryabhatta** (Aryabhat) 人名 有名なる印度の數學者且つ天文學者なり、代數學の創始者にして地球自轉説を唱へ 地球直徑の計算をなせし人なり。

ありあふ 有合 折よく其の處にあり。
アリアン **Aryan** 人種 梵語にして地中海より小亞細亞、波斯、アフガニスマン、印度に住する人種の名。

ありありて 在在 國 その儘にありて。
ありありて 有有 國 はつきりと、明白に。

ありりう 亞流 一、第二流に立つ人、二、他の流を汲む人、同じ派の人。

ありりうさん 亞硫酸 化學 記號 H_2SO_3 無水亞硫酸即ち亞硫酸瓦斯の水溶液なり、二酸化硫黄を水に溶せば次の反應によりて此酸を生ず、
 $SO_2 + H_2O = H_2SO_3$

強き酸にして 水に二酸化硫黄を充分に溶して飽和せしめたる後 冷度で冷却すれば 結晶水を有する結晶を生ず 其の組成は $H_2SO_3 \cdot SH_2O$ なり。

ありりうさん 亞硫酸 化學の SO_2 二酸化硫黄を水に溶かせば得らる、其反應式は次の如し。
 $SO_2 + OH_2 = SO_3H_2$

ありりうさん がす 亞硫酸瓦斯 化學 二酸化硫黄又は無水亞硫酸とも稱す、(二酸化硫黄を見よ)。

ありりうさん ーろた 亞硫酸曹達 化學 $SO_3 \cdot Na_2$ 酸化し易きを以て還元剤として寫眞術に用ゐらる。

アリウス **Arius** 人名 アレキサンドリア教會の長老なりしが 教説の異議より破門せられ 後 赦されしと雖も不意に殺害せらる、彼はアリアン派の祖師。

アリオスト **Ariosto** 人名 有名なるイタリアの詩人 オルランド、フュリオアリは有名なる著書なり、(西紀一四七四—一五三三)。

ありわう やま 有玉山 地理、高間山とも云ふ 後醍醐帝笠置没落の時、此所にて捕はれ給へり。

あり 一か 在所 有るところ、すむところ、所在。
あり が 一ちやうはく 有賀長伯 人名 以敬齋と號す 京都の人、大阪に住む、和歌をよくせり、「歌枕秋の寐覚」

を著す、元文二年六月二日歿す 年七十七。

あり が 一ほし 欲存 國 ながら(まほし)。
アリカント **Alicante** 地名 スペインの要港、地中海に面す、港内に要塞の設けあり。

あり きたり 在來 國 元よりあること、もとよりあり、ままなること、從來。

あり ぎぬ 鮮衣 國 鮮かなる衣、うるはしき衣。
あり ぐ 歩行 國 あるくにれなし。

アリクアハ **Arikhuha** 人名 阿利不哥はツルイの子にして世祖の弟、憲宗の死するや ハラホルムにありて蒙古の大汗と稱す、西紀一二六四年 世祖に敗られて遂に降る。

あり ぐひ 食蟻獸 動物 南米に産する哺乳類にして 食糞類なり、口は管狀にして長吻の先端は開き小さく齒なし 舌は圓長にして、體長く毛深し、尾長し、前肢の爪は大にして掘地に便なり、舌は糸狀にして粘氣強き液あり、依て以て蟻を捕食す。

あり ぐるし 在苦 國、世に長らふること苦し。

あり さま 有様 國 有るさま、様子、體裁。
アリザリン **Aizarine** 化學 アンソラキノンの誘導體中最も重要なものなり、美麗なる赤色染料にして、ア

ル・シードとなりて蕨根中に存せしを以て以前は之より製出したりしが、現今は、全く人工を以て製するに至れり故に蕨根の培は、大に廢絶せり。

ありしよ 在世 一、すぎさうし世、二、今は世になき人の、未だ、生きてありし時。

アリス Alice 人名、西洋にて個人名として、廣く用ひらる。

ありがはののみや 有栖川宮 王家の名、四親王家の一、後醍醐天皇の皇子好仁親王より出で給ふ。

アリストタゴニス Aristagoras 人名、ギリシアの天文學者、サモスの人なり、地動説を始めて唱へし人なり。

アリストタルコス Aristarchos 人名、ギリシアの天文家批評家、西紀前一六〇年頃の人。

アリスチッポス Aristippos 人名、ソクラテスの門弟なり、キレニアク哲學派の創設者。

アリスチデス Aristides 人名、アテチの名將にして日政治家、西紀前四〇〇年、マラトンの役には、ヘルシヤ軍を破り、翌年、アルゴンに選ばれしが、アテチの防備上、陸軍擴張説を主張せし爲に、其政敵テミストクレスより国外に放逐せらる、後、四八〇年、ヘルシア第三役の起るや、歸國して、敵をツラミスに於て破る、後、アテ

チの憲法を改革して、財政を掌せり、西紀前四八八年頃歿す。

アリストテレス Aristotle 人名、トラキアの人、ギリシアの哲學者にして、アレキサンドル大王の師たり、(西紀前三四一—三二三)。

アリストファニス Aristophanes 人名、ギリシアのアテチの喜劇作者、作曲實は五十四あり、現今傳ふるもの僅に十一にすぎず、(西紀前四四四—三八〇)。

ありすひ 蟻吸 動物、鳥の名、きつさき一種、眼赤くして、その周りに白き環あり、頭と背とは、淡褐にして、黒き斑あり、喉より腹は淡黄にして、黒き斑あり、尾は長く淡黄なり、脚も淡黄なり、舌は細長くして、能く小虫を吸ひ捕ふに適す。

ありち 荒礫 ありその約。

アリゾナ Arizona 地名、アメリカ合衆國の南部の一地方にして、金銀銅鐵に富む。

ありたーやき 有田焼 物名、元和の初尾前國松浦郡有田山中より白地を發見して造りたる磁器なり。

ありちぐく 沙梭子 動物、乾燥せる砂中に摺鉢形の穴を掘り其底の砂中に住み蟻を捕食する黄灰色の小蟲なり、昆虫蟻中脈翅類に屬す、一對の大顎ありて落來る蟻を捕食

す、之はウスバカゲローの幼蟲にして砂中にて蛹化し、後穴底より羽化す。

ありつか 蟻塚 蟻が泥土をつみて作れる巢のこと、塚の如し、即ち、蟻塔なり。

ありつかはし 似つかはし、ふさはし。

ありつく 有付 一、似合ふ、二、住みつく、住み馴る、三、頼を得る。

ありていに 有體 ありのまま、あからさまなること、うつかりなく。

ありとあらゆる 有限 あるかぎりの、すべての。

ありとある 有限 ありとあらゆるにれなし。

ありごほし 植物、木の名、山中の陰地に生ず、葉はくくに似て、短かくして尖り、葉の本毎に長き刺あり、春葉の間に白き花を開く、後、圓き紅き實を結ぶ、冬を経て落ちず。

ありなしぐも 有無雲 ありが如く、無きが如く定まらぬ雲。

ありなしに 有るかなきかに、かすかに、ほのかになどの意なり。

ありなしのひ 有無日 此日は村上天皇崩御の日にて、朝政を行はせられぬ日なれども、急なることあれば

行はせらるることありしよりいふ、中古、五月二十七日の稱なり。

ありのすさびに 有るに任せて、あるにつけて。

ありのたふ 蟻塔 一、草の名、野に生ず、高さ五六寸、細き莖を出す、葉は對生す、一名のみどりぐさ、二ありづかに同じ。

アルハンゲルスク Arhangelsk 地名、露西亞の都邑にして、メルセリンスクの東南にあり、オルレンブルグの管轄に屬する鑛業市なり。

ありはらなりひら 在原平 人名、阿保親王の第五子天長中、兄の行平と共に、姓を在原と賜ふ、世に在五中将と云ふ、和歌に巧みにして、六歌仙の一人なり、元慶四年五月、五十六歳にて歿す。

ありはらゆきひら 在原行平 人名、阿保親王の第二子承和中、藏人に補し、從五位に叙せらる、仁和の初、陸奥出羽按察使を兼ねたり、寛平五年歿す、年七十六。

ありふ 有經 世にながらへて、年月を経過す。

ありふるわさ ありふるること、世を経る事業、生活を爲す業、世にながらへて居ること。

ありまき 蟻卷 又あふらむしと云ふ、竹又は草木の嫩葉の間に生ず、形、黍粒の如く、身、圓く、頭尖りて、二

ありはらなりひら

つゝの觸枝及び六本の脚を有す、色、緑なり後に羽化する、甘き汁を出す、蟻と共棲するを以て有名なり。

ありまーさう 有馬草 草名、葉は棕櫚の若芽の如し、春、穂の末に花を開く、黄、白等種々の色を生ず、攝津有馬に多し。

ありまーやまどーのかみ 有馬大和守 人名 初め、天真正傳神刀流の刀槍を學び、遂に一名を爲す、有馬流御衛の祖なり。

ありみちーしんわう 有道親王 人名 真敬親王の子、文化五年二月、光格天皇の皇子となり、九年三月、青蓮院に入り、剃髪して尊崇と云ふ、後、天台座主となる、天保三年九月薨す、年三十一。

ありんさん 亞磷酸 化學 PO_3H_3 三鹽化磷に水を用せしめて作る、熔解點七〇、一度なる白色の結晶なり、熱せば分解して正磷酸及酸化水素となる其反應式は $3PO_3H_3 = 3PO_4H_3 + 3H_2$

にして又空中に置せば酸素と吸收して正磷酸となる、次亞磷酸に類する還元力有す。

ありむらーちさるもん 有村治左衛門 人名 名は兼清、薩摩の人なり、惟賢憂國の士にして、劍法を好くす、萬元年三月三日、水戸の浪士等と、井伊直弼を櫻田門外に刺

し、日比谷門外にて自殺す。

ありやう 有嶺 地名 ありすがた、ありさま、嶺子。

ありまーじやう 有馬城 地名 池田信輝のよりしどころ攝津國池田町の東北にあり、今、僅に其跡を存す。

ありわう 有王 人名 俊寛僧侶の僕、俊寛の流されて、碓氷嶺に居るとき、配所に至りて仕ふ、俊寛の死するに及び、其遺骸を火葬しこれを携へて、京に歸り、後、高野山の僧となる。

ありわぶ 在諾 生在へがたく思ふ、あり悪く思ふ。
ある 荒 荒びさわぐ、あれたつ、烈しく起る。荒くなる、三、破る、まかせてある、手を入らずにある、四、賦乏しくなる。

アール Aar 地名 瑞西の大河にして、長さ、殆んど二〇〇哩、瑞西の國境に於てライン河に合す。

アルー Arou 地名 南アフリカの西南にある、八十有餘の珊瑚礁より爲る群島なり、名義上モルカ政府のテリトリーに屬す、土民概ね耶蘇教を奉ず、眞珠、蠟甲等を輸出す。

アルガイル Argyll 地名 スコットランドの西岸にある一州なり。● **アルバーン** Albany (ケ-ハ) 地名 佛蘭西の西海岸にある灣にして、リアー河これに注ぐ。

アルカシオン Arcachon 地名 佛蘭西の西海岸にある灣にして、リアー河これに注ぐ。

アルカシオン Arcachon (ケ-ハ) 地名 佛蘭西の西海岸にある灣にして、リアー河これに注ぐ。
アルカシオン Arcachon (ケ-ハ) 地名 佛蘭西の西海岸にある灣にして、リアー河これに注ぐ。

アルカチア Arcadia 地名 モレアの中央にある高地にして牧畜に適す。

アルカチアーれんじう Arcadia 聯合 歴史、アルガチア諸邦の連邦の名、エパミノンダス主唱者となりてスパルタより獨立して諸邦を連結し一國を立つ、即ち之れなり。

アルカチウス Arcadius 人名 西羅馬帝國最初の皇帝にして、虚弱、華奢を好み、政事を臣下に任せ、(西紀三七七-四〇五)。

アルカリ Alkali 化學 酸を中和すべき水酸化物即ち鹽基の中に、水に溶解するものを、特に稱して云ふ、水酸化ナトリウム、水酸化カリウムの如し。

アルカリさんぞく アルカリ金屬 化學、ナトリウムカリウム、リチウム、セシウムの如く水に溶解する鹽基を作る金屬を云ふ。

アルカリせいーはんたう アルカリ性反應 化學、赤色リトマス液又は赤色試験紙を青色に變ずるを云ふ。

アルカリーどーさんぞく アルカリ土金屬 化學、カルシウム、ストロンチウム、及バリウムを云ふ。

アルカリーせい アルカリ性 化學、赤色リトマス液を青色に變ずる性質を言ふ。

アルカリーどるい アルカリ土類 化學、アルカリ土類

金屬の事なり。

アルカロイド Alkaloid 化學、植物中に存する鹽基性化合物の總稱にして、皆、窒素を含む、多數のアルカロイドは炭素、水素、酸素、及窒素よりなり、結晶性及不揮發性を有すれ共少數の者は、炭、水、窒の三原素のみよりなりて、揮發性の液体なり、一般に、アルカロイドは水に解け難く、アルコール、クロロホルム、エーテル等には解け易し、又酸に溶解して、結晶性鹽を生ず、多くのアルカロイドは苦味を有し、動物體內に入りて、劇烈なる作用を呈し、極めて有害なれ共、又貴重な薬劑となる者少なからず、多くのアルカロイドは、タンニン、ピクリン酸、糖モリブチン酸、燐タンゲム酸及び沃化カリウム水銀と不溶性の沈澱を生ず、故に此等の試薬は、アルカロイドの檢出及分離に用ゐらるること多し、コニーン、ニコチン、アトロピン、コカイン、モルフィン、キニン、ストリキニンは重要なアルカロイドなり。

あるきーあるき 歩歩 行きながら、歩きつ、行く行く。

アルキビアデス Alcibiades 人名 アテチの貴族にして風采麗しく、材幹あり、巨萬の富を有したれ共、心邪にして、ソクラテスの教誨も、其功を奏せず、後、其國に叛し

配所に於て暗殺さる。(西紀前四九〇—四〇四)。

アルキメデス Archimedes 人名 古代の有名なる科學者にして、シナリアのシラクサに生る、機械學及數學に精し、羅馬人に捕へられて、殺さる。(西紀前二八七—二一二)。

アルキメデスの「げんり」 アルキメデスの原理 物理 固體の重さは、液體中において幾分減するが如く見ゆ、此事に關して、アルキメデスは次の原理を發見せり、流體中にある物體の重さは、其真正の重さより輕き事、其排除する流體の重さだけなり、是をアルキメデスの原理と稱す、是全く液の壓力に因るなり、液の中に入るべき物體を甲とすれば、之と同形同大の液の一部分を液體中に假想し、且其が静止する理を思へ、此部分に作用する力は其重さと他部の四方より之に及ぶ壓力とあるのみ、而して此等の力の約合ふを見れば、他部の液の壓力の合力は上方に向ひ其強さは液の重さと均し、然らば甲物體を液の中に入れて其時之を壓する合力も其強さは甲物體の重さだけなり、

圖之理物

壓力の合力は上方に向ひ其強さは液の重さと均し、然らば甲物體を液の中に入れて其時之を壓する合力も其強さは甲物體の重さだけなり、

を排斥したる液の重さに均し此理由により此原理を生ず。

アルキル 化学 メチル、エチル等の如く、一價のアルキルより水酸基を去りたるものなり。

アルキルキ 化学 メチル (CH₃)、エチル (C₂H₅) 等の如き基をアルキル基と云ふアルキル基は、金屬元素の如くに作用し、種々の化合物を作る事を得。

アルキロコス Archilochos 人名 有名なる希臘の抒情詩人にして、初めて「イアン」、ピクパリスの詩を書きし人なり。(西紀前七一四—六七六)。

アルクイヌス Alcinus 人名 カロロ大帝の顧問たりし高僧にして、ノースアンパランドのヨークに生る、西紀七八〇年頃、大帝彼を信任し、教會學校の長となし、ヨークの大僧正に擧げたり、又、アーヘン、及びパリに學校を建て詩歌神學に關する著述多し。(西紀七三三—七八〇)。

アルゲン Argun (額滿古温) 地名 河の名にして、支那塔塔兒の一湖より出で、北に流れて、清露の界をなし遂にアムールに合す。

アルゲ Argu. 阿魯忽 人名 察合臺汗の子にして察合臺の孫なり。(一、二、六五)。

アルコス Arcos 人名 マセドニア王細亞達征の時海路を督してヘルシア灣に入りし勇將なり。

アルクイヌス、
機械學者、
西紀一七三三—一七九二
又、
アルゲン、
支那塔塔兒、
一湖より出で、
北に流れて、
清露の界をなし、
遂にアムールに合す。

アルコット Aroot 地理 印度の南部マドラス府にあり、有名なる古戰場なり。

アルコン Archons 官名 ギリシア、マテチが王を廢したる後にわきたる執政官なり。

アルコラン Al Koran. 書名 ムハメッドの經典なり、ムハメッドの編みたるものなり。

アルコール Alcohol. (酒類) 化学、記號 C₂H₅OH 通常アルコールを稱するものは、水酸化エチル即ちエチルアルコールなり、エチルアルコールは多量に製造せらる其製法の基く所は、或る糖類例へば、葡萄糖 (C₆H₁₂O₆) 麥芽糖の如きは、酵母と稱するもの作用によりて、無水炭酸及びアルコールとに分解さるるにあり。

アルコール「かんたんけい」 酒精寒暖計 物理、通常寒暖計には水銀を用うれども、水銀は攝氏の零度以下三十九度にて凝結するを以て、其より低き温度を計るには、酒精を用ひたる寒暖計をよしとす、尙、寒暖計の條を見よ。

アルコール「はつこう」 酒精醱酵 化学 酵母菌の作用によりて糖類をアルコールに變ずる作用なり。

アルコール「レト」 化学 アルコール類の水酸基の水素を金屬にて置き換へたるものなり。

アルゴン 化学 元素の一にして尤も不活潑なり、無色

無臭無味の瓦斯なり、窒素に類す。

アルコール「ランプ」 酒精燈 酒精を燃料に用ゐるランプにして、多く硝子にて製したるランプなり、理化學實驗等に用ふ。

アルゴス Argos. 地名 ギリシアの都市の名、スマルタの爲に漸次衰亡に陥れり。

アルコナ Arcolie. 地名 西紀一七九六年、ナポレオンが、伊太利遠征の時、オーストリアの兵と戦ひて大に之を破りし所なり。

アルサク「てう」 Arsakidae. アルサク朝 マルサア王朝にして、アルサケス一世より初まる。

アルサケス Arsakes. バルサアの王、アンチオコス二世の子、西紀前二五〇即位、二四八年殺害せらる。

アルザス Alsace. 地名 西紀一八七〇年普佛戰爭の結果、佛國より和を請ひて、プロシアに割讓せし州なり、歴史上有名なる地。

アルサス「ローレン」 Alsace-Lorraine. 地名 元獨乙帝國の領土なりしも、ヴェストファリアの條約により、佛國のルイ十四世に讓られたり、後普佛戰爭の爲に、ラングフルトの平和條約起り獨乙に還附せられたり、佛國に接したる獨乙西方の地にして葡萄酒の産地なり。

あるじ ④ 一、家の主、主人、亭主、二、主人となりて人をもてなすこと、ふるまひ、馳走。

アルジェー Algers. ④ 地名 アルジェリアの首府、銀都と稱す冬季美人の遊樂地たり。

アルジェリア Algérie. ④ 地名 アフリカの北海岸にある國、西紀一八三〇年より フランス國の領土となる。

あるじまうけ ④ 鑛山 鑛山の設けなすこと。

アルスラン Arslan. ④ 人名 ヘルシアのセルヤク朝のサキメンなり、(西二〇三〇—一〇七三)。

アルゼン Aizen. ④ 島の名、デンマルクの島にして 今ハ獨乙に屬す。

アルタイ Altai. ④ 山脈の名、オオ砂漠より西に横はる中央アジアの山脈にして ロシア領アジアの南境を劃す、銀 銅の鑛脈に富む。

アルタクセルクセス Artaxerxes. ④ 人名、ヘルシアの王にして 一世 二世 三世の三王あり。

アルタバノス Artabanos. ④ 人名、バルチア王にしてアルサクス三世と稱す、紀元前三世紀頃の人。

アルタフシル Artashir. (Artakshir). ④ 人名 ヘルシアの王西紀二六〇年死す。

あるたん 倭答 ④ 人名 蒙古の汗にして遠延汗の孫なり

陰山附近を領す、後明の冊封を受く、萬曆十年没す。

アルチン ④ Altyn Tagh. ④ 山名、西藏北境の連山なり。

アルツル Arthur. ④ 人名、イギリス古代の王。

アルデア Ardea. ④ 地名、イタリヤの一村落、地中海の沿岸にあり。

アルデヒド Aldehyde. ④ 化學 記號、—CHO なる基を有するすべての化合物なり 之は種々のアルコホルの不充分なる酸化の爲め —CH₂OH 基 —CHO に變ずるによりて生ず、又 同一の炭素原子に二個の酸素原子の結合せる化合物を 水と共に熱するに依りて生ず、強き還元劑なり。

アルテミシオン Artemision. ④ 地名、ギリシアのモロサイアの北にある海角なり、西紀前四八〇年、ギリシア軍が ヘルシアのクセルクセスの艦隊を 破りし所なりとす。

アルデンス Artennes. ④ 地名 フランスとベルギーとの間にあるフランスの一州なり。

アルトア Artois. ④ 地名、シワレスウイヒ、ホルスタインにある港にして 獨乙領たり。

アルトナ Altona. ④ 地名 シワレスウイヒ、ホルスタイン

アルトナ

ンにある都會なり獨乙に屬し、ヘルメ河の右岸に顔す、人口十五萬、(53, 32 N. 9, 56 E.)

アルドフランチニ Aldobrandini. ④ 人名 イタリヤのフロンチアの法律家なり、(西紀一五〇〇—一五五八)。

アルドリチ Aldrich. ④ 人名 オクスフォード大學の教授、論理學者にして 且音樂家なりき、(西紀一六四一—一七〇一)。

アルニム Armin. ④ 人名 獨乙の將校にして 三十年役に参加せり、(西紀一五八二—一六四一)。

アルヌルフ Arnulf. ④ 人名 西紀八八七年 選ばれて東フランク王となる 八九六年 ローマに於て 帝冠を戴けり、(西紀八八七—八九九)。

アル子ム Arnhem. ④ 地名、チーアルランドの一部城にして 又ライン左岸の一良港たり、商業隆盛にして鐵道の設けあり。

アルノ Arno. ④ 河の名、イタリヤの河、地中海に注ぐ港水氾濫の患あり。

アルノー Arnould. ④ 人名、アントアン、アルノーはフランスの神學者なり、(西紀一六二二—一六九四)。

アルノルド Arnold. ④ 人名、アルノルドに三人あり、一、トーマス、アルノルドは オックスフォード大學の教授、近世史、ローマ史に精通せり、(西紀一七九五—一八〇二)、二、マサタクド、アルノルドは 北米合衆國獨立軍の將校にて戦功ありしが 英將クリントンと通して事もれて 英國に奔る (西紀一七四一—一八〇二)、三、アルノルド、オプ、アレシアは 伊太利の僧なり、法王の俗稱、教會の腐敗 僧侶の敗徳を非難せしを以て 西紀一五六年 捕へられて 火刑に處せられたり、其灰は之をチヘル河にす。

アルバ Arva. ④ 山の名、ニュー、ジールランドの西南部にある山の名。

アルバシン Albasin. ④ 地名 清露の古戰場たり、黒龍江省の首府アラゴメンチエンスクと、チルチエンスクとの間にある地なり。

アルバータ Alberta. ④ 森林地の名、ロッキー山の東の傾斜面にあり、英領カナダの一部たり。

アルバニー Albany. ④ 地名 一、スコットランドの高地の古き名稱、二、西オーストリアの一市街、且港なり、三、ニュー、ヨーク州の首府にして 商業 製造業共に盛なり。

アルバニア Albania. ④ 地名、バルカン半島の一部分の地の名なり。

アルバノ Albano. 地理 ローマ民族の始祖、アルバロンゲの住したる山なり。

アルハンブラ Alhambra. 地名、西紀一二二三年マールド二世が建てたるアラナダ國モーア王の城なり。今は僅に舊趾を止むるのみ。

アルバリー Albany. 地名、イタリヤ州の一邑なり。

アルハンゲルスク Arkhangelsk. 地名、ロシア北部の港にして、オレンブルグの管轄に屬す。

アルバロンガ Alva Tonga. 地名、古代に於けるオーストリアの一市にして、ローマよりも古し。

アルビジオ Albigenes. 宗派の名、十二世紀にフランスの西部アルビ地方より起りし一宗派、十三世紀に至りて全滅せり。

アルプ Alps. 山脈の名、歐州中最大なる山脈、其内の最高山をモンブランを稱す。

アッパルスラン Alp-Arslan. 人名、セルシアの王、一六三年即位、一七〇二年トランスオクシアナを征して死す。

アルフォンソ Alfonso. 人名、ブルゴニウエにして、葡萄牙國の創建者にして、王は其一世なり、(西紀一一〇一—一一八五)。

アルフェルケ Albuquerque. 人名、有名なるポルトガルの愛國者にして、且航海者なり。初めて、ポルトガルの勢力を印度に扶植せり、(西紀一四五三—一五一一)。

アルフレド Alfred. 人名、大王を稱せらるる英國サクス王朝中、最も有名なる明君にして、當時の國愚たりしデンマルク人の侵入を禦ぎ、文學を興隆し、法律を制定し、艦隊を編制したる等、英國今日の隆強は、此大王に負ふところ、甚だ大なりといふべし、(西紀八四九—九〇一)。

アルヘシラス Alveira. 港の名、スペイン國シアラルベラ灣頭にある港なり。

アルヘンチナ Argentina. 國名、南アメリカの共和國にして、アンデス山脈の東にあり。

アルベラ Arbia. 地名、モスルに近き一都會なり、西紀前三三一年、アレキサンドル大帝が、ダライアスの軍を破り、其勝利を得たる地なり。

アルベリー Albany. 地名、ニュー・サウス、ウェルスの一市街にして、酒を以て名あり。

アルベルト Albert. 人名、初代のプロシア侯、(西紀一四九〇—一五六八)、又、フランケンブルグ家の始祖もアルベルトなり、(西紀一一〇六—一一七〇)。

アルベルヒ Arbery. 山名、アルプス山系の一部

なるナロルの一山なり。

アルボイン Alboin. 人名、ロンバルトの王にして、後年妻の爲に殺せらる、西紀五七三年なり。

アルマケロ Almagro. 人名、ピサロと共にメルーを征服せし人なり、(西紀一四七五—一五三八)。

アルマデン Almaden. 地名、スペインのシイラ、モレナ山の北部にある一都會なり。

アルマタ Armada Invincible. 艦隊名、無敵艦隊の稱、スペインの艦隊なり、英王エリザベスの時一五八八—英艦隊之をイギリス海峡にて粉碎す。

あるまじろ 犛猯 動物、鼠の兎大の動物にして背側面に鱗狀の堅膜を被る、故に鱗頭足の如く風曲自在なり、舌は尖りて長く突出せず、爪は前足のもの大にして少し曲れり、食餌類に屬す、穴を掘りて棲息し夜間出でて食を求む、肉は佳美、凡て南米に産す。

アルマニク Armagnacs. 地名、フランス國ガスコニイの一州にして、葡萄酒及びブランデーを産出するを以て名あり。

アルマン Alman. 人名、アル、ラシッドの子、アッバス朝第七代のカリフなり。

アルマンズル Al-Mansur. 人名、アッバス朝第二代

のカリフなり、マダグダッドにカリフの朝を移せり、(西紀七一—七七五)。

アルマリク Amalik. 地名、小アジアの都會の名、ミラ河畔にありて、佳勝の地なり。

アルミ 礦物、アルミ銅の條を見よ。

アルミ Aluminium bronze. (アルミ銅) 化學銅九分、アルミニウム一分の合金、其質、堅強なり、空氣中に於て變色せず、金に似たる美麗なる光澤を有するよりして、時計、其他の裝飾品等を作るに使用せらるるなり。

アルミニウム Aluminium. 化學、原子量二七・一、土類金屬に屬する原素なり、其所在廣く、長石、雲母等種々の礦物の成分をなせり。

アルミニウムイオン 化學、アルミニウムより生ずる三價の単イオンなり、無色にして滋味を有す。

アルント Arndt. 人名、エルント、モーザック、アルントは、獨乙の詩人にして、且愛國者なり、(西紀一七六九—一八六〇)、シヤアン、アルントは獨乙の人にして、ルーテル派の神學者なり、(西紀一五三二—一六二二)。

アルメイダ Almeida. 城の名、ポルトガル國ビイラ州にある、スペインとの國境に築かれたる堅城。

アルメイダ Almeida. 人名、フランシス、アルイイダ

はポルトガルの人、印度のポルトガル領第一副王なり、其子のロレンソ、アルメイダは亦父に従ひて印度にありて功名を顯はし、セイロンをポルトガル領となせし人なり。

アルメニア Armenia. 國の名、アジアの西部にある一國なり 古は獨立國たりしも 今はトルコ、ロシア、ペルシヤに分割せらる。

アルモリカ Armorica. 地名 フランスのセイヌ河とロアルド河の間にあるゴールの地方なり。

アルラシット Al Rashid. 人名、アッバース朝中最もすぐれたるカリフにして、ビサンチン帝國と戦ひて之に勝ち眞を奉らしめたり、(西紀七六六—八〇九)。

アルル Arles. 地名 往昔 有名なりし都市の一にして、ローン河上に跨る。

あれ 阿禮 四月 京都加茂の祭の時 種々の絹布を櫛に垂れ飾り 或は鈴などをつけ飾りたるもの。

あれい 亞鈴 體操に使用する器具の一種。

アレウト Aleutian Islands. アレウト諸島 諸島の名、南太平洋に散布する火山群島にして 北米アラスカより アジヤのカムチアツカ迄 廣がる。

アムガニー Alleghany. 市の名、北米合衆國ペンシルバニア州にある都市の名なり。

州にある都市の名なり。

アレキサンデル Alexander. Aleksandr. 人名 アレキサンデルには一世 二世 三世の三人あり、アレキサンデル一世は ロシア皇帝にして、マツル一世の子なり、一八〇五年 オーストリアとの同盟軍に出陣し、アウステルリッツ役に、ナポレオンの爲に敗られ、一八一四年パリ陥落後、プロシアと結び、英國を訪ひ、ウナテロー戦後は、オーストリア及びプロシア皇帝と提携し、一八一五年再びパリに入りて、有名なる神聖同盟を結び、専ら内治に心を用ひ、農商工を興し、文學美術を奨励したり、(西紀一七七七一—一八二五)。

アレキサンデル二世は、ロシア皇帝、一八五五年、クリミア戦争結局前に父ニコラスに次ぎて即位す、一八八一年、ペテルブルグに於て、遂に虚無黨の毒手に噎れたり、(西紀一八一八—一八八二)。

アレキサンデル三世は、スコットランドの王にして、馬より落ちて死す、(西紀一二四二—一二八六)。

アレキサンドラ Alexandra. 人名 ヘロッドの妻、アリアナの母なり、西紀前二八年頃の人。

アレキシス Alexis. 人名 ロシア皇帝にして、ヘテロ大帝の父なり、(西紀一六三〇—一六七七)。

h

j

アレキセイ Alexei. アレキシスの露稱なり。

アレキバ Arequipa. 地名 ペルーの一部市の名にして、海拔八〇〇〇呎 震の恐れあり。

アレクサンドリア Alexandria. 地名 埃及に於ける古代の都市の名、要港なり、西紀前三三二年、アレクサンドル大王の創建せし所にして、自己の名を以て命名せり、蓋し、東西両洋の中心となさん考なりき、當時にありては學者の叢淵、又商業の中心たりしも、今は全く荒廢に歸せり。

アレクサンドル Alexander the Great. 人名 大王と稱せらる、マケドニア王フィリッポの子なり、西紀前三五六年、ペラに生れ、二十歳にして即位す、ギリシヤを征し、ペルシヤを従へ、兵三萬五千を率ゐて、ダリウスの軍を破り、シリア、埃及を陥れ、遠く軍を進めて、印度を征せしが中途にして軍をかへし、バビロンに於て、没す、年三十二、(西紀前三五六—三二三)。

アレクサンドレタ Alexandretta. 地名 シリアにある港。

アレクシオス Alexios. 人名 アレクシオス、コムニノスは、東ローマ帝國の皇帝にして、賢明なる君主なり、(西紀一〇四八—一一一八)。

アレキサンドリア Alexandria. 地名 北部イタリヤにある繁華なる都市なり 堡塞の設けあり 八條の鐵路の中心たり。

アレチ Aletsch. 河の名 アルプス山中の最大の氷河なり。

アレツポ Aleppo (Halab). 市の名、北シリアの一市街、昔ては世界商業の中心たり。

あれにもあらず 非我 我れを忘れて、正氣を失ひてなどの意。

あれのはた 阿禮幡 古代 禁中の豊樂院にて、正月十七日、弓をみそなはす時に、立てられし幡。

あれひき 阿禮引 加茂の祭の時、あれにつけたる綱を引くわざ、あれに着きたる鈴をならさんが爲めなり、此の鈴なる時は、願ふこと叶ふなり。

あれなご 阿禮男 加茂の祭に、祭主となれる人の稱なり。

あれなごめ 阿禮女 齋院を申す。

アレマン Allemanni. 地理 フランク帝國の一部の地、カロ大帝法典編纂の時、此の地の習慣法を參酌せるを以て有名なり。

アロイシオ Aloysius. 人名 イタリヤの貴族にして

イエス教を組織したる人。

アローリけん Arrow 事件 歴史 アロー丸を清の官吏が捕獲して争を起したる始末なり、此船は清人の有にして英人之が船長となる、一八五六年廣東に泊せし時、廣東總督葉名琛、吏を遣り、其乗込水夫を引去りたれば、英國領事は條約違反として詰りしに、名琛冷淡なりしより、遂に佛と合して兵を遣り、一八五七年廣東を陥れ、名琛を虜にし天津に向ひしに、清國遂に和議を乞ふ、天津條約是なり。

あわ 泡、沫 一、水の空気を含みて 圓形に水面にふくれ上りたるもの、二、硝子の中の空虚なるところ、三、口の邊にはき出す唾。

アワ Aw 阿瓦 地名 アルメ帝国の舊都なりしが一八三九年地震のため廢滅す、(21, 52 N, 96, 1 E)。

あわぢ 淡路 國名 南海道の一島國、阿波に渡るの道なりとて淡路と言ふなり、大古、諸母二尊降臨す、淳仁帝は此處に移さる、足利時代には細川氏の領となり、徳川氏の時代には蜂須賀氏の領となる。

あわぢのーはいだい 淡路の廢帝 人名、大炊王の條を見よ。

あわしほ 白鹽 純白なる良き鹽。

あわーただし 周章 あわてたるさまにてあり、惶急。

あわづーがーはら 粟津ヶ原 地名 近江國滋賀郡膳所村の邊にあり、木曾義仲の敗死せし所なり。

あわふきーむし 沫吹虫 動物 虫の名、形小くして椿の枝葉などの間に生じて 沫をふき出し 其の中に住む 後化して くさせみとなる。

あわーもり 泡盛 樽酎の一種、琉球の名産なり 白米にて 醸し 瓶にて封して 屢々 轉して 數年を経たるものなり。

あわもりーさう 泡盛草 植物 草の名、舛麻類 苗、葉 短く 葉は 深緑にして尖る 春夏の間 白き花を開くなり。

あわーゆき 沫雪 一、春などに 降る雪の泡の如く軽くして 解け易きもの、二、梨の實の一種、味 最も美にして 水氣多く 雪を噛むが如し。

あわゆきーどうふ 沫雪豆腐 常の豆腐の如くにて製し 終りに 布に包み壓をおかず 柔かく ふくらして泡雪の如きもの。

あわゆきーの 沫雪 消ゆるといふ語にいふ枕。

あわ 藍 植物 被子類、蓼科に屬す、草の名、莖の高さ一二尺 枝多く 葉は藍に似たり 夏季 枝の梢に穂を

なして 花を開く藍に似たり、染色科植物にして 重要なものなり。

あわ 藍 染料の名 藍の葉より製す、染料、繪具、薬用となす。

あわーがは 藍革 藍にて染めたる革、昔時 裝束に用ひたるもの。

あわーがへし 藍返 小紋などのある上を 更に 藍にて染め返したるもの。

あわーがみ 藍紙 一つくさの一種大なるもの花の汁にて 染めたる紙、繪具とす、近江國栗太郡山田村の産なり、うつしばな、こんがみ、あをがみ。

あわーざめ 藍鮫 動物 魚の名、鮫の屬、皮をとりて 刀削の鞘にまき用ゐる、伊豆駿河に産す。

あわーだま 藍玉 藍の葉をつきて 塊としたるもの。

あわーねずみ 藍鼠 染色の名、鼠色に 藍色を、ねびたるもの。

あわーらふ 藍蠟 藍瓶の上の泡をとりて乾したるもの 繪具とす、今 多くは 古き藍染の布を集めて煮て取るなり、藍花。

あわ 青 一、晴れたる日の空の色、二、青 綠等の總稱、三、馬の毛色の名、四、未熟なること、未だ成長せざること。

あな—うめ 青梅 一、梅の實の未だ熟せずして 青きもの、二、名香の名、ちんの一稱。

あな—うり 青瓜 一、白瓜の皮の青くして 光りあるもの、もみうり、二、まりづけうりの一名。

あな—やすづく 青江安次 人名 銀冶、備中國青江の刀鍛冶にして 當時の名匠なり、青江刀工の始祖。

あな—がしま 青ヶ島 島の名、伊豆國八丈島の南方にあり、周圍五里餘、又 鬼島といふ。

あな—かすげ 青精毛 馬の毛色の名、精色の青色をねびたるもの。

あな—かち 赤絹 染色の名 かち色の青みを帯びたるもの。

あな—がは 青草 青色に染めたるなめしがは。

あな—かび 植物、菌類に わをかび(廓大) 屬す、之は動物等の如き死物に寄生するものなり、故に此等の植物を 死物寄生植物といふなり。

あな—がひ—ざひく 青貝細工 凡て青貝を以て細工したるものといふ。

あな—がへる 青蛙 動物 蛙の一種、背は綠色にして

腹は白し、よく鳴く、水田又は小川などに住む。

あな—からかみ 青唐紙 かさねの色目の名、表は縹、うすあをく、縹、崩黄にして 裏は青きもの。

あな—からし 青芥 植物 草の名、たかなに似て かななる毛あり、葉の色 深緑なり。

あな—がれ—いろ 青枯色 かさねの色目の名、表は黄色 裏は淺黄なるもの。

あな—き 青木 植物 木の名、常盤木にして 青幹はく 葉は長くして 周圍に鋸齒あり、對生す、夏の初、小き暗紫色の花を開く、實は棗に似たり、冬 熟して 紅色となる。

あな—き—こんやう 青木昆陽 人名 幕府の儒官、名は敦書、字は厚甫、文蔵と號す、武蔵の人 初めて 蕃薯を本洲に植へ 蕃薯考を著して その栽培法を説く 世に甘藷先生と稱せらる 明和六年十月歿す 年七十二、蘭學の鼻祖と

葉のうぎをわ

あな—ざり 青桐 植物 木の名、桐の一種、幹は真直にして 多くの枝を生ず 幹の色は青し 葉は 廣く大にして 主とすべき主脈なく 多くの太き脈は 葉柄端より撒出するなり所謂 掌脈の葉なり、夏、黄色の小花集まり開く 後 圓くして大豆様の實を結ぶ。

あな—くさし 青臭 一、青草などの如き臭あり、二、いまだ 熟せずあり、未だ 馴れあり。

あな—くちば 青朽葉 かさねの色目の名、表は青く 裏は 朽葉色なるもの。

あな—くろ 青黒 かさねの色目の名、表も裏も共に青し 表は やや濃きなり。

あな—げら 青啄木鳥 動物、鳥の名 きつづの一種にして、太さ ひよりの如し。

あな—こ 青粉 一、青苔の粉、二、たはばからしの葉を 乾かして 粉とせるもの、食物に 綠色をつくるに用ゐる。

あな—ごし 動物 虫の名、蟻に似て 短き翅あり よく飛ぶ 腹の邊 青黒し 有毒なり、春夏の頃 出づ。

あな—ざ 植物 海苔の類、海中の石などにつきて生ず、形 あまのりに似て綠なり、乾かすも紫變せず、粘りあり

食用となる。

あな—ざ 漬柿 漬を去りたるもの。

あな—ざき 青電 動物 鳥類、潜水類に屬す、形常の鷺より大に、背 淡青し 冠毛は長くして黒く 腹白く 翅の端は黒し 嘴 頸 脚 共に長くして 淺き水を泳ぐ 食物を求むるに適す。

あな—ざ—の—こま 青鸞駒 青みを帯びたる月毛の駒 といふ。

あな—ざし 青緋 一、青字にて 作りたる緋、二、轉して緋につらぬける錢を人に與ふる時にいふ語、青銅。

あな—ざしば 青差羽 動物 鳥の名、鷺の一種、形 華に似て されより少く、青色なるもの。

あな—ざむ 青 顔の色 青く變る、青みを帯ぶる。

あな—ざむらひ 青侍 一、年未だ若くして 事になれぬ侍、二、公家に奉公する侍。

あな—し 襖子 冬の寒さを防ぐために 用ゐる袴の服 綿を入れたるもあり、略して襖といふ。

あな—じか 青鹿 動物、かもしかにたなし。

あな—すだれ 青藤 青竹のすだれのこと。

あな—すみ 青墨 藍墨にて 墨の形に製せるもの、繪 具とす、あなすみ。

あなすもも 青李 植物 一、李の實、熟して赤くならぬもの、二、李の實の 未だ熟せずして青きもの。

あなすり 青摺 神事 神樂等に用ゐる服の名、白き布を粉張にして 山藍にて 草烏などの模様を 刺版にて摺り出す、すりころも、あむころも。

あなせん 青錢 青銅にて鑄りたる錢。

あなろ 青麻 麻のあら皮のこと、繩などに作る。

あなた 青田 稲の青々と生ひたる田。

あなた 鱗 動物 魚の名、形 小く、頸のあたりに大きな刺あり 極めて小く、皮滑かにして 青色の横筋あり。

あなだ 便輿 輿 あんだにおなじ。

あなだいし 青六將 動物 爬虫類 蛇類に屬す 蛇の一種にして 色青く 形 大に 運動極めて遅緩なり 人を害することなく 人家に入りて 鼠などを 捕へ食ふなり。

あなたる の たき 青垂瀑 瀑の名、飛騨國大野郡池俣村にあり 高さ四十五丈 幅一間。

あなち 青地 織地の青きもの。

あなちく 青軸 植物 梅の一種、萼 嫩枝 共に緑なるもの、眞直に生長す。

あなちや 青茶 染の 名、青色を帯びたる茶色。

あなつ 燭 燭火が またたきする、燭火の焰が 動くなり。

あなご 青紙 紙の一種、色青し 之はあらとどまどとの間に使用する紙なり。

あなごかけ 青蜥 動物 爬虫類 蜥蜴類に屬す、蜥蜴の一種にして 全身青く青みあり、尾は殊に碧なり 長さ四五寸ばかり、毒あり 注意すべし。

あなごふじつな 青紙屋敷 人名 藤満の子、上總の人なり、性 廉直 勤儉にして 施を好む 鎌倉幕府に仕へて 引付衆となる 滑川の快話の如きは 人の熟知するところなり。

あなご 青丹 繪具の名、土中にかたまりて存するもの、成分は炭酸銅なり 黒みたる緑色のものを上等とす、綠色を染むるに用ゐる。

あなご 青丹 一、染色の名、濃き青色に、黄を加へたる色、二、かさねの色目の名、表は 濃き青色、裏はうすき青色なるもの。

あなご 青女房 年若くして 未だ萬事になれぬ女房。

あなご 青丹吉 平城の枕詞。

あなりのり 青海苔 海苔の一種、海中に生ず 甚だ細くして絲の如し 色 緑にして 食用に供す。

あなは あるよりいでてあるよりあなし 青出於藍、而青於藍 弟子の學識 技藝が 師のそれを超えることをいふ、荀子に「青出於藍 而青於藍 水出於水 而寒於水」とあり。

あなばち 青蜂 動物、ちかばちの一種、長さ一寸ばかり、腰 細くして 色 青黒なり。

あなばづく 青羽木兎 動物 鳥の名、みみづくの一種、羽の色青黒く 尾は長し、通常のみみづくは日中物を見ることが能はざれども 之は見ることを得。

あなばど 青鳩 動物 鳩の一種、山に棲み、形は いへばどの如く やや大なり、全身緑にして 肩あり、胸は淡黄なり。

あなは の すたれ 青葉簾 卯月朔日、大内の雨の角に相對して植はる 二本の柳にかけ その日の暮方に取り入れられたる簾の稱。

あなは の しろ 青葉城 城の名 陸前國仙臺にあり 伊達氏の居城なりしが 今は其の趾を存するのみ。

あなは の ふき 青葉笛 高倉院御秘藏の有名なる笛の名。

あなはんめう 青斑猫 動物、虫の名、形 斑猫より小、長さ六七分ばかり、色 緑にして 黄金色に光るものなり、まだらむし。

あなひご ぐさ 青人草 世の人の 年々生れ出づるを 草の 彌益に生ひ繁れるにたとへていふ語なり、民といふにれなし、たみぐさ、蒼生。

あなべう し 青紙 人の道を説きたる書物のこと、例へば 論語 孟子の如し。

あなみづひさ 青水引 水引の半分を白く、他の半分を 紺色に染めたるもの、専ら凶事に用ゆ。

あなみどり 藻類、接合藻門に屬す、到る所の池溝等に生ずる緑色の毛状のものなり、顯微鏡にて之を檢すれば わをみどりの圖(顯微鏡ニテ見タル圖)

體綠葉 (A)
核皮質形原 (B)

單一なる細胞の縦に連なるものにして 中に螺旋状をなせる葉緑體ありて 其中間に放射状の原形質を見る、其の番

殖は 接合法による、相接觸し、合一したる細胞の内容は
新に 細胞膜を生じて 胞子となる 此胞子 萌發して
再び わとみころを生ずるなり、水綿。

あなみ—わたる 青波 青々ど見わたるなり。

あな—むし 青虫 動物、虫の名、芋虫の類、菜の葉な
どを食す、形小に、色緑なり、後 羽化して蝶となる、即
ち 蝶蛉之れなり。

あな—むらさき 青紫 染色の名、青き色を帯びたるむ
らさきいろをいふ。

あなぬ 青柳 地名 武蔵國西多摩郡にある市の名。

あなぬ—じま 青柳織 織物の名、武蔵國西多摩郡青柳
の地より産出する織物、下等なる絹織を經とし、綿織を
一緯として 織るなり、又綿織の二子織のこと。

あなぬ—わた 青梅綿 武蔵國西多摩郡青梅の邊より産
する木綿のわた。

あな—もみぢ 青紅葉 一、秋 草木の未だ 紅葉せざ
るもの、二、かさねの色目の名、表は青く、裏は黄なるも
のなりとも、又 裏は 朽葉なりとも、又 表は萌黄にし
て、裏は黄なるものなりともいふ。

あな—もり 青森 地名 陸奥國東津輕郡にある大市街
にして 現今人口二萬八千餘あり 此地は青森縣廳所在の

地にして 青柳灣に望み 北海道渡航の要津たり 奥羽鐵
道は此地より發して馬淵川の流域を溯りて陸中に入る 又
西南は弘前市に達するなり。

あな—やぎ 青柳 柳の葉の 青々と茂れるもの。

あなやぎ—の 青柳 糸といふ語の枕。

あなやぎ—ぶんざう 青柳文藏 人名、仙臺の儒者 字
は 茂明 號は東里なり、仙臺の儒者にして且つ 醫師な
り 名高き 藏書家にして 其數 二萬卷に及ぶ 青柳
文庫は之を藏むるものなり。

あな—やなぎ 青柳 一、あなやぎにたなじ、二、かさ
ねの色目の名、三、奥も 共に濃き青色なるもの。

あな—やま 青山 草木の青々と茂りたる山のこと、即
ち青葉の山なり。

あなやま—わんう 青山延子 人名 通稱貫介、字は子
世、號は 雲龍 又は拙野なり、水戸藩の儒者にして 文
辭の巧を以て顯はる 藩史三十六卷は其撰なり 又弘道
館の總裁となる 天保十四年九月六日歿せり 時に年六十
有八。

あなやま—わんくわう 青 延光 人名 史學家、青山
延子の長子なり 字は 伯輝 通稱は量太郎、號は 翠翠又
は 春夢居士と稱せり、詩文に長じ 史學は 其の最も長所

とする所なり、年僅かに 十八にして彰考館の編修に拔擢
せられ 遂に編修總裁に任ぜらる、後 弘道館の教授とな
り、明治二年 大學中博士となり 同三年九月歿せり 年
六十九。

あなやま—ごしよ 青山御所 宮の名、明治今上天皇の
御母公 英照皇太后のたはせし宮、東京府赤坂區の中央に
あり。

あなやま—ぶき 青山吹 かさねの色目の名、表は青く
して 裏は黄なるものなりとも、又 表は裏と共に 黄な
りとも、又 表は青く、裏は紫なりともいふ。

あな—ゆで 青茹 野菜類の葉物を 青き色の かはら
ぬやうに ゆでたるものいふ。

あな—よもぎ 黄花蒿 植物 草の名、かはらよもぎに
たなじ。

あな—わらは 青童 年尙は若くして 未だ世故になれ
ざる童子。

あな—なんな 青女 年 尙は若くして 未だ世故にな
れざる女、あをによらばうにたなじ。

い

胃 生理、消化器中の最重要なる部分にして、其在
る所を俗に水落と稱す、全體筋肉壁よりなり、其伸縮に依
り食物を粉碎す、内面に在る無數の細孔より液を分泌す、
之れ即ち胃液と稱するものにして、蛋白をペプトンに變
ずる化學的性質を有し、食物は、此作用によりて消化せら
る、なり、大食間食の胃に害あるは、前者は胃の機械的作
用を弱め、後者は胃に休憩を興へざるを以てなり。

膽 生理、胆汁の入り居る體囊なり、體囊の膽を藥
用に供するは、之を服用すれば脂肪を乳狀に變ずるに依る。

睡 睡入ること、いぬること。

意 一、ところ、わけ、意味、二、れもひ、望。

醫 一、病をいやす術、二、病をいやす人 醫術を
行ふ人、即ち くらすし、醫師。

夷 及びす、東夷西夷といふが如し。

尉 秦の地方官の名なり 始皇は 領内三十六郡に
此官を置き 兵制を司らしめたり。

射 射合 互に射る。

依 依依 柔弱なる貌、木の茂れる相、思ひすが
たきすがた。

いーい 怡怡 嬉しきさま、よろこばし。
 いーい 猗猗 美しく盛なり。
 いーい 飯尾 姓名 鎌倉以来の世職家、足利時代には引付衆たり。
 いーい 龍馬 動物 虫の名 秋の夜などに 龍の邊に出でて食物の残物などを食ふ 長さ七分ばかり 首小く 身大なり、背高く、頭 尾低し 形馬に似たり 茶褐色にして 黒斑あり 雄は黒き翅ありて 稀に鳴き 雌は 翅なくして 鳴かず 共に六七分の鬚あり。
 いーい 化学、エーテルの條を見よ。
 いーい 井伊直弼 人名 徳川家定の時大老となる、彦根の藩主、掃部頭と稱す、安政年間米國使節來り交通を求む、時に攘夷論盛なり、直弼決断して勅を待たず、港を開きて、貿易を許す、時に安政五年六月なり、又繼嗣を定むる時、慶喜を斥け、紀州家の幼子家茂を立つ、尙英斷を以て閣老を交送し、意見に反せる志士を獄に繋ぐ即ち安政の獄なり、水戸齊昭も斥けられ、大に憤慨せしが萬延元年上巳の佳節、直弼を罵り登城するに際し、佐野竹之助等と共に櫻田門外に直弼を殺したり。
 いーい 井伊直孝 人名 直政の庶子、秀忠に仕へ、後大阪冬陣及び夏陣に殊功ありて累進す、家康以下四代に仕へ、老中となる、萬治二年七十にして死す。
 いーい 井伊直政 人名 世々今川氏に仕へ、直政に至り、家康に仕へ功あり、石田三成の家康を斃さんとするや、之を向へ伏見に入る、關原役に功あり 慶長十年四十二にして歿す。
 いーい 井伊 人名 商の賢相、空業に生る、湯に事へて 榮を討ち 百餘城にして歿す。
 いーい 友愛 兄弟 姉妹 又は朋友の間の交りに於て なさげをつくすこと。
 いーい 優渥 恩澤のあまねくして あつきことをいふなり。
 いーい 遊行 人名 高僧 字は廓榮、上野國小島に生れ 江戸浄土宗 靈山寺の沙門なり、資性聰明、南京に行き 俱舎 唯識を修めて歸朝し 貞享三年 靈山寺の住職となる 元禄八年正月十日歿す。
 いーい 優遊 閑暇なり、又 自得せる状。
 いーい 呦呦 鹿の鳴く聲のさま。
 いーい 悠悠 落ちつきたる態度をいふ、ゆつくりと、ぼんやりと。

いーい 油々 水の流るるさま。
 いーい 幽幽 かすかに、奥深かし。
 いーい 優優 みやびたり、あでやかなり、しどやかなり。
 いーい 優遊不斷 遊ばしきと決せぬこと、くずぐずとして 定りのつかぬこと。
 いーい 誘引 いざなふこと、さそふこと。
 いーい 憂鬱 氣がふさぎて 晴れやらぬこと。
 いーい 游泳 水よくこと。
 いーい 有用 役にたつこと、入用なること。
 いーい 有益 事に益あること、有用。
 いーい 誘掖 導きたすこと、人を教誨することとをいふ。
 いーい 郵驛 宿馬を出す所、しゆくば。
 いーい 遊宴 酒もりをして 遊ぶこと、酒宴。
 いーい 優麗 やさしきこと、あてやかなること、みやびやかなること。
 いーい 幽界 人の目に見えざる世界。
 いーい 誘拐 偽はりて人をかきかすこと。
 いーい 有覺 人名、勤王なる僧、覺摩坊と稱す、後醍醐天皇の船上山に行幸し給ふや 延暦寺の僧徒と共に
 王事に勤め、又新田義貞に従ひて 尊氏を征す、尊氏入京するや 僧徒の首謀たるの故を以て斬らる。
 いーい 遊學 遊歴して學問をなすこと、他國に出て學問をなすこと。
 いーい 有價證券 債權を表示する證券、公債證券 株券の如し。
 いーい 憂喜 ながかほしきことと喜ばしきこと。
 いーい 友誼 友達のよしみ、朋友の情誼。
 いーい 遊戲 遊び戯るるわざ。
 いーい 悠久 奥ふかく 追らずして、永久なることをいふ。
 いーい 有機化學 化學 炭素化合物に付て論ずる學なり。
 いーい 有機化合物 化學、多くは炭素、水素、酸素の三原素より成り、又此の外に 窒素を含み 稀に又硫黄及び 磷を含有する化合物の總稱。
 いーい 有機體 生活現象を あらはしうべき器官を有し 物質の新陳代謝をなし 發育し、生長し、増殖し 死するものをいふ。
 いーい 有期徒刑 刑罰の名、重罪に科する刑にして 囚人を島地に送つて定役に服せしむ 其年限は十

いじよけんけい 宥恕減輕 法律、被告の情狀を思ひやりて 刑を軽くすること。

いすあ 遊ぶ 遊水類 動物、哺乳類の目の名、鯨、イルカ、一角などの動物は、に屬す。

いせい 遊星 天文、恒星に隸屬して 其の周圍を回轉するものといふ、地球の如し。

いせい 愛世 世の中の安危を心配すること。

いせい 郵税 いふびんせいの略。

いせい 遊説 諸國を廻りて 其の意見 説などを説くこと。

いせい 有性生殖 動物、雌性元素(卵)が雄性元素(精子)と相合して 新に一個の動物を生ずることといふ、此合一することを受精といふ。

いせい 優詔 ありがたき詔、あつきたはせこと。

いせい 憂戚 うれひどかなしみ。

いせい 郵船 いふびんせいの略。

いせい 遊船 あそびぶね、ゆさん船。

いせい 友禪 染の模様、いせんぞめの略。

いせい 油然 雲のれこる状。

いぜん 友禪 人名 宮崎氏、京都祇園町の人、有名なる染工、世に友禪染と稱するは 其の工夫に出でたり、

元祿頃の人。

いぜん あふぎ 友禪扇 京都の染工友禪が創製したる一種の扇。

いぜん 友禪染 染模様の名、種々の彩色にて人物、花鳥等の模様を 鮮麗に絹布に染め出すもの、染工宮崎友禪に始まる。

いぜん ちりめん 友禪縮緬 友禪染にしたる縮緬。

いぜん 悠然 落つて、氣長に。

いぜん のまぐら 遊仙枕 開元の遺事に 之を枕として寝れば 十州三島 悉く夢中に見るよしを記せるより起りたるなり。

いせん やど 遊船宿 遊船といだす宿。

いせん 有職 職の字、もとは識なりしを讀み方も字も誤りたるなり、一、ものしり、學者、二、故實の例式などを明らむる學、古の禮式 習慣などを明かに知りたること。

いせん か 有職家 故實の學問をする人、有職に精しき人。

いせん せうせつ 有職小説 著名 駒谷散人部の著なり、種々に部門を分ちて故實を記せるもの。

いせん もんだう 有職問答 書名 有職につきての

問答、大内義隆の間を四三條實隆の答へられたるもの。

いーだ 遊惰 怠ること、遊びくらすこと。

いーたい 優待 待つきもてなし、よくあしらふことをいふ。

いーたい 有體物 形體を具して 人の五官に關れて 其所在を覺り得らるべきもの。

いーたい 有袋類 動物、哺乳類中の目の名なり 袋鼠の如きものに屬す、子を育つる爲に母の腹の前面に袋ありて 之の内に子を入れて養ふ。

いーだう 有道 すぐみちのあること、正當なることをいふ。

いーだう 遊道 交遊にたなし。

いーだう 誘導 誘ひみちびくこと、案内すること、ひき出すこと。

いーちやう 優長 心もちつきて 急がぬこと 氣のながきこと、のんきなること。

いーづう ねんぶつ 融通念佛宗 佛教の一派なり、天治元年僧 真念の始めたるもの。

いーてい 有蹄類 動物、哺乳類中の目の名、指趾 長く直立し 其尖端に蹄を具へて歩行するものといふ 有蹄類は 其蹄の奇數なるを偶數なるに依りて之を二部

に分ち、即ち きていゝるゐ(奇蹄類)とていゝるゐ(偶蹄類)とす。

いーてん 祐天 人名 俗名は三之助 磐城の人、江戸に出でて僧となり 武藏國佐原郡目黒村に住し 享保三年七月十三日寂す年八十三。

いーさう 優等 物の優れたること、秀逸。

いーさく 有職 徳を具ふること、徳のあること。

いーに 優 一、しどやかに、みやびて、落ちつきて、品よく、二、巧に、妙に。

いーはう もん 郁芳門 いくはふもんにたなし。

いーび 優美 しどやかに美しきこと、みやびて品の高きこと。

いーひつ 右筆 一、貴人の傍にありて 物を書くことを掌る役人、かきやく、祐筆、二、學問にたづさはること 又 其の家すぢ。

いーひつ 優筆 書くことの上なること。

いーびん 郵便 音信交通の機關、書狀其の他の物品を郵送すること 郵便が世界的事業となりて 萬國聯合の條約を結びたるは 西紀一八七四年にして我邦も之に加盟せり。

いーびん かはせ 郵便爲替 郵便を以て取扱ふ爲替、

向 かはせの條を見よ。
いびんせい 郵便税 郵便を送り届くるに敷料として徴収する税金、郵便物に相當する郵便切手を貼用するを以て之を納めたるものと見做す。
いびんせん 郵便船 郵便物を送る船。
いびんてんしんきよく 郵便電信局 通信官の管轄の下にありて郵便及び電信に關するすべての事務を取扱ふ役所なり、一等二等の等級あり。
いびんぶつ 郵便物 すべて郵便にて差し立つるもの、之には通常郵便物及び小包郵便物の二種あり。
いびんぶつしゆしふ 郵便物取集 郵便受取所にて受取りたる 又は 郵便函に差入れある郵便物を集めて郵便局に持ち集まること。
いびんぶつだいしふはい 郵便物大集配 郵便物を或郵便局より 他の郵便局に轉送すること。
いびるる 有尾類 動物、動物分類の語、兩棲類中の目の名、おもり、さんせうとの類なり。
いふく 有福 財産ありてゆたかに暮すこと。
いぶつ 尤物 すぐれたるもの、逸物、女の容貌の妖なるもの。
いふん 憂憤 憂ひ憤ること。

いへい 幽閉 人を一室に閉ぢこめること。
いぼく 遊牧 一定の居所を有せず 水草を逐ふて轉移し 牧畜を以て職業となすこと。
いぼくじんしゆ 遊牧人種 遊牧を事とする人種、野蠻未開の人種なり。
いーまう 勇猛 勇ましく たけだけしきこと。
いーむ 有無 一、あるとなきと、二、曖昧にして明らかでないこと。
いーめい 有名 名高きこと、世に名をしらるること。
いーめい 幽明 一、くらさと あかるさと、二、冥土と 此の世と。
いーめい 幽冥 一、かすかなること、二、冥土にたなし。
いーめい 幽冥界 神又は佛などの います世界のこゝ。
いーめい 有名無實 名のみありて實なきこと 空名のみありて 實權なきこと。
いーめん 宥免 罪を赦すこと。
いーもん 幽門 生理、胃の小腸に連なる部をいふ。
いーよ 猶豫 一、進退決せざることを、躊躇すること

二、時日を延ばすこと、延引。
いーよ 有餘 餘りあること、餘分、餘餘、
いーよう 有用 入用あること、やくにたつこと。
いーらく 遊樂 あそびたのしみこと、ゆさん。
いーりきしや 有力者 一、力ある人、二、富める人、權勢ある人。
いーりよ 憂慮 氣にためて憂ふること、心配、苦勞すること。
いーれき 遊歴 諸國を遍歴して 名所 舊蹟を尋ね風俗を見るなどをいふ、遊覽。
いーれつ 優劣 まさると たどると、たどり まさり、勝敗。
いーれう 遊獵 遊びに 獵すること。
いーれうせい 遊獵税 遊獵の免許を得んが爲めに 政府に收むる税金。
いーわう 硫黃 礦物 記號 S_8 。砒素と硫黃との化合物にして 其色 黄にして甚だ美なり、人工にても製することを得、多く顔料として用ゆ。
いーあ 有爲 事業をなし得べき見込みあること、役に立つべきこと。
いーあき 胃液 生理、胃壁にある胃腺より分泌する消

化液なり、(S(胃)の條を參看すべし)。
イエーゲルドルフ Jagerdorf 地名、オーストリアのシレシアにある都會、もと王城ありしを以て其名高し (Göb N. 17, 4E.)
いーじま 伊江島 島名、琉球國沖縄島の北方にあり 周圍五里十九町。
イエス Jesus (耶穌) 人名、ゆだやの人、耶穌教の開祖にして 人類の救世主として顯はれ 一神教を唱へ 遂にゆだや人の爲めに磔刑に處せられたり 時に紀元三十四年 たり
イエスイタ Jesuit 教會 歴史 一五三四年フェルナナンド五世の扈從イグナチウス、ロヨラの建てし基督教の一派 後東方に布教し、我日本にも渡來せしを、徳川幕府が嚴禁せり。
イエズド Yezd. 地名、ペルシアにある一市の名、ペルシアとインドとの商業の中心點なり、絹布 綿布の産出甚だ盛なり。
いーじつ 怡悅 うれしく思ふこと。
イエナ Jena. 地名 獨逸の一都市の名、歴史的に有名なり、ルーテル、ゲーテ、シルレル、と密接の關係あり、又一八〇六年十月十日 此附近にて佛軍がプロシア

軍を敗りしを以て有名なり。

イニセイ Yenicai. 河の名 シベリアにある大河にして長き三三〇〇哩 舟楫の便あり、沿岸の地は種々の物に富めり。

イニチエリ Tenzary. 兵隊の名、トルコ帝のオムカルンが敵軍より捕獲し來りたる青年少兒を以て 訓練を加へししたる親衛歩兵隊なり 西紀一三三六年至りて全く完成す。

いこのころうだう 家子郎黨 中古王政の衰頹するに及び 諸の武士豪族 争ひて莊園を占有し 其門閥を富とによりて 子弟僕隸を養ひて 私兵とせり之を稱したる名、源平両氏の如きは最も多く之を有せりといふ。

イホバー Jehovah. 神名 人眼の視得可からざる唯一神の名、ヘブライ人を鎮護するものなり。

イメン Yeman. 地名、アラビアの西南にある一州、熱帯の産物に富めり。

イエルサレム Jerusalem. 地名、パレスチナの首府にして海面上二〇〇呎の丘陵上にあり 城壁、耶蘇の墓跡あるを以て 遠近より來るもの甚だ多し。

イエルマク Jermak. 山の名、パレスチナにある高山、一三三〇呎あり。

イェルラチチ Yellacit. 人名、オーストリアの名將、ホッリア一揆の時に功名を擧ぐ アダラムに死す、(西紀一八〇一—一八五九)。

イェルロースト Yellowstone. 河の名、アメリカのミシシッピ河に注ぐ大河なり、此河の畔邊一帯は勝區なり。

イェルメ Jeremia. 人名 猶太イエルサレムの豫言者、西紀前五三九年の治世に於て、氏は苦心遂にイエホバエ教を國教とせり。

いん 威王熊商 人名 戰國楚三十五代の王、宣王の子、齊を伐ち徐州を敗。

いん 威王因齊 人名 戰國齊三代の王にして桓公の子、國衰へたるの時王能く賢臣良將を用て以て國勢を挽回せり。

イオニア Ionia. 地名 小アジアの西方、リシアとカリアの西海岸一帯の地方にして 西紀前一〇五〇年頃早くもギリシアの殖民地なりしを以て 文學 技藝 哲學等に大に發達せり。

イオン Ion. 化學、電流の通ずるに依りて 電解物の解離したる各部分をいふ、而して正電氣をになふものを陽イオンと稱し 負電氣をになふものを 陰イオンと稱するなり。

イオン かわ イオン化 化學、イオンになることなり。

いか 鳥賊 動物 軟體動物 頭足類に屬す、其體は 頭、胴より成る 頭の側面に大なる眼二個あり 頭の上端に五對の足あり、

其中二本は殊に長し 數多の吸盤ありて物に附着す、足を中心に口ありて 其唇の内に硬きちん質の嘴あり 俗に之を からすとんびといふ、胴は腹足類の螺旋狀貝殻中にある部に相當し 其内には内臟あり、頭と胸の間にて腹面に一つの管あり 漏斗といふ 胴内に入りたる水を強く射出し 以て運動をなす、肛門の近くに一つの腺あり 墨を分泌す 之と 漏斗より射出する水と混するときは 近邊一帯の水を黒くし 自己の所在を不明にするなり、貝殻は大に變形にて甲となる。

いか 鳥賊 動物、一、するめ、二、しかのぼり。

いか 衣架 衣桁に同じ。

いか 以下 一、それより下、二、徳川時代の制に 家臣の身分の 將軍に謁見するを得ざるもの稱、謁見を得たるものを 以上といふ。

いが 伊賀 國名 伊勢の西方にある小國なり、天武天皇 白鳳九年七月 伊勢の四郡を割きて置かれたる國なり。

いが 毛毯 栗の實の皮外に發生したる針の如きもの。

いがい 威海衛 地名 支那山東省の南端にある一要害なり 軍事上 甚だ重要な地なり。

い 衣桁 脱ぎたる衣服を かけて置く具、二本の柱の上に 横木を亘して作る。

い 意向 意思の向ふ所、心のうち。

い 異香 常ならぬ香。

い 以降 此の如かた、以來。

い 如何 疑ひ又は危ふみ思ふ意をいふ語、いかに、どのやうに。

い 如何にや 疑はし、たばつかなし。

い 如何にせん 如何にすべきか、なにとせん せんすべなし。

い 異學 學名 釋朱の學以外の學派なり。

い 醫學所 醫學所 物名 天保年中洋法醫師の會して、種痘館を起したるを、文久元年に至り、西洋醫學所と改め後單に醫學所と言ひたり。

い 糞果 栗の實の からの中に包まれてある

もの。
いかけ 鑄掛 鑄釜、その他 銅鐵器などの損所に銅又はしるめなどを 鑄し込みて 修繕すること。
いかけち 沃懸地 漆器に 金粉を沃かけたもの、單に いかけともいふ。
いかけちのく 沃懸地板 いかけしになしたる板のこと。
いかご 五十子 地名 武藏國兒玉郡北原村大字東五十子、足利時代新田氏の居たり、上杉氏も亦古河公方に對する時茲に居たり、享徳中上杉顯定、定正が古河成氏と戦ひ文正中 上杉房顯が古河成氏と戦ひ、文明九年長尾景春反して、定正を此地に破りたる所なり。
いかさま 如何様 どのやうに、如何なる様。
いかし 嚴 一、いかめし、たごそかなり、二、荒し、猛し、三、はなはだし、ひとし、四、大なり、多し。
いかじうま 不行馬 前方に進みゆかしとする馬。
いかしごめ 伊香巴謎 人名 初め 孝元天皇の妃となり 後 開化天皇の后となり 崇神天皇を生む、開化天皇の六年正月 皇后となり 崇神天皇 位に即くに及び 尊びて 皇太后后と申す。
いかしのみ 嚴御世 盛なる御世をいふ奉る詞。

いかじゆせい 異世受精 植物、白花の花粉を用ひず 他花の花粉にて、胚珠の成熟するを云ふ、異花受精、異花受精は皆同意義なり。
いかす 活 一、生くるやうになす、よみがへらす、二、生けて置く、生きながらへさす、三、ききめのあるやうに用ゐる、活用す。
いかた 筏 竹、木、などを組み合せ 舟の如く作り水に流して運ぶもの。
いかに 鑄形 金物の器具を作る時に 先づ鑄べき器の形を作り置き 之に鑄したる金を注ぎ込むもの。
いかにし 筏師 筏に掉して 水の上に行るを業とするもの、筏乗。
いかづち 雷 空中にふる雨雲の中には 多量の電氣を有し居る故に もし 此の中の正負の電氣相中和するとき 響く伴ふ これ雷なり。
いかで 如何 一、いかにして、何うして、どうしていかでか、二、何とて、どうして。
いかでも 如何 如何にしてなりとも、どうしても。
いかてい 如何體 如何なる様に、いかやうに。
いかな 如何兒 動物 魚の名、形 ひしこに似て 長さ三四寸 淡褐色なり 脂多きを以て 食用に適せ

す 多くは 煮て燈油をとる、又醬油を作る材料とす。
いかに 如何 一、なんと、どのやうに、(疑に用ゆる)、二、推し測りて定むる語、これほど、まごかし。
いかに 如何 一、いかに、いかに、實に。
いかに 烏賊甲 元來 軟體動物には有すべき貝殻なり、烏賊にては退化して生ぜしもの、背にあり、色白く、形 舟の如し。
いかに 烏賊肉 烏賊の肉を細小に切り 之を交せて 鹽から漬けたるもの、相州の小田原の名産なり。
いかに 伊賀局 人名 篠原伊賀守の女、替力あり、新侍賢門院に仕ふ 後 楠木正儀に嫁す。
いかに 玩具の名、細き竹片にて種々の形の骨格を作り 之に紙をはりて 種々の畫を書きたるものなり 即ち 紙寫のこと。
いかに 伊賀袴 牛袴の裾を 紐にて膝に括りつけ 下に 別に脚絆を用ゐるもの、野服なり。
いかに 如何許 一、いくばく、なには、どの位、幾何、二、なには、どのやうか、如何。
いかに 貽貝 動物 貝の名、形 ぶがひの如し、長さ三四寸 殻黒く 肉は 紅紫にて 味美なり 口の邊

に黒き毛あり。
いかに 烏賊湯 湯の名、肥後國兼北郡洲口村にあり 高さ二十二丈八尺あり。
いかに 射返 一、矢を射かけて 敵を追ひかへす 二、敵より射たる矢をとりて 再び 敵に射てやる。
いかに 伊香保 地名、上野國西群馬郡にあり 温泉を以て名高し。
いかに 互に推むこと、二、轉して、言ひ争ふ、喧嘩する。
いかに 伊賀光季 人名、佐藤朝光の長子、左衛門督檢非違使となり 伊賀判官と稱す、後 義時の命に依りて 京師に出て 髪に備ふ、承久三年 後鳥羽上皇に攻められ 火を放ち 長子光綱を殺して 自ら 割腹して 焚死す。
いかに 伊賀光宗 人名 將軍義時の後妻の兄 義時死し 三浦義村を招き、將軍を逐ひ、泰時を斥けんとして、成らずして止む。
いかに 唾 怒りて吐ゆ、噴みつかんと向ふ。
いかに 装束を入れる函。
いかに 如何 一、いかに、いかに、何として、いかに

いかんろく 雜草束 植物 植物の材質を構成せるもの高等植物にては、全體束狀體をなせり、之れ此名の起る以所なり、外部は初皮部、内部は木質部よりなり、中間に形成層あり。

いかにんご ならば 如何に答ふるならば。

いかめし 嚴 嚴 ねごそかなり、威儀正しくして 犯す可からず。

いかものづくり 嚴物作 いかめしき飾りの作りもの、(刀劍などに云ふ)。

いかものづくりのたち 嚴物作太刀 毛皮の尻積などをかけて その體 如何にも いかめしく拵へしたる太刀。

いかやう 如何様 如何なる様に、そのやうに。

いがらし じざきもん 五十嵐次左衛門 人名 陶器の製造家、肥前唐津の城主寺澤忠高の臣、陶法をよくす、後致仕して 筑前に行き 鮮の歸化人と共に 遠州高取にて 陶器を製造せり、之を高取焼といふ。

いからし 伊唐島 島の名、薩摩國西北方の海中にあり、周圍 四里半。

いからず 怒 一人をして怒らしむ、怒るやうになす、二、角だたす、そびやかす、いからかす。

いかり 碇 船などを留め置く爲めに 綱をつけて 水底に沈めたく鐵製のもの、古は 石を用ひしが 今は 多く鐵製のものを用ふ。

いかり 怒 怒ること、立腹、はらだち、物事の自己の意に さらかひて 心平かならざるより ねこす はげしき感情なり。

いかりがまし 是らだちやすし、はらだたし。

いかりざう 碇草 植物 草の名、岩石に生じ 一根本より 數莖を生ず 莖毎に 三枝あり 枝毎に亦三葉あり 葉は 卵形にして 鋸齒あり、夏 四瓣の淡紫色の花を開き 倒に垂る 中に長き莖あり 瓣に沿ふて四出し、端上に曲りて 其狀 碇の如し。

いかりづな 碇綱 いかりをつなぐ綱、索、又は鎖を用ふる。

いかりのつめ 碇爪 碇の端の 曲りたるところ、錨鈎。

いかるが 斑鳩 動物 鳥の名、大さ ますの如く 體は藍色にして 尾は茶色、嘴は黄色にして 太く、短く、脚は赤し、まめまはしに同じ。

いかるが かうじもん 鴨幸右衛門 人名 人形師、山が伏見の人、元和元年 初めて 玩具の土人形を作る、世

人 彼を 人形幸右衛門と稱せり。

いかるが ののみや 斑鳩宮 宮の名、推古天皇の九年 聖德太子の建立せし宮、其子 山背大兄王も茲にましまし 皇極天皇の二年 蘇我入鹿 兵を遣はして 之を焼く 王 自經して薨す、今の和國法隆寺境内の夢殿の邊は、その趾なりと云ふ。

いそ 息 動物の 口及び鼻より 肺へ空氣を出入せしむること、呼吸。

いそ 意氣 一、心だて、氣象、二、風采のさつぱりしたること、瀟洒。

いそ 依歸 たよること、頼みにすること、力にする こと、よりかかること。

いそ 異儀 一、物のかけりたる姿、二、常に異りたること、異狀。

いそ 異議 他に異りたる議論、異存、異論。

いそ 意義 意 意、意味。

いそ あがる 生起 息とふきかへす、よみがへる、蘇生す。

いそ せいど 生生 勢ひ盛に、活潑に、活動に。

いそ うし 行臺 行きにくし、行くを好まず。

いそ うし 生寫 一、生きながらの姿を見つづ 二

を寫しとること、寫生、二、畫きたるものの 眞物と紛ふ ばかりに巧みなること。

いそ うまのめぬく 拔生馬眼 事をなすに 敏捷にして 伶俐なるを たとへていふ語。

いそ うめ 生理 生きながらの人を 土中に埋めることと云ふ。

イキケ Iquique 港の名、チレ國の北部タラパカ地方に於ける要港なり。

いそ こみ 意氣込 いきこむこと、きはひ、又 きたて、氣象の義。

いそ こむ 意込 勢を込める、きはひ、力をいゝ、盛氣となる。

いそ す 海髪 植物 海草の名、長さ一尺ばかり 甚だ短かくして 枝あり 亂髮の如し、色青く 乾けば紫黒となる 食用に供す。

いそ せき 息恣 息とせきて、烈しく息ぎて、噪氣。

いそ だじ 息絶 息のきること、氣絶。

いそ たなし 目覚むること難し、ねぼらなり。

いそ ちる 行散 分れ分れになりて去る。

いそ しま 生島 島の名、肥前國西北方の海中にあり、周圍 六里二十六町あり。

いさづゑ 息杖 重荷を擔へる人の 暫く休む爲めに 其荷を肩より外して 支ふる杖。

いさど 依稀 國「依稀猶彷彿」とあり、よく似たる さまをいふ。

いさどしーいけるもの 凡て天地の間に生きてあ る程のもの、わらゆる生物。

いさどほる 憤 一、歎き憂ふ、心平かならず、二、 恨み怒る、烈しく立腹す、三、氣を勵ます。

いさどほろし 心平かならずして 憂ふるさまなり。

いさながらふ 生存 世に生きてくらす 死なずに居 るなり。

いさなしま 生名島 島の名、伊豫國の東北の海中に あり 周圍 三里餘。

いさのくに 壹岐國 國名、西海道十二國の一、石 田 壹岐の二郡より成る。

いさのした 息下 息のたへんとする際に 聲のか ずかなること。

いさのね 息根 息のもと、生命、玉の緒。

いさのな 白緒 玉の緒、生命。

いさはだかる 世の中に望みなく、徒らに生きのこる なり。

いさほひ 勢 一、いさほふこと、競ふ力、二、威光 威力、三、すべて 物事の盛なるさま、四、なりゆきの こと。

いさほひはちくのーごし 勢如破竹 竹を割るに 一度 其一端に刃 加ふれば 容易に末まで裂くるなり、 故に 勢の烈しくして 抑ふべからざる こと。

いさほひまうーに 勢益 勢たけく、勢さかんに。

いさまく 息巻 憤りて 息が せはしくなる、急ぎ て 息をあららかになる、息づかひを わらくして 怒 るなり。

いさまふ 息を凝らす、息を張る。

いさみたま 生御魂 陰曆七月に生者を饗する式の 名、又、孟蘭盆に 兒女より 生ける父母 尊長を饗應す ること。

いさめぐらふ 生廻 生きながらへて ふるさ知人に めぐりあふ。

いさやう 異郷 異なる土地、他國。

いさやうしふ 伊京集 書の名、撰者は詳ならず、伊 の字に始まり 京の字に終り、天地 時節 人倫 畜類、 草木 財寶、食物 數量、言語 進退の十門に分ちて 説 明せる一種の節用集なり。

いさゝかやうーに 意氣揚々 得意なるさま、はこり がはに。

イギリス England 地理、大ブリテン 即ちイングラ ンド、スコットランド、アイルランドとを合して作れる帝 國なり。

イギリスかひだ 英吉利海峡 English Channel 海峽の名、イングランドと フランスの間にあり 其の最 も狭きところは 相距ること 僅かに二十一哩にすぎず。

イギリスしまたう 英吉利諸島 British Isles 地名 歐洲北西にある群島にして大ブリテン本島、アイルランド 及其附近の諸島を總稱す。

イギリスてんぐ 英吉利帝國 British Empire 地名、イングランド、ウェールズ、アイルランド、ス コットランド及其領地を總稱せるものにして、世界第一の 最大國なり、領土の主なるものはインド、カナダ、オース トラリア、ニュージールランド、タスマニア、南阿州地、 東部アフリカ、ソコト海峽殖民地、ホルチオ、ニューギニ ア(メアア)、英領グイアナ等にして、其他大洋中に散在せ る諸島に至ては枚舉するに遑わらず。

いさわたる 行亘 ゆきわたるにたなし。

いさ生 一、死なずして世にある、世に生きてれる こと。

いさふか 幾個 いくつ、なんぞ。

いさかくり 幾返 いくへん、いくたび、いくくわい のこと。

いさくすり 生薬 死なぬ薬。

いさくもる 幾雲居 遠く隔りたる空。

いさ軍 一、兵卒、軍勢、二、戦、合戦、戦争、戦 闘のこと。

いさかみ 軍神 武運を祈る神、軍の勝利を祈らん が爲に祀る神、兵家にて 北斗星を祀る 其第七に 破軍 星あり、銀を圖すればなり。

いくさーだち 軍立 軍に出る立つこと、出陣、出師のこと。
 いくさーならし 軍馴 戦争の時の用意の爲めに 平素兵卒を訓練すること、訓練、操練。
 いくさのーかごで 軍門出 いくさだちに任せし。
 いくさーぼし 軍星 北斗星の中の一、いくさがみの所を見よ。
 いくさーまつり 軍祭 軍神をまつること。
 いくさーもよび 軍催 軍勢をくり出す支度、戦の用意戦争の準備。
 いくさーよばひ 軍喚 間に任せし。
 いくさーなみてーやなつる 見軍作矢 豫め用意なくして 事物に遭ひ 俄かに 力をつくすとも益なきことの例にいふ、盗人を見て繩を縛ふと同じ意なり。
 いくし 齋串 一、神前に 玉 幣などをかけて奉る柳、小竹などの柳、二、聯歌にては 節分に用ゐる鬮の頭を 枝にかけたるもの。
 いくし 育兒 子供を養育すること。
 いくしほ 養入 養度となく 染むること。
 いくしゝん 育兒院 貧しき人の小供 孤子、或は捨子などを 養育する所なり。

いくせ 幾瀬 一、幾何の類、二、轉じて 幾何。
 いくち 幾十の義、なにはと、いかはと、幾何。
 いくらーたび 幾回 いくたびに任せし。
 いくたーのーうら 生田浦 浦名、攝津國八部郡の西南にあり。
 いくたのーもり 生田森 地名 攝津國にあり。
 いくち 意氣地 氣の張り、氣力、意地。
 いくち 植物 菌の名、表赤く、裏白く、ともに黄ばみ裏には小孔あり、積糞なし、有毒なり。
 イグチノス Ignitus 人名 西紀前五世頃の人、ギリシアの大建築家、アテチのバルテシ 建築物の考案者なり。
 いくつ 幾個 一、いくばくの數、何程の數、二、多くの數のこと。
 いくーどうーたん 異口同音 一、多くの人が 同時に聲を發すること、二、多數の人士の議論が 相同じきことをいふ。
 いくーとしなみ 幾年並 いくとせに同じ。
 いくとせ 幾年 一、幾何の年、幾年、二、多くの年のこと。
 イグナチエフ Ignatius 人名、ニコラス イグナチエフ

フはロシアの將軍にして又外交家なり、清國トルマ等に公使となりて駐在し 一八八一年には 内務大臣となれり。
 イグナチオ Ignatius 人名 イグナチオ、デ、ロヨラは西班牙に生れたる人、軍人にして又高僧たり 即ち 初めは軍人として 佛軍に従ひ 後宗教に盡力して イエスイタ教會を創立したり、教會の憲法、靈魂上の問題等の著書あり。
 いくのーざんざん 生野銀山 地名 但馬國朝來郡にあり 本邦有名なる銀の産地なり。
 いくほうーもん 郁芳門 宮城十二門の一、宮城の東賢待門の左にあり。
 いくばくーもーなく 無幾 幾程もなく、間もなく。
 いくひさ 幾久 いくまでも、つづくこと、長く久しむこと。
 いくし 幾重 一、いくばくの重り、二、多くの重りのこと。
 いくみーだけ 茂竹 技葉の茂りたる竹。
 いくむ 射組 互に射合ふ、射交はす。
 いくよ 幾夜 一、いくばくの夜、二、多くの夜。
 いくよ 幾世 一、いくばくの世、二、多くの世。
 いくーら 幾等 いくとせにおなじ。

いくり 涅 海の底にある 黒き土、くりの條を見るべし。
 いくわい 意外 思ひの外なること。
 いくわん 以運 此のかた、以來、以後。
 いくわん 衣冠 一、衣冠と、二、冠と袍とに 指貫をはきたるすがた、下襲も裾も 石帯もなくして 腰帯をつけたるもの。
 いく池 池を掘りて 水をたたふるところ。
 いくーうん 活魚 放ちて 水にいかしおく魚、不時の用に備ふる爲めなり。
 いくがき 生垣 樹木を植いて 垣としたるもの、立樹の垣のこと。
 いくかはちーのーたき 池河内瀑 瀑の名、土佐國土佐郡橋矢村にあり、高さ十五丈、幅三間。
 いくがみーしろぶ 池上四郎 人名 薩摩の人、醫池上貞齋の子、幼時より醫を好まず、西郷桐野等の先輩と交る明治十年の役起るや、一隊の長となり 熊本城を攻め、後諸所に轉戦したりしが 九月二十四日遂に城山に於て戦死せり。
 いくーさだかつ 池定勝 人名 幕末の慷慨家、細川三馬助、又は細江總太郎と稱す、土 藩士なり、萩藩の

佛國軍艦を馬關に撃つや 一方の参謀たり 中山忠光が兵を大和に上ぐるや 其先陣となる 慶應二年五月二日 船に乗じて 肥前五島沖を過ぐる時颶風にあひ 船中に白刃せり 年二十六。

いけす 魚を活かし置くとくろにして 水中に竹籠を結びたるもの。

いけだ 池田 地名 攝津國豊能郡の市街、慶長の初め頃 尼が崎の市を 此所に移せしを以て 當時は 商業の中心となりて 大阪に劣らざりき。

いけだ いせん 池田永泉 人名 有名なる浮世繪師なり、名は善信、字は 混聲、通稱は善四郎、國春樓、無名齋、一峯庵、北家などの號あり、初め 狩野白桂に學び 後 一流を成す、嘉永元年七月二十三日歿す、年五十九。

いけだ くわんざん 池田冠山 人名 幕府の大番頭、本姓は松平氏、名は完常、博學なりしを以て名顯はる 文政十二年七月九日歿す。

いけだ すみ 池田炭 攝津國川邊郡一庫村の山中にて 燒き 豊郡池田村より 諸方へ送り出す 櫟炭の炭なり 故に ちくくら炭ともいふ。

いけだ せいしき 池田正式 人名 俳諧家、大和郡田

の藩士、平群實柳などの號あり、松本貞謙の門に學び 眞門の三客と稱せらる。

いけだ てるまさ 池田輝政 人名 初めの名は照政、信輝の第二子、人となり沈勇にして 村畧あり 秀吉に従ひて 小田原を征し 功に依り 三河國吉田十五萬二千石に封せらる、後 家康 従ひ 屢々 軍功を立て 關ヶ原役後 播磨五十二萬石に封せられ、右近衛中將に任せらる 文祿十八年正月歿す。

いけだ どりび 池田獨美 人名 痘科醫、徳川幕府の醫官たり、周防國岩國の人なり。

いけだ みつまさ 池田光政 人名 輝政の孫、新太郎少將と稱す、播磨の封と與ぎ 後 因伯二州を領し、次で又 封を備前にうつさる、性學を好み 熊澤蕃山を用ひて 學校を起し 藩の子弟を教授す、関谷慶之れなり、又 殖産興業を盛にし 教化大に行はれ 治績の著しきものありしかば 徳川家光より その諱字を賜ふて 光政と改む、寛永三年左近衛少將に任せらる、天和二年五月卒す、年七十四、芳烈公と諡す。

いけ づき 池月 馬の名 源頼朝は二名馬をすす、一を池月といひ 一を磨盤といふ、壽永年間 兼仲を京師に攻めし時 梶原景季に 磨盤を賜ひ、佐々木高綱に 池月

を賜ひ 共に 宇治川の先登を争ひしこと 平家物語 源平盛衰記等に見ゆ。

いけ づくり 生作 料理の名、鯉 鮒などを 生きながらに 肉を切り 料理したるもの、いきづくり。

いけ どの 池殿 人名 平頼盛のこと、又 その生母 池の尼のことともいふ、池の尼は清盛の繼母なり。

いけ ざり 生捕 一、いけとること、生捕、二、いけとりたる人、捕虜、俘囚。

いけ へ 牲 牛鬻の義なり、獸を生けながらに 神に供ふるもの、犠牲。

いけ の むろ 池心 池の真中、池の中心。

いけ の せん に 池産尼 人名 池殿ともいふ、藤原宗房の女にして、刑部卿平忠盛の後妻、清盛の繼母たり、平治の亂後 源頼朝の生命を 清盛に乞ひて 助けし人なるを以て有名なり。

いけ の たいが 池野大雅 人名、有名なる畫家、名は無名、字は貸成 通稱は秋平、大雅堂、霞樵、竹居等の號あり 京都の人、清人伊字凡につきて畫法を學び 遂に一家を成す、我國南宗畫の祖なり、其妻 玉洞は 亦夫の意をつたへ、よく筆管を弄せり、大雅は安永五年四月四日歿す 年五十四、奇行頗る多かりしを以て 畸人を以て目

せられたり。

いけのべーのなみつきーのみや 池邊双槻宮 宮の名 用明天皇のおはせし宮にて 大和國にあり。

いけのもくす 池藻屑 書名、荒木田鹿の撰、南北朝 紛亂の事蹟を記せるもの。

いけはぎ 牛剥 獸類を 生きながらに 皮を剥くことをいふ。

いけばな 生花 草木の花枝を 瓶に挿し水に生けて 室内の飾りとすすの技藝なり、立花の技藝より分れたるもの、枝を種々の態度に揉め作る、足利時代に一種の技藝となりて、京都 角堂の僧 惠庵坊 其技に達せり、其の流を 池の坊といふ、後世 池の坊の祖なり、池の坊は 小野妹子より始まるともいふ。

いけはらごさもん 池原五左衛門 人名、劍術家、水戸侯の師範役たり、一流をなして 正天狗流又は判官流とも稱す。

いけび 活火 いたる火、埋火。

いけべはく 池原璞 人名、有名なる天文 曆算家、肥後國の人なり、安永七年歿す 年四十一。

いけま 生馬 植物、蕁草の名、馬の病に効あればかきいふとぞ、春 宿根より蔓を生じ、葉は かがいもに似

て薄く圓く、毛なくして對生す、花は五瓣の白花なり、根はやまのいもに似たり、馬の病によし、牛皮滑。

いけいみぐさ 池見草 植物 蓮の異名。

いけん 意見 一、心に思ふところ、見込、所存、二、轉じて 意見を告げて 主君又は人を諫め 警むることなり。

いけんしよ 意見書 一、自己の意見をかきたるもの、二、人を警め 又は諫むる爲めに 自己の意見をかきたるもの。

いけんはふじ 意見封事 歴史、醍醐天皇が 國政を御覽慮し給ふの餘り、延喜十四年諸臣に詔して 直言を求め給ひし時、三善清行が 意見十二條を草して 時勢を論じたる封事を奉れり之を 意見封事といふ、之れ實に古今の名案なりき。

いごうくわん 異工同曲 工人は異れども 其の作り方の同じきこと、別の意見なし、別の方法なしなどの意に用ゆ。

いごん 異國 我國と異なる國、外國。

いごん 息 團 休息す、やすむ、憩。

いごん 伊吾盧 地名 西域の一國にして 今の哈密の地なり。

イゴル Iorgol 人名 イゴル一世は ロシアの大侯なり、西紀九四一年、コンスタンチノブルを攻めて 土帝をして 和を講はしむ、九四五年 伏兵の爲に殺されたり、イゴル二世は ロシアの大侯、政治家、一四七七年 暗殺さる。

いごん 如何ならんか、どうしややら、(下には必ず「知らず」と承く)。

いごん 他を誘ふ時、又は 自ら氣進む時に 發する聲、いごん、いごん、と云ふ。

いごん 異相 人並に異りたる貌、かはりたる姿。

いごん 着想 考へ、たもひ、思案。

いごん 意外 意外の外に、意外に。

いごん 言逆ふの利、言語にて争ふ、口論す、言ひあふ。

いごん 鰻魚 魚の名、形、せいに似て 色は灰黒にして赤みあり、側面に一條の黃筋あり、味 美なり 夏 秋の頃 最も美味なり。

いごん 植物、木の名、(玉尖の義) 梧桐の一種、葉は多く一つに三つに分けて 薄く 背尖り、炒りて食すべく 皮は以て繩を作るべし、馬に多く食す。

いごん 潔 一、甚だ清し、清淨なり、二、汚れ

なし、鄙劣なる心なし、潔白なり、三、わるびれず。

いさく Isaac 人名 ヘブライの教長にして 溫和なる君なり 高齡を保てり。

いざくゾーン Isaacohn 人名 ヘンリー、イザークゾーンは ロンドンの人、年代記の著者なり、(西紀一五八一—一六五四)。

いざく 砂 又 は すなになし。

いざくち 砂路 すなごの多き道、まご路、砂原、小石原のこと。

いざくむし 砂虫 動物 虫の名、一名せむしともいふ、流水の石の上に生ず、背に小き砂を綴り負ひて 石につく、形 蠶に似て小く 淡黄なり、漁人は之を取りて 釣の餌とす、羽化するなり。

いざく 細小 細小の義なり、魚の名一、攝津 兵庫又は 駿州等に産す、一名 とろめん、又はしらすと云ふ、白色にして やや黒みと帯べり、二、近江國滋賀郡の湖邊に生ずる魚の名、形はせに似たり、三、越前足羽川に産する魚の名、形はせに似たり 長さ一寸ばかり、鮓につけて 干し物とす。

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

いざく 一、少しばかり、僅に、些少、二、かり

る縁、條、點などあるもの稱。

いさよひ 叱 叱する。

いさよひ Isahel, Isabella. 人名 カスチルの女王、アラゴン王フェルナンドと婚し、遂にアラゴンとカスチルとを合併し、全イスパニアの統一基礎を作り、賢明にして、夫王を助け國政に精勵せり、コロンブスのアメリカ發見を助け、エテヤ人を、イスパニアより放逐せし等は有名なる事蹟なり、(西紀一四五二—一五〇四)。

いさよひ Isahel. 人名 フランス王カロロ六世の王妃なり、一三九三年 夫王の病氣中は、國政を親らし、歴史を極めたり、(西紀一三七二—一四三五)。

いさよひのすめらみこと 去來穗別天皇 人名、四仲天皇を申す。

いさよひ 勇 勇む状にてあり、勢強し、雄雄し。

いさよひ 勇 勇ましく、はたらく。

いさよひ 勇 氣を張りて、進む、心に勢起る、奮發す。

いさよひ 諫 禁止する、他の非を告げて、戒め改めしむ諫言す、意見を加ふ。

いさよひ 睡覚 ねざめにたなし。

いさよひのしんみ 神鼓 諫めんとする人のならず鼓のこと。(昔那の故事より出づ)。

いさや Isaya. 人名 ヘブライ第一の預言者、且辯士なり、大に公事につとめたり。

いさよひ 十六夜 一、いさよひのつき略、二、陰曆の十六日又は、其夜の稱、既望。

あざよひざくら 十六夜櫻 植物、櫻の一種、陰曆正月十六日の頃に開くを以て此名ありといふ、伊豫の道後に産す。

いさよひにつぎ 十六夜日記 書名 藤原爲家の室、阿佛尼の撰なり、尼が夫の歿後、その子爲相の所領たる播州細川の庄を、其先妻の子、爲氏に押領されたるより、鎌倉の裁決を仰がんと爲めに、後宇多天皇の建治三年十月、京師を發して、鎌倉に下りしときの道中日記なり。

あざよひにつぎざんげつせう 十六夜日記殘月抄 書名 小山田與清と北條時國との合著にして、十六夜日記を註釋せるもの。

いさよひのつき 十六夜月 日暮より、少し後れて出づる月の義、陰曆十六日の夜の月、略して、いさよひといふ、既望月。

いさよひばら 十六夜薔薇 植物 ばらの一種、葉は小さく、山椒に似たり、夏、白又は、桃色の花を開く、駿河、甲斐などに多し。

いさよひ 猶豫 滯り進まず、遅ひ休らふ、たゆたふ、猶豫上。

いさよひ 少しの、いさよひなる、いさよひ同じ。

いさよひ 鑄造 金屬を鑄りたる上に、みがきをかけ、滑にする。

いさよひ 流火 いさよひに用ゐる炬火、すなをとりする火。

いさよひ 漁船 流りする舟、獵船。

いさよひ 漁 魚介を採る、すなを、あさる。

いさよひ 勝澤 地名 陸中國勝澤郡にあり、桓武天皇延暦二十一年、坂上田村麿、此の地に城を築きて、蝦夷に備へしより、爾來、鎮守府將軍を置きたる所にて、此地に、よみて、奥羽を治めたり。

いさよひ 功 手柄、いさをし、功勞、勳功。

いさよひ 功 一、勉めてあり、出精なり、精を出す、二、世に功あり。

いさよひ 功人 功のある人、勇しき人、益其雄のこゝろ。

いさよひ 難 いさよひな事、若きこと。

いさよひ 意思 いさよひし、料見。

いし 異志 不軌の心、謀叛心。

いし 美 一、よし、美事なり、うつくし、二、旨し、味良し、三、巧なり、上手なり、四、けなげなり、殊勝なり、神妙なり。

いし 異事 常に異りたる事柄、非常なる事。

いし 異時 他の時、他日。

いし あはせ 石合 遊戯の名、奇異なる形の小さき石を合せて、勝敗を決するもの。

いし あやめ 不草蒲 せきしやうにたなし。

いし いも 石芋 植物 芋の一種、暖國に自生す、食ふ可からず、野芋。

いし うす 石白 石にて作れるひきうす、又は、つきうすにたなし。

いし うち 石打 一、小石を打ち合ふ闘、二、いしうちのはねの略。

いし うち のちや 石打征矢 石打の羽にて矧ぎたる征矢、大將軍の用ふるもの。

いし うち のはね 石打羽 鷲の尾の左右の端より第一第二にわたるもの、この羽、極めて強きが故に、矢に矧ぎて常用す、中票、本羽、切斑等の名あり。

いし うち のやなくひ 石打胡蝶 石打の征矢をもる

け仲謀、遠州濱松の人なり、寶曆四年八月十七日歿す年五十一。

いしづ 頭使 圖 あこにて差圖す、あこにて人を使ふ。

いしずり 石摺 圖 石碑などの字を、墨にて、紙へ摺り取ることをいふ。

いしだ いふてい 石田幽訂 圖 人名 有名なる畫家、京都の人、丸山應舉の師なり 天明六年五月歿す。

いしだう ちくりん 石堂竹林 圖 人名、弓術の達人、吉田流 竹林派射術の祖なり、慶長年中歿す。

いし だたき 石敲 圖 動物 鳥の名、せきれいにわなし。

いし だたみ 石疊 圖 一、石段、石階、二、地上に平たき四角なる石を敷き詰めたるを、三、地紋の名、方なる形を 縦横に並べたるもの。

いし だい 石鯛 圖 動物 魚の名、黒鯛に似て大きく背より 腹に亘りて たてに黒き條 數多あり、大なるは三尺に至る、一名、くろくちといふ。

いし だ みつなり 石田三成 圖 人名 秀吉の臣下、姓は藤原氏 本名は宗成 近江の人、豊臣秀吉に寵を得て 機務に參す、人となり、奸佞奇智あり、秀吉歿するや 家康の威望獨り隆々たるを見て 心平ならず 同志と糾合して 家康を除かんとし 慶長五年九月十五日 關ヶ原の戦を開

きしも 三成の軍全く敗れて 捕へられ 京都三條河原に梟首せられたり。

いし ち ぬり 石地塗 圖 塗の名、漆を灰色にして 光りなきやうにぬりたるもの。

いし づ づ津 圖 地名 和泉國泉北郡 神石と濱寺の二村の間にあり、延元三年北畠顯家の陣歿すし所。

いし づき 石突 圖 一、こりり(鎌、二、戈、鎗、長刀などの本 又は銃砲の台尻を包む金具のこと、尖れるを鐙といひ、平なるを鐵といふ。

いし づき 石付 圖 竹の根の土中にて朽ちたるものをいふ、薬用とす。

いし づくり 石作 圖 一、石を細工して物をつくること 二、石にて作りたること、木造などに對していふ。

いし づち やま 石槌山 圖 山の名、伊豫國周賀郡にあり 此國第一の高山。

いし づばめ 石蕪 圖 蛤の形をなせる石。

いし づぼ 石壺 圖 伊勢太廟の外玉垣門の内にあり、祭典に際し 勅使 祭主 已下 正宮司、正禮齋宣等の座する所。

いし づこ 石床 圖 河底の 恰も石をしきつめたるが如

いし づろ Isidor 圖 人名 セント、イシドロは熱心なる宗敎家、イスマニアの耶穌教徒に大なる感化を與へたり、四月四日は其祭日なり、(紀四五七〇—六三八)。

いし づら ぐら ながれに まくらす 嗽石枕流 圖 負け惜みの強きこと。

いし の うちとし 石野氏利 圖 人名、有名なる劍客、紀伊侯に仕ふ、離想流槍術の祖なり、元禄十年十一月歿す年七十三。

いし の たまし 椅子御座 圖 四掛を設けたる 天皇の御座所。

いし の からと 石櫛 圖 死屍を納むる棺のこと。

いし の ち 石乳 圖 つららし、又 しようにうせきに同じ。

いし の つらら 石鐘乳 圖 しようにふせきにわなし。

いし の てててい 意思の徹底 圖 志の透りて 餘蘊なきこと。

いし の はな 石花 圖 干潮に際し 海中にある石よりふきこぼるもの。

いし はじき 石彈 圖 古の兵器、木を立て 其上に石を載せ 機にて其石を投げとばすもの。

いし じ やま 石橋山 圖 地名 相模國足柄下郡にあり 治承四年 源賴朝 始めて 兵を擧げ 大庭景親と戦しところなり。

いし じ ち 石鉢 圖 石にて作り、水を入るる鉢。

いし じ び 石灰 圖 化學、酸化カルシウム CaO のこと にして 普通に生石灰といふ、之を水に溶したるものを 石灰水と稱し、アルカリ性反應を呈す、消石灰と水を混じ 攪蕩して生ずる白色乳状のものを石灰乳といふ、石灰は工業上に重要なものならず、又 農業上 肥料として 甚だ必要なり。

いし じ び がま 石灰燼 圖 石灰石を焼きて 石灰となすに用ゐる燼のこと。

いし じ び いし 石灰石 圖 炭酸カルシウム CaCO₃ のこと にして 焼きて石灰となす。

いし じ び の だん 石灰壇 圖 石灰にてかため築ける壇 にして 清涼殿の南にあり、諸朝儀に用ゆ。

いし じ ら ていあん 石原鼎庵 圖 人名 名高き儒者、名は學魯、字は貫卿、肥前長崎の人、又 醫を兼ね、木下順庵の門下に學ぶ、元禄十一年歿す 年四十。

いし じ ら まさあき 石原政明 圖 人名、國學者、尾張の人、本居宣長の門に學ぶ 文政四年歿す 年六十二、尾

張の家苞は其著なり。
いしひめ 石姫 人名 宣化天皇の皇女にして 欽明天皇の皇后なり、敏達天皇及二皇子を生む。
いしひや 石火矢 中世に用ひし武器、今の大砲の如きもの、始めは丸に石を用ゐ、後には 鐵 鉛などを用ひたり、佛耶機。
いしぶし 石伏 魚の名 形はせに似て大き四五寸ばかり、石に吸ひ付き 水上に浮ぶことなくして 石間に居る、一名、こり、かはしか。
いしぶみ 石神 石文の義、事を後世に永く傳へん爲めに、其記事を石に刻みつけ、建てたくもの。
いしおんうち 伊集院氏 姓名 久經の弟忠經祖たり。
いしほり 石彫 石に彫刻せるものの總稱。
いしま 伊島 島の名 阿波國東南の海中にあり、周圍二里二十九町。
いしみかは 赤地利 植物 草の名、一年生の蔓草なり 葉は互に生し 節毎に一葉を出す、莖葉ともに 刺あり 花は 薔薇に似て紅白なり、實は圓くして 紅、紫、白、黒相交る、河内國 石見川村の産を佳とす。
いしむ 麻 國 ゆがむにたなし。

いしむらけんげふ 石村檢校 人名 有名なる琵琶法師、始めて三味線を琉球より つたへ 且其技に達せし人なり。
いしん 異心 一、尋常に異なる人、二、仙人、三、異國の人、外國人。
いしんでんしん 以心傳心 禪家の語より出づ、藝術の奥義などに 言語手段にては傳へ難きにいふ 即ち心を以て心に傳ふなり、師 心機にて傳へ、弟子 心機にて會得す。
いしめ 石目 彫刻物の面に 極めて細き 凹みたる點を 隙無く付くること。
いしもち 石持 動物 魚の名、一、海に産す、形 鮪に似たり 頭中に 白き硬き小石二つあり 故に此稱あり、二、いしむしの一名なり。
いしもちろう 茅膏 植物 葉の腺毛突起して、小虫を捕獲し、養料とす。
いしやう 意匠 趣向、工夫。
いしやう 衣裳 衣と裳と、ころも、きもの、衣服。
いしやう 異狀 尋常に異りたる狀、平常に異なる事柄のこと。

いしやう 以上 一、これより上、二、箇條ある文書 又は 目錄などの末に記して 終りといふ意を示す計、轉じて 書狀の文を結ぶに用ゐる語となり、三、徳川氏の制に 將軍に謁見を得たる家臣の稱。
いしやだふし 醫者倒 植物 草の名、葉は萩に似て 大きく 冬に至るも凋むことなし、節毎に根を生す、夏の初め 莖の頭に 穗状のある白き花を開く、實は 蓮の實に似たり、薬用とす。
いしやのね 石鐵 古代に用ひし武器、石にて作りたる矢の根。
いしやま 石山 地名 近江國滋賀郡石山村にあり、境内幽邃にして 殊に 秋の月は 近江 景の一なり 石山寺は 歴史上 著名なるものにして 紫式部が 源氏物語を書きたる室 即 源氏の間は此寺の本堂内にあり。
いしやまのろうづ 石山僧部 人名 名は眞源、昭登親王の御子、薙髮して東寺の僧者、石山座主たり 永曆元年八月二十四日没す 年五十三。
いしゆがへし 意趣返 恨みを報ゆること、遺恨をはらすこと、復讐。
いしよ 異書 一、仙術などの如き 神變不可思議のことを書きたる書物、二、同一の書にて 多少 異りたる

箇所ある古書 即ち異本なり。
いしよ 異稱 異りたる稱呼、別名、異名。
いしよ 衣食 一、衣服と食物と、二、生活を營む道、くらし。
いしよ 移植 植物を 他へ移し植へかゝること。
いしよ たりて せいせつ 衣食足而知節節 管子の書より出たる語、飢寒に苦しむものは 禮義も節善も忘るるの義なり。
いしらす 射白 矢を射て 敵勢を挫く、射破す。
いしわた 石綿 價物 主として 蛇紋石 角閃石 滑石などの 割れ目にあり 白色纖維状をなし 角閃石の石 絨に比すれば強靱にして風撓し 且耐火力大なるを以て 麻苧と混して火浣布を製す 又印刷業にも用ゆ。
いしわた ころも 石綿衣 石綿にて作れる衣。
いしむつ 石井筒 石にて作れる方形 或は 圓形の井筒なり。
いしをいだいて におちに 抱石入淵 愚昧にして 自ら己れに害を招くをいふ。
いす 椅子 腰をかかふる具なり、背に倚りかかふるもの 肘をかかふるもの、寝ることをうるもの等種々あり。
いすい 渭水 河の名、濟國陝西省西安府の北にあり

て 源を秦飲に殺し 黄河に注ぐ。

いすう 異敷 他に例なきこと。

いすか 交喙 動物 鳥の名、大さ うそしく如く 嘴青く交す、然れども よく物を拾ひ食ふ 秋の末 群集して来る、羽色により 青いすか、赤いすかの二種あり、鴨。

いすがい 也 速談 人名 蒙古部の長なり 元の太祖鐵木眞の父なり、(西紀十二世紀頃の人)。

いすかーのーはし 鷓鴣 鷓鴣の嘴の くひちがふより 物事のくひちがふことをいふ、醜語。

イスキア Iechia 島の名 イタリヤのナポリ灣より六哩の海中にある火山島なり。

いすーがは 五十鈴川 川の名、伊勢國度會郡にあり 伊勢太廟の境内を流れ 伊勢海に注ぐ 又之を 御裳澗川ともいふ。

いすずく 倉皇 驚きさわぐ、周章る。

いすずーのみや 五十鈴宮 伊勢太神宮のこと。

いすずーひめ 五十鈴姫 人名 事代主神の女、神武帝の皇后。

いすずよりーひめ 五十鈴依姫 人名 事代主の命の女にして 綏靖天皇の后なり。

イスタクシフアトル Ixtacihuatl 地名、メキシコ

の有名なるアナフアク高原の火山系中にある一大噴火山なり。

イスタフリ Isthmii 地名、古代ヘルシア帝國の首府にして クルを距る遠からず。

イステゲルド Yastegird 人名 ヘルシア、ササン朝の王、ハスロー二世の孫、ヘルシア衰微せる時、西方に大食國起り 西陲に冠す、唐の援 求め禦さしも克たず、終に敗れて死す、國も亦滅す。

イステゲルド Yastegird (Istegard) 人名 ヘルシア

イスタンブール Istanbul 地名、ウエールス

イストラチフオツク Ystradyfodwg 地名、ウエールスのグラモルカン州の一市なり。

イストリア Istria 地名、オーストリアの西南の山地なり。

イスパニア Ispain 國名 歐洲の一立憲帝國にして

ポルトガルと共に アイベリア半島をなす、北はヒレチ山脈によりてフランスと境し 東南は地中海に面す。

イスパニアわらぬーけいしよーせんろー 西班 王位繼承戦争 歴史、佛王ルイ十四世、其孫フィリッポを獨帝レオポルド一世は、其次子コロロを西班牙の王嗣とせんとす。

し、一七〇一年より一七二四年迄戦へり、之より列國が国力不平衡を恐れて一七一三年ユトレヒトの和議を結びしめフィリッポ五世の西王たるを認めて局を結べり。

イスバハン Ispahan 地名、ペルシアの舊都の名なり ムハメッド教の中心たり。

イスマイル Ismail 地名、ロシアのベサラビア州の一都市、ドナウ河口にあり。

イスマイル Ismail 人名、ペルシアのソフィス朝の祖にして十四歳にして 王位を即ぎ 英名を博せり 一五四一年歿す。

イスンチムル Isun-Timur 人名、元の成宗の從子 西紀一三二三年 チンゲルの皇帝となる 即ち泰定帝之れ也。

イスマニアス Ismenias 人名、希臘デーベの有名な音聲師なり。

イスラエル Israel 國名、ソロモンの死後 ユダヤ國より分離し、イスライル人の建てし國。

イスラム Islam 宗教の名、ムハメットの建てし宗教にして、一に イスマラと云ふ。

イスランド Iceland (Island) 地名、北極圏の南方にある火山島。[65, 0 N, 20, 0 W]

いせ 伊勢 國名、神武の朝に 既に 國造を置かれし古國にして 孝靈天皇の制に之を十二郡となし 度會郡を神領としたり、現今は三重縣下に屬す。

いせいーたい 異性體 化學、同一の分子式を有しながら 其性質の全く異なるものをいふ、例、エナル、アルコールと メナル、アルコールとの如し。

いせーうち 伊勢氏 姓名、高皇玉の後裔にして後繼始めて伊勢氏と稱し豊前守に任ぜらる。

いせーび 伊勢蝦 動物、節足動物、甲殻類に屬す、體は二十の關節より成り 頭胸部及腹部の二に分る、頭胸部には各關節毎に 肢ありて其數十三對あり 第一對を小感觸肢 第二對を大感觸肢といふ 俗に之を鬚と稱す、第三より第八に至る六對は 頭胸部腹面の前部にある口の爲に食物を取る作用をなし 第九より第十三に至る五對は歩行肢なり、腹部は七關節より成る 肢は著からず、第六關節の肢は 非常に大にして後方に向ひ 第七關節の肢と共に尾を形成す、其腹面に肛門あり 頭の前面には一對の複眼あり 呼吸は二十餘の羽状をなせる鰓によりて營まる 大さは一二尺に達し 味 美なり、多くは伊勢海に産す、一名 かまくらわびといふ。

いせぎーたう 遺跡島 地名、昔しは大陸なりしも、漸

次海面下に没し、遂に其一部島となりて遺れるものなり。

いせーさき 伊勢崎 地名 上野國佐位郡にある市。

いせーさだちか 伊勢貞親 人名 平貞國の子、十六歳より仕官し、累進し、威盛なりしが、後斯波義隆と争ひ、京師を騒す、山名宗全等に討たれて逃れしが、後入京勝元に頼り舊職に復す、文明五年歿す。

いせーだいじんぐう 伊勢大神宮 我國の宗廟にして内宮と外宮とあり 内宮は 伊勢國度會郡宇治にあり 天照

皇太神を祀る、外宮は山田にあり 豊受太神を祀る。

いせーていちやう 伊勢貞丈 人名 國學者にして 著書甚だ多し 安齋隨筆、貞丈雜記等之れなり 天明四年五月歿す 年七十。

いせーながうち 伊勢長氏 人名 北條早雲の條を見よ

いせのーたほすけ 伊勢六輔 人名 大中臣輔親の女

上東門院に仕ふ、和歌をよくし 紫式部 和泉式部等と共に名高し。

いせのーかみがき 伊勢神垣 皇后の御産の時 御身につき添ひ居て 看護し奉る人。

いせのーはま 伊勢濱 濱の名、伊勢國にあり。

いせーへいし 伊勢瓶子 平忠盛の異名。

いせん 胃腺 生理 胃壁内にありて胃液を分泌する

腺なり。

いせん 緯線 地名 地球面上の赤道に平行に引きたる想像線なり。

いせん 依然 どののままなること。

いせんーせんせい 伊川先生 人名 支那宋時代の儒者にし 程子の弟子なり、少時より識見高し。

いせーものがたり 伊勢物語 書名 作者詳ならず 二巻あり 羅筆體の文章にして 業平の和歌を骨子とし

その一生の行跡を潤飾して記せるもの、此書 初めは在原業平の筆になりしものを 後人 之に筆をそへたるものなりといふ。

いせものがたりーこい 伊勢物語古意 書名、加茂真淵

の著、伊勢物語を解釋せるものなり。

いせものがたりーしふるせう 伊勢物語拾遺抄 書

名、北村吟季の著にして 伊勢物語を 解釋せるもの。

いせーやーひうが 伊勢日向 伊勢と日向とは狭く隔り

たるよりして 物事の 彼我かははれたるにたとへていふなり。

いせーやすもん 伊勢屋安右衛門 人名 藏書家、

江戸淺草の藏前に住す 藏書 數萬卷に及ぶ 勝鹿文庫と稱し 同好の士に貸與閱覽せしむるを以て樂とせり。

いろう 磯 一、湖海などの波打際にて石ある處、二、廣く湖海の邊を稱す。

いろう 五十 十を五倍したる數。

いろう 懿宗 人名、唐第十七代の帝なり、宣帝の長子、在位十五年 咸通十一年歿す年四十一。

いろういろーがに 動物 蟹の一種、形小さく 谷川の石の間に棲む。

いろういろーど 氣のすすみて 勇むさまにいふ、かひがひしく。

いろうーかき 磯織 動物 牡蠣の一種、形小さきもの、一、こがき。

いろうがし 關、忙、いとまなし、事しげし、せはし。

いろうかはーれうあん 五十川了庵 人名、名醫且和歌人

なり、慶長七年 初めて 太平記を上梓す、後又 家康の命を受けて 東鑑を刻す、寛文元年歿す年八十九。

いろうがひーひさつぐ 職員久次 人名 立入宗繼に従

ひ原草に下り、正親町天皇の密詔を信長に傳へたる人。

いろうがひーまさひさ 職員正久 人名 赤穂四十七士の

一人、淺野長矩に仕へて 物頭並となる、元禄十六年二月

四日 死を賜ふ 年二十五。

いろうーかへり 五十通 五十九たび 二、たびたび。

いろうぎーあし 急足 急いで歩くこと、はやあし。

いろうーざんちやく 磯巾着 動物 腔腸動物、六射珊瑚

類に屬す、其 横断面

體は短き圓筒 形にして上面

の中央に口わ 多の指狀の觸

手あり 干潮

の時 水より外にあれば收縮し居れども、満潮の時 水中

にあれば満開す、且つ概ね紅綠等美麗なる色を帯ぶを以て

恰かも水中の花の如し、試に肉片又は小むびの死體を其上

面に投ずれば觸手を以て之を抑へて 口中に入るさま甚

だ面白し、體を横斷すれば其中は一の腔にあらすして 中

央に口と通したる食道あり其周圍に 數多の小房車輪狀を

なし、之等の放射房は 體の下方に至りて食道と通ず、此

動物は 雌雄ありて産卵すと雖も 時々分裂して 無性生

殖をなす、此虫の死後の殘留せるものは 石灰珊瑚と稱す

いろうく 夷則 一、十二律の一、二、陰曆七月の異稱

いろく 急 國 一、事を早くせんとす、二、早足に歩む疾く行くなり。

イツクヲテス Iokrates 國 人名 アテチ、演説家にして且 憤慨家なり、自ら食を廢して 餓死す、(西紀前四三六—三三八)。

いろしきみ 回 勤めに急がはしき身。

いろしく 懇切 團 ねんごろに、丁寧。

いろしむ 團 一、つとむ、骨折る、勤勞する 二、功ありとする。

イツス Iyos 國 町の名 小アジアに於けるギリシアの町の名。

いろち 磯路 磯邊の路。

いろち 五十路 團 一、五の十倍、五十、二、年齢の五十年のこと。

いろちどり 磯千鳥 磯邊に居る千鳥のこと、轉じて磯邊に 群がりて鳥の惣稱。

いろつぐみ 磯背 團 動物 鳥の名、南洋の海邊に棲む、形 ひよどりに似て 尾が大きく 尾も尾し、頭背 胸等青黒く 腹 赤黒く 白き斑點ありて美し、いそひよどり いはづぐみ。

いろな 磯菜 團 磯に生ずる草にして とりて食用とな

るべきものの惣稱。

いろなみ 磯濱 團 磯邊に 打ちよする浪。

いろのかみ 石上 團 布留(地名)の枕詞、轉じて降る、振る、蕪き等の語にかけていふ 石上、布留共に大和國にある地名なり。

いろのかみあなほののみや 石上穴種宮 團 宮の名、大和國にあり 安閑天皇の坐せし宮なり。

いろのかみたごまろ 石上乙磨 團 人名 詩人、物語目の裔にして 當時の名族なり、勝實二年歿す。

いろふり 磯觸 團 いそなみにねなし。

いろまぐら 磯枕 團 磯邊に旅籠して 岩根を枕とする

いろまつ 磯松 團 一、磯邊に生ひたる松、二、小瀧木の名、伊豆海邊に生ず、一名いしはなびとふ。

いろまめ 磯豆 團 植物、蔓の名、海邊に生ず、莢の長さ二寸餘 豆は扁くして黒し、毒あり 食ふ可からず、一名 はまなたまめ。

いろん 異存 團 人と異りたる者、異見。

いろむし 磯虫 團 動物 虫の名、形 ふなむしに似たり、餌 さよりなどの口より往々含める虫なり。

いろもの 磯物 團 海藻の類。

いろや 磯屋 團 海邊にある漁夫などの住家のこと。

いろれんげ 磯蓮花 團 植物 草の名、暖國に生ず、葉は厚くして 麒麟角の葉に似たり。

いろわ 磯回 團 磯のまはり、磯のはどり。

いた 板 團 木を薄く平たく挽き削りたるもの、其他 此の如き状をなせるものをいふ。

イダ Ida 團 山脈の名、クレラ島の東部にある山脈にしてゼウス神の洞穴を始めし所なり、最高山は 八〇〇〇呎あり。

小アジアのフリギアとミアンとの間にある山脈にして 其の麓に トロイ町あり。

イダ Ida 團 人名 アングル人の酋長にして ヘルニシアの最初の王なり。

いたい 衣帯 團 裝束のこと、東帯。

いたい 異體 團 普通に異なる形。

いたいたぐさ 團 植物 イラクサに同じ。

いたいさげ 團 異體同形 植物 「エンドウ」ルトリイバラ」葡萄の卷鬚の如きを云ふ、此は葉 托葉、莖の變態なり。

いたいさげ 異體同功 團 形は異れども 其の功は同じなり。

いたいさげ 異體同心 團 形は異れども 其の心は同じなり。

いたう 甚 團 いたくの音便、はなはだしく。

いたがき いたいすけ 板垣退助 團 人名 政治家、土佐の人、明治政府の創設には 西郷隆盛等と共に功あり、参議となる、明治六年 征韓論に付きて議 大久保、岩倉等と協はすして朝を去る、翌七年 民選議院の設立を唱へ 明治十三年 自由黨を組織して其領袖となる 其後 屢々 政府樞要の位置を占む。

いたがね 板金 團 金屬を鑄かして板の如くしたるもの

の總稱、古くは 通用金銀などにもいへり。

いたかふ 抱持 團 抱きあふ、抱きかかふ。

いたきもの 優者 團 いたくすくれてよき人、尤物。

いたく 依托 團 委ねること、預くること。

いたくぶつ 依托物 團 他に依托したるもの。

いたくぶつひせう 依托物費用 團 法律の語、他より依托されたるものを使用して なくすること。

いたぐら 板倉 團 板を壁として 造れる倉。

いたぐらかつあき 板倉勝明 團 人名 上野國安中の城主、勝軍の裔にして 甘雨と號す、國史に通じ 詩文に巧なり 又心を殖産に注ぐ、安政四年四月卒す 年四十九。

削、深手、重傷。

いたてに 甚手 運かに、疾く。

いたど 板戸 板にて作りたる戸。

いたどり 虎杖 植物 草の名、春 宿根より生ず

新芽は 形 うごの如く 食ふべし、莖は 空にして 節

あり 高さ尺餘に達し、周り二三寸、杖とすべし 葉は互

生し 圓形なり 夏 葉間に 紅又は白色の小花むらがり

さく、實は三角にして 翅あり。

いたどりくわへ 虎杖 古 加茂の兵人ともが 貴

船の祭の踊りに 市原野の連理芝といふところにて 虎杖

を取りて 其大小をくらべ争ひし戯。

いたなく 痛泣 甚しく泣く。

いたのしんどう 振振動 物理、硝子又は金屬板の

一點を固定し 胡弓の弦を以て 之をすれば 其振動す、

此際には振動する點あり 其等の軌跡と節線といふ、

故に 豫め 板上に 砂などを置けば 砂は此節線上に集

合して 種々の形状を得るなり 之を 「くらとに」の圖形

とは稱するなり。

いたのま 板間 板をしきたる室、板敷の床、板間

のこと。

いたばさみ 板挟 一、板と板との間にはさまること

二、甲乙兩者の間にはさまりて 何方の爲にせば其きか、
決しかねて當惑すること。

いたはし 勢 一、骨折るさまなり、勢、二、病にや

ひ、三、心苦るし、心傷まし、四、大事に思ひて心置か

る、五、いとほし、六、不便なり、かはいさうなり。

いたばし 板橋 板にて作れる橋、(石橋、土橋など

に對していふ)。

いたはり 一、いたはること、あはれみ、撫恤、二、心

を用ゐること、はねどり、勢、三、病、いたづき、疾病の

ことなり。

いたはりなし 無勢 一、あはれみなし、ねもひや

なし、二、大切にせずをしげなし。

いたはる 勢 一、勤む、心を用ゐる、骨折る、二、傷

しく思ひてあつかふ。

いたび 木蓮 植物 蔓草の名、蔓は莖の如く、木石な

まにつきまどふ、葉は互生し もくせいに似て鋸齒なし、

冬も凋むことなし。

いたひき 板挽 材木を板に挽き割ることを業とする

人。

いたびき 板引 綱をつけたる絹と 板に張りて 光

いたびき 板庇 板にて作れる庇。

いたぶき 板葺 板又は せきら、そぎなどにて葺き

たる屋根、(葺葺、瓦葺などに對す)。

いたぶらし 甚振 あらわらし、甚だし。

いたぶる 甚振 他を傷め困らせて物を奪ふ。

いたべうし 板表紙 法帳 手本などの表紙の板、又

は ぼおるなどにて作れる表紙。

いたまーあられ 板間霰 板屋根の隙より降り込む霰の

こと。

いたまし 傷 あはれなり、いたはし、不慮なり。

いたみ 痛 一、外より身體を犯され 又は病む所あり

て 苦み 憫むこと、二、病、三、物の損すること、損し、

毀はれ、暇、毀傷。

いたみ 悼 哀むこと、なげき傷むこと。

いたみーいる 傷入 甚だ心づかひす、恐れ入る、過分

に仕向けられて 却りて心遣ひになる。

いたみーさげ 伊丹酒 酒の名 攝津國川邊郡伊丹より

産する清酒、品質良好なるものなり。

いたみーうた 哀悼歌 一、人の死を傷みて詠める

歌、挽歌、二、送葬の時に 其人の死をいたみて唱ふ歌を

いふなり。

いたん 異端 正しからざら道、又 異教に同じ。

いたぬ 板目 一、板のわはひ目、二、板の木埋の揃

はぬもの、(正理に對す)。

いたぬがは 撓革 いためたる革、鏡の札、又は 鎌碓

などに用ゐる、ねりかは、つくりがはのこと。

いたぬがみ 板目紙 紙を 數枚 糊にて貼り合はせ

たるもの、厚くして板の如し、帳面の表紙に用ゆ。

いたぬきたへ 板目銀 鐵を板目にとりませて 銀へ

合せたるもの、刀劍を作る料とす。

いたぬーじやく 板目筋 板目の木にて作れる筋。

いたぬーつける 痛付 酷しくどがむ、責めつく。

いたぬーぼり 板目彫 板目の板へ彫刻すること。

いたーや 板屋 一、板葺の家、二、いたやね。

いたーや 痛矢 身に深く中れる矢。

いたーやかた 板屋形 板にて作りたる車の屋形。

いたーやがひ 板屋貝 動物、帆立貝に似て小さいもの、

大さ 三寸、殻は一方は凹み、一方は平かに、外面に凹凸

の溝 數條ありて 板屋の如し、肉は味美にして 殻は貝

杓子とす。

いたやのーせき 板谷關 地名 岩代との國境にある羽

前の地名、米澤と福島との通路にして 昔時 米澤藩の關

所ありし所なり。

いたら—がひ 動物 一、蜂の一名、二、いたやがひの一名なり。

いたり 至 一、至ること、極り、極度、二、思慮、經驗のどききたること、注意の通く行き渡りたること。

イタリヤ Italia 國の名、歐洲南部の半島國にして北はフランス、スエズ、及びオーストリアに、東はアドリア海に、西南は地中海に面す、アペニン山脈は國の中央を走り、北部に、ポ—河流れ、氣候極めて、溫和にして、

葉樹花咲き、歐洲の樂園と稱せらる、農業は、其主なる生産業にして、従ふて其産額多し、宗教はローマ舊教にして政體は、立憲君主國なり、首府をローマといふ、昔時隆盛を極めし國にして、今は名所、古跡の昔時を、忍ばしむるもの枚舉に遑わらず。

イタリヤとつ—せんろう 伊太利統一戦争 歴史 伊太利王國建設時の戦、サルガニア王ビクトリア、エマヌエロ伊太利統一を期し、カポル伯を用ひ、伊太利の孤立に乗じ、軍備を修め、ガリバルダをして、澳軍を破らしめ、王位に登り、統一を全うしたり。

いたりて 至 一、極めて、甚だ、最も、二、殊に、誠になどの意なり。

いたる 至 一、届く、及ぶ、達する、二、行き着く、到着す、三、爲る。

いた—あ 板井 板にて圍みたる井。

いち市 一、多数の人、集まりて、物品を賣買すること、又、其場所をいふ、二、町、市街、都府。

いち 齊女 神樂に仕へまつる女。

いち 一、一、壹、二、此上もなく勝れたること、最上一等、三、熟語に用ひて(例へば一日一夜の如し)全き同じの意をなす。

いち 一、田圃 一、全く同じき意に用ひる、二、明にそれと指示せずして、あるもの、あることをいふ意に用ひる、三、すべて全體、こぼりてなどの意に用ひる。

いち 意地 心に思ひこみたることを、立てどはさんとする心。

いち—あし 逸足 急ぎ走ること、又、駿足。

イチ—アン Ichang 宜昌 港名、支那湖北省の貿易港にして、揚子江畔にあり、長江汽船航路の最終點として重要な位置を占む、西紀一八七七年に貿易港となりたる地なり。

いち—ち—ぬり 漆塗の名、面に甚だ細かきしわの模様を塗り出したるもの。

いち—う 一字 一、残らず、悉く。

いち—うち 一打 簡條書を認むる時に、毎條の初めに一、の字を記すこと、簡條を分ちて事を記すこと。

いち—ゆふ 一葉 一艘の小舟のこと。

いち—ゆらん 一葉蘭 植物、草の名、深山に生ずる小なき草、一莖に一葉を出し、蘭の如き小花を開く。

いち—ゆんか—さん 一酸化炭酸 化学、斜方柱の結晶にして、皮膚を腐蝕する性あり、融點は六十二度にして沸點は百八十六度なりとす。

いち—ゆんき—さん 一鹽基酸 化学、鹽酸、硝酸、醋酸等は之れ一鹽基酸なり、其の酸の一分子中に金屬と置換し得る水素一原子を有する酸を稱するなり。

いち—れう 一塵 ひととはり、ひとたび。

いち—がい—に 一概 一、おしなべて、ひとくくりにひきくるめて、二、一度に、一時に。

いち—がう 一毫 一、一本の毛すぢ、二、極めて僅かなること。

いちが—の—ながれ 一河流 一樹蔭(いちじゆのかげ)の條を見よ。

いちかは—くわくめい 市川龜鳴 人名、儒者、名は匡、字は子八、多門を稱す、上野國高崎の儒者にして、藩の侍

講たり、寛政七年七月歿す、年五十六。

いちかは—くわんさい 市川寬齋 人名、儒者、名は世寧、字は子靜、通稱は小左衛門、上野國甘樂郡の人、博學多識、最も詩に長ず、富山藩の儒者となる、文政三年七月歿す、年七十二。

いちかは—べいあん 市川米庵 人名、書家、名は三亥、字は孔陽、米元章の書法をよくせり、安政五年七月歿す、年八十。

いちが—ふ—ます 一合樽 一合の量を計る樽、方二寸一分、深さ一寸四分五厘、容積六三九五立方分なり。

いち—がん 一眼 一、かため、獨眼なること。

いち—ぎ 一義 一つの道理、一理。

いち—ぎ 一儀 一つのことから、一件。

いち—ぎ 一議 只一度の評議。

いち—き—あつ 一氣壓 物理 One atmosphere. 晴雨計の水銀柱の高さが七百六十耗なる時の空氣の壓力を一氣壓といふ、即ち、此の時の空氣は七百六十耗の水銀柱の下壓力に等しき力を以て、物體の表面を壓するものにて、其の強さは一平方厘米毎に、一千三十三瓦の重さに等し。

いち—ぐ 一具 ひと揃、ひと組。

いち—く—あん—いち—ぐ 一具庵一具 人名、俳諧師、姓は

高梨 名は里春、羽前の人なり、江戸の俳人にして 亦連歌にも巧なり、嘉永六年歿す 年七十三。

いちぐん 一軍 一、ひとむれの軍勢、一隊の兵士、二、軍勢のこらず、全軍。

いちぐいけ 一具 一、戦時に用ゐる具、左右の手にかくる平のゆがけのこと。

いちぐら 肆 一、市座の義、市の商品を列ぶる所。

いちぐらすみ 一庫炭 一、いけだすみの條を見よ。

いちぐらぶんし 一瓦分子 一、化学、グラムを單位として表はしたる物體の一分子量なり、例せば酸素の一五分子は三十二五なり。

いちげ 一夏 一、佛敎の語、陰曆四月十五日より 七月十五日までの九旬の間の稱、此の間は僧は寺院に 俗人は家に安居して修業するなり。

いちげさう 一花草 一、せつみんさうの一名、二、まんねんくさの一種、三、ちりりんさうの一名。

いちげつ 一月 一、ひとつき、一ヶ月、二、一年の初めの月、正月のこと。

いちげんさん 一弦琴 一、弦一筋なる琴のこと、二、須磨琴のこと。

いちげんし 一原子分子 一、化学 氣體の状態に

て 一分子が一原子より成れる分子をいふ。

いちこ 市子 一、梓巫の流にして、神又は 生靈、死靈などを呼び、その意中を己が口より宣ふる女のこと、くちよせ、降巫のこと。

いちご 薔 一、植物、木の名 山野に自生し 葉はさびに似て 深緑なり、莖は葉と共に 枝梢に白花を開く 夏の初に至りて 實熟す 赤くして 味 美なり蓬 菓ともかく。

いちご 一期 一、生涯、一生のこと。

いちこつ 壹越 一、十二律の一、其の條を見よ。

いちごんはんく 一言半句 一、一言、又そのかたわれ、片言隻句にたなし。

いちざ 一座 一、第一の座、上座、上座、二、同じ席に座ること、同席、三、その座のものを残らず、満座。

いちさかき 遠樹 一、植物、木の名、樹の一種、赤く紫ばみたる實の多く結ぶ木なり。

いちざのせんし 一座宣言 一、第一の座に座することを許さるる宣言。

いちさんたんぱん 一酸鹽基 一、化学、苛性アルカリ等の如きをいふ、此等の鹽基の一分子中に酸の水素一原子と化合して 水を生ずる水酸根一つを有する鹽基をいふ。

いちさんくわたんろ 一酸化炭素 一、化学、記號はCOにして 又二酸化炭素は 酸化炭素ともいふ。

いちさんくわニッケル 一酸化ニッケル 一、化学 酸化第一ニッケルのことなり。

いちさんくわぶつ 一酸化物 一、化学 酸素一原子と他物と化合せる物をいふ、一酸化炭素の如し。

いちじ 一時 一、ひととき、二、嘗てありし頃、三、しばらくの間、少しの間、四、一晝夜の二十四分の一、五、第一時。

いちじさん 一時金 一、時に賜はる資金なり、之れは年金に對していふ。

いちじく 無花果 一、植物、いちじゆくの説。

いちじけんすゐびつ 一時軒題筆 一、書名、岡西惟中の撰、和歌 連歌などのことを記せるもの。

いちじせんさん 一字千金 一、此句は呂不韋が 呂氏春秋を著して、之を咸陽の市中に掲げ、昔く一字をだに増減するものならば 千金を與へんといひし故事より出でたる語なり、句の意は 一字にて千金の價にあたるの義、

之は多く、筆蹟 文章などを貴びていふ語なり。

いちじつさんしうのたもひ 一日三秋思 一、三秋は三ヶ月の意、思ひ深くして 未だ其時久からずと雖も 既に久しく、うたるかの如く思はるるなりと、之は詩經に「一日不見 如三秋兮」に出づ。

いちじつせんしう 一日千秋 一、一日の間も 千年の如き心地すといふ義にて 物事を待ちわぶる時に使用する語なり、殊に戀情に於て用ゐるなり。

いちじのこうすい 一時硬水 一、化学 煮れば 其硬度を減する硬水をいふ、主に 酸性炭酸カルシウム及び炭酸マグネシウムを溶したる水をいふ、之れ此等の水を煮れば此等の酸性炭酸鹽は分解し 炭酸瓦斯を放出して 水に溶けざる炭酸鹽となりて沈澱するを以て 硬水は其度を減し或は全く 軟水となるなり。

いちじのじしやく 一時の磁石 一、物理 電流の通する時のみ磁性を現はすものをいふ、ソレノイド、電磁石の如し。

いちじばん 一巻版 一、活字版にたなし。

いちじみせう 一字御抄 一、書名、後水尾院の御撰、天地山海より 鳥獸虫魚の類に至るまで 結題川の文字をいろは順にすちて 題詠の作例を示し給ひ 又題の虛字

熟字をも部類分をなし、各 詠物の歌を ひかせ給へるものなり。

いちじん 一人 天皇を申し奉る。

いちじゆく 無花果 植物

木の名 高さ一丈許、葉は桐に似て 夏の頃大き一寸ばかりの實を結ぶ 秋に至りて熟す、外部は紫、内部は紅にて

(圖中) は複果の縦斷面を示せるもの、白き小核多し

味 甘し、花は 實の中にて開くを以て 外部より見るを

いととを見て知ることを得。

いちじゆのかけ 一樹蔭 佛教の語、共に一樹の蔭に宿り 共に一河の流れを汲むも 皆之れ他生の縁なりと云ふ。

いちじよう-かわら 一條兼良 人名 左大臣従一位關白經嗣の二子、太政大臣關白となる、故典、和歌等に委しく、連歌集を作り、禪河記をも作る、文明十三年四月歿す年八十 謚して後成恩寺といふ。

いちじよう-け 一條家 北條時頼の計らひにて新設せられたる五攝家の一なり、藤原忠通の子兼實、九條家を稱し 其孫道家に至りて 其の三子を三家に分つ、即九條二條一條にして 一條家は即ち實經より出づ。

いちじよう-てんわう 一條天皇 人名 人皇第六十六代の天皇、在位二十五年 寛弘八年六月廿二日崩じ給ふ御年三十二。

いち-かづ 一同 皆同じきこと、總體。

いちじゆく 著 さまやかに知らる、わけて目につく、明かに知られてあり、疑はしきことなし。

いち-かく 一族 同し族、一家、同族。

いち-ぐん 一存 己れ一人の考。

いち-だい 一代 一人のもの其の家に主たる間、一世、轉じて 一生、一生涯のこと。

いち-たい-いづき 一代要記 書名、撰者詳かならず、神武天皇より 花園天皇まで 御歴代の御名をわかけ、一代の大事を始め 上皇、太子、皇后、大臣などの閥歴、官位などを記せるもの。

いち-たい-き 一代記 人の一生の事蹟を、残らず 記せるもの、即ち 傳記なり。

いち-たい-ふ 市大夫 人名 時輪師、加賀國金澤の人、その作は 世にもてはやさる。

いちだんぐわんのいち 一彈丸地 極めて狭き地のこと、鐵砲玉の如き狭き地といふ。

いちだん-と 一段 ひときは、一層。

いち-ち 市路 一、市へ通ふ路、二、町の路、市街、

いち-ちん 一陣 ひとふき、ひとしう。

いち-ちやう 一定 しかと 事の定まれること。

いち-づぐ 意地盡 意地のかぎりを盡すこと。

いち-づに 一途 ひとすぢに、専ら。

いち-でう 一條 一事の始終を通じていふ語、一件、

いち-でう-かねら 一條兼良 人名 關白、桃花老人、三關老人と號す 關白藤原經嗣の二子なり 攝政 太政大臣 關白に歴任す 享徳二年 職を辭して 三宮に准せらる 後 薙髮して 覺惠と號し 世に 一條禪閣と稱す、文明十三年四月薨す、年八十、博學にして 和歌をよくし 著書多し。

いち-でう-ぜんかふ 一條禪閣 人名 一條兼良にれなし 兼良の薙髮したる後の世稱なり。

いち-でう-てんわう 一條天皇 人名 人皇第六十六代の天皇、在位二十五年 寛弘八年六月廿二日崩じ給ふ御年三十二。

いち-かづ 一同 皆同じきこと、總體。

いち-どう 一同 みな同じく。

いち-だんぐわん-ちちう 一酸化窒素 化學記號 N₂O。 亞酸化窒素にれなし。

いち-だち-ち 一日路 一日にて到着しうべき道程、即ち一日程なり。

いち-だち-の-さび 一日齋 一日の間 行ふものいみのこと、一日の精進。

いち-だち-へんじ 一日片時 ひとひ、かたとき、しばしの間。

いち-だん-しごかねんの-しよく 一任四五箇年職 神皇正統記にある句なり、國守の任をいふ、國守の任は初めは六年なりしを 文武帝の時 四年に改め 孝謙帝の時 又六年となり 後には遂に 國の遠近によりて 四年五年の制となれり。

いち-だん-たうせん 一人當千 一人の力よく千人にわたること、一騎當千にれなし。

いち-だん-まへ 一人前 藝術などを すべて 一人一人たる分際 即ち人並に習得したること。

いち-ねん 一念 ひとすぢの思、一心。

いち-ねん-こん 一年根 植物、多く草類に見る所にして 種子萌發して 開花 結實 枯死に至るまで 一年を

越ゆる植物 即ち一年生植物の根をいふ。

いちのあさまろ 伊治哲磨 人名 蝦夷の酋長、光仁天皇の時、朝廷に叛す 依りて 藤原繼純、紀古佐美と共に之を征討して鎮撫せり。

いちのエチルギー 位置のエチルギー 物理 物體が或位置にあるが爲に有するエチルギーなり、變形のエチルギー、重力分離のエチルギー、分子力分離のエチルギー、電氣分離のエチルギー、磁氣分離のエチルギー、化學的分離のエチルギーの數種あり。

いちのかがみ 市鏡 一度 相分るるとも 縁つき ずば亦清ふものなりとの意を示したる語。

いちのかみ 一上 左大臣の異稱。

いちのささき 一后 皇后を申す。

いちのくら 肆 物名 市物に出す物品陳列店なり。

いちのしやうけい 一上卿 首座につくべき公卿。

いちのせき 一關 地名 陸中國西磐井郡にあり、田村氏の舊地なり。

いちのたに 一だいに 一大臣の異稱。

いちのたに 一谷 地名 攝津國武庫郡須磨村にあり 元暦元年 源平二氏の戦ひし地として有名なり。

いちのたに 一ふたば 一谷 地名 書名 並木

宗輔の作りし戯曲。

いちのつかさ 市司 中古 京都の市政を司りし役所、西市司と東市司に分れて市政を行ふ。

いちのて 一手 一、初めにすべき手段、二、最もすぐれたる手段。

いちのどころ 一所 攝政 關白又は太政大臣の異稱。

いちのはさま 一狭間 城の ぞとがこひの垣。

いちのひと 一人 攝政關白の異稱。

いちのべのなはしは 市邊押替 人名 履仲帝の皇子にして顯宗仁賢阿帝の父、安康天皇位を皇子に譲らんとし後事を押替に屬せられしを大泊瀬皇子、喲みて、肩輪王の號に事をよせて誅したり。

いちのみこ 一御子 第一に生れたまへる皇子、即ち一の宮を申す。

いちのみや 一宮 地名 尾張國中島郡にある市街にして 官線と尾西鐵道線の合一する所、尾州北部の商工業の中心點たり。

いちのみや 一すなはさい 一宮 關波齋 人名 今川氏眞に仕ふ 小笠原流射禮の名人なり。

いちのみや ながつね 市宮長常 人名 裝劍師 京都

の人なり、世に神工と稱せらる。

いちのもの 一者 すぐれたる人。

いちのはち 一八 植物 草の名、葉はひあぶぎに似て一尺ばかり 深緑なり 春夏の交 華を出し 花を開く かつばたに似て青色なり。

いちのはつ 鳶尾 植物 鳶尾科植物にして、屋根に植ゑ大風の時 茅葺の吹き散らされざる様にす、陸奥、關東の農家によく かくせられたるあり。

いちのはつわし 鳶尾科植物 植物 内位の雄蕊層缺如し 子房は下生し、柱頭は花柄に似て、葉は

々務狀の位置をなして生ずるところ、其特徴なり。

いちばんのり 一番乗 戰場に於て 第一番に敵陣又は敵城に乗り込むこと。

いちばんやり 一番槍 眞先に 槍にて 敵陣につき入ること。

いちひ 樑 植物 木の名、樑の類にして 葉はしからしに似て 薄く且大なり、實は椎に似たり、堅材にして船の櫓を作る。

いちび 商麻 植物 草の名、春 種を下す 苗の高さ六七尺 葉は桐に似て圓く毛あり、互生す、夏 黄色の五瓣花を開く、皮を剥ぎて繩とす、きりあさともいふ。

いちひめ 市姫 市を守る女の神。

いちぶぎん 一分銀 古の銀貨の一種、一兩の四分の一にして金百正にあたる。

いちまん 一幡 人名 源頼家の子、建仁三年頼家の病革まるや 政子は北條時頼と謀りて 頼家の將軍職を罷め 關東二十八ヶ國の地頭及總守護職を一幡に譲らんとす 頼家之と聞き 一幡の外祖比企能員と共に北條氏を滅さんと謀る、事もれて時政の爲めに攻め殺さる。

いちみ 一味 同し味方。

いちみどろしん 一味同心 我と心を一にして味方をするもの、同類。

いちめがさ 市女笠 古 婦人の用ひし かぶりかき頂の處 突き出でて高く 深く顔を覆ふ、多く之は 漆塗とす。

いちめんしき 一面識 一度會ひたること、一度あひて見覚えのあること。

いちもつ 逸物 衆に秀でて 勝れたるもの、人、馬 大など皆さふ。

いちもつ 一物 ひとつのたくみこと、ひとつの考。

いちもん 一門 一家族、一族。

いちもんじ 一文字 一、一といふ文字、二、一の字

115 m
150 ptt
L60

の如く直なること、三、掛物の名所、書畫の紙の上下に横に付くる 綾 錦 金襴などの引首のこと。

いちもんじーさだのり 一文字定期 人名、福岡の刀銀治の祖、壽永年間の人。

いちもんーふつう 一才不進 一字の意も通せず、一字もよみ得ず、二學不進、不知丁字。

いちやうーらいふく 一陽來復 曆家に 陰曆十一月又は冬至に稱する時、十月を鳥の坤の卦にあてて極陰とし十一月を復の卦にあてて 一陽來りかへるとす。

いちやーかひ 一夜酒 一夜の間に醸したる酒、(甘酒にさか)、さよさらばともいふ。

いちやーつひ 一夜漬 一夜の間に漬けて食ひうべきやうにしたる漬物。

いちゆう 煮中 ころのうちに、ころのうちに思ふこと、煮。

いちゆう 移住 一、移りて住むこと、住居を かふること、二、鳥 中には氣候によりて 其の住所をかふるものあり、之を鳥の移住と稱し、かゝる鳥を 候鳥又は 渡り鳥といふ。

いちよう 銀杏 植物 銀杏科に屬す、花は單性にして雌雄異株なり、日本特有の名木なり、喬木にして年を経る

に従ひ 氣根狀の枝を生ず、俗に之をいちよーの乳といふ材は黄色緻密にして毒物を止るに適し、種子は食用に供す可し。

いちらくーたり 一樂器 藤と細く削りて精巧に種々の器物を組み織りたる細工物といふ、泉州の人 土屋一樂の工夫なり、又絹糸を浮織にせる精巧なる、物の名。

いちらし 一鷹 傷はし、かはいさうなり。

いちーらふ 一腐 年功を積みて 長となりたる人、なほ 鷹の條を見よ。

いちりーいちがい 一利一害 一、一方には利益となり一方には損害となること、二、利益と損害と相半ばすること、三、物事には常に 利と害と相伴ふこと。

いちりう 一流 別に立てたる一つの流儀、特別なる流儀をさす。

いちりうくわーたんろ 一硝化炭素 化學 記號 C。二、年の發見にかり、無の氣體なり。

いちりつ 一律 一、たなじ節、たなじ調子、二、おなじ具合、變化なきこと。

いちりづか 一里塚 諸國街道に一里許に 道の左右に標として築ける塚、上に樹木を植ふ、初め天正年間信長 之を築かしめたることありしが 後 徳川二代將軍に

至りて 東海 東山 北陸の三道に之を築かしめたり。

いちりふーまんばい 一粒萬倍 一粒の種より 殖いて萬倍の粒となるの義、故に多くは稻のことをいふ、轉じて僅かなるもの 殖いて許多となるにいふ。

いちりんーさう 一輪草 植物 莖の高さ一尺ばかり風露草に似たり、春夏の 際、一花を開く 白くして 梅花に似て六なり 雌雄兩莖を有する両性花なり、又之を一名 一花草といふ。

いちりんーさし 一輪挿 一輪又は 二三輪の花をつけたる枝を活けるに適用する小き花瓶のこと。

いちりゆうくわーニツケル 一硝化ニツケル 化學 硝化第一ニツケルに同じ。

いちーるゐ 一類 同じたぐひ、同じ種類、同じ族。

いちーれん 一聯 律詩の一聯句を聯といふ、又は聯句ともいふ。

いちれんーたくせう 一蓮生 死後 同じ蓮花の上に

俱に 生を託すること、佛教に 彌陀の稱號を唱へて信ずる人は 死後 極樂の同じ蓮華に生を得るとなり。

いちろしや 一庵舎 一日程。

いちろこし 植物 ドクワツギのことなり。

いちーあ 紫杉 植物 公孫樹科に屬す、木曾山中に産し 五千尺乃至七千尺の高山に しらべ、こめつか等と共に混交林をなす、高貴の人の使用する筈は 此木にて作るなり。

いちーする 一葦水 一葦は一葉の片舟の義、故に一葉の片舟にても渡りうべき水程の近き所を示す語。

いちーのーつほね 一位局 人名 姓は藤原氏、名は稚子、飛鳥井大納言雅親の女、性 畫を好み 土佐光信の風を學び 巧に人物 扇合等を畫く、永正頃の人なり。

いちーあん 一圓 残らず、悉く。

いつ 稜 鋭き勢、威光。

いつ 何時 何れの時、たしかに知られぬ時、又 例の時、平生のことに用ゆ。

いーづ 伊豆 國名 遠江國の東南より 太平洋に突出せる半島國なり、天武天皇白鳳九年 駿河の 郡をさきて一國とせしもの、戰國時代に北條氏の依りて起りし所、徳

川時代に、葦原に代官所を置き、黒船渡來已來は 下田奉行を置きし所なり。

いづいづ 逸遊 遊びくらすこと。

いづか 一家 一、ひとつの家族、二、其家に限れる趣、一流、一派をいふ。

いづから 一行 ひとつのれ、ひとならば、同行者。

いづかうしゆう 一向宗 佛教 浄土宗の一派、親鸞上人を開祖とす、別稱、浄土宗、門徒宗なり。

いづかく 一角 動物、哺乳類 游泳類に属す、海獣にして、州の北氷海に産す、形、すなめりに似て、背黒くして、斑点あり、腹は白し、上顎より二本の牙を生ず、一は長く、一は短し、長きものは丈餘に達す、質白く、緻密にして、象牙にまさる、薬用として重せらる。

いづかけ 沃懸 一、うかけ又は、いかけちにねなし、二、器物の縁に金屬をさせたること。

いづかげん 一家言 自己の主張したる一派の論説、自己獨斷の言論。

いづかど 一廉 一段に格段にすぐれて、格別に、別段に。

いづかのアルコール 一價のアルコール 化学、メチルアルコール、エチルアルコール等の如く水酸根一つを有するアルコールのこと。

いづかのげんろ 一價元素 化学 其の一原子量をして、水素の一原子量 若くは水素の一原子量と化合する他の元素の量と化合しうべき元素をいふ。

いづかのせつ 五日節 中古 五月五日に 天皇武徳殿に出御しまして、騎射を御覽せられし儀式。

いづかん 一寒 ひとつのすらしきこと、甚しく貧しきことをいふ。

いづかんばり 一開張 紙にて張り抜きたる器物を漆塗にしたる細工物、机、茶入筒などあり、之は京都の人笹屋飛來一開の創作せしより始まる。

いづき 羊婆如 植物 木の名 葉は山茶黄に似たり夏 枝の頭に四瓣の白花を開く、實は桑に似たり。

いづき 齋 一、いつくこと、わがめて仕ふること、二、いつくのみこの略。

いづき 一揆 中世に於て一群の軍兵をいふ、二、後に 土民の徒黨をなし 群をなし 蜂起し 官に抵抗すること、即ち 土寇なり。

いづきうたしやう 一休和尚 人名 高僧且和歌の名人なり、名は宗純、一休は其の字なり、後小松天皇の皇子にして 紫野大徳寺四十世の住持たり、資性頗る磊落にして 狂歌をよく 書畫 巧みなり、逸事奇行 甚だ多し。

し 天明十三年十一月歿す 年八十八。

いづきうち 一騎打 一、打つは乘る義、一騎づ、前後連りて乗り行くこと、二、双方一人宛の騎士が 鋒を交へて勝負を争ふこと。

いづきかせい 一氣呵成 一息に出來上ること、休まずに仕上ぐること。

いづきたうせん 一騎當千 一人の騎士の勇にて 千人の敵にも當ること、一人當千。

いづきにどびたちて ちもつて てんがのたまを ねざらふ 一饋十起 以勞天下 民 夏の禹王が 一飯に十度もたちて 天下の旱を慰勞せしをいふ、吐哺握髮(とはあくはつ)とれなし。

いづきぬ 五衣 一揃の衣の稱、うへのきぬ、したがさね、はんび、ひとへ、ひつべきの總稱。

いづきのつちな ちもつて たいがのながれな ちかぢな ことならず 一費の土を以て大河の流を支ふるに異ならず 回 敵方を以て 大亂を救はんとするに同じ、成しうべからざることを、力及ばざることを。

いづきののみや 齋宮 一、伊勢の大神宮、二、伊勢加茂の齋主の居たまふ所、三、伊勢の神宮に奉仕したまひし齋主のこと。

いづきむすめ 齋女 大切にかしづき育つる處女。

いづきめ 齋女 神に仕ふる女。

いづきよ 逸居 遊びくらすこと。

いづきやう 一興 一つの面白味、一の樂。

いづきやう 一曲 音楽のひときり。

いづきやう 一舉手一踏足 唯僅少なる勢をいふ。

いづきやうやうたい 一舉兩得 ある一つの事をなし、二つの利益を得ること。

いづきわらは 齋童 神に仕ふる童。

いづく 齋 人が大いにし、大事にす。

いづく 嚴 いかめし、おごごかなり、嚴重なり。

いづくし 慈愛 可愛がる、愛する。

いづくしま 嚴島 島の名 安藝國佐伯郡の海上にあり 一々宮島といふ、日本三景の一、島内に式内伊都伎神社を祀り 歴代の崇拝篤し、天文中 毛利元就は 陶全妻晴堅を此地に攻めこぼしたる所なり。

いづくどうらん 一口同音 多数の人が 皆々同聲にものをいひ 書などを讀み 歌などを歌ふこと。

いづくんか 安 何として、どうして。

いっしょう—ます 一升樹 一升の量を容るる樹、方四寸九分、深さ一寸七分一厘、體積六四八二七立方分なり、水樹は深さ一厘を減す。

いっしょ—けんめい 一所懸命 一所賜はりたる知行の地を命にかけて たのみにし、大切に思ふこと。

いっしな—さらは—いっしな—さるべし 伐一枝 可剪一指 攝津須磨寺に若木樹と稱する名木あり、この木に辨慶が筆と稱する制札存殘せり、其文に曰く「此花江南所無也、一枝於折笠之置者、任天永紅葉之例、伐一枝可剪一指、壽永二年二月二日」とあり。

いっす—逸 一、はなる、かけだす、二、かゝる、のがる、三、忘る、たどす。

いっす—もの 一種物 各人に 一種づつの香を持ち集りて興を催すこと。

いっす—る 一水 水ひとたらし、一滴の水。

いっせい—いっすりよ 一成一族 極めて僅かなる土地と人数とをふ意。

いっせい—いちがう 一世一號 歴史、天子一代に年號一つに限ると言ふ制なり、支那にては明の太祖より初まりたり。

いっせい—ちがたう 一世一代 一生涯の中にそれ限りの所作、一生に一度なることをいふ。

いっせい—に 一齊 ひとしく、うち揃ひて、一度になどのこと。

いっせう—せう 一笑 一たび笑ふこと、笑草。

いっせつ—た—しやう 一殺多生 佛教の語、一人を殺して 多数の人を生ずこと。

いっせ—の—げんじ 一世源氏 皇子にて臣下に降り 源氏の姓を賜はりたるもの。

いっせ—の—しんわう 一世親王 當今の皇子、今ははします皇太子。

いっせ—の—みこと 一瀬命 人名 葦不合尊の子にして神武帝の兄、神武天皇と共に東征し、長髓彦の軍を討じ利あらず、流矢に中り薨す。

いっ—せん 一煎 一杯の茶。

いっせん—ざり 一錢切 刑名、所持の錢を 有限り取上ぐることを、又一錢を盗みたるものをも、斬罪に處することにもいふ。

いっせんと—ばらひ 一千度敵 敵の詞を千度唱へて罪を赦ひ淨むること。

いっ—らう 一層 ひとかさね、ひときは。

いっちく—とび 一足飛 物事を 順序的になさずと

びこしてなすこと。

いったう—さんれい 一刀三禮 佛像を彫刻する時に敬意を表する爲めに 一刀を入るる毎に 三度づつ 禮拜すること。

いったう—りう 一刀流 劍術の一派、徳川氏の初年に於て 小野一刀齋に依りて始まる。

いったう—りやうだん 一刀両斷 一刀にて二つに切り割ること、轉じて 斷乎と決心すること。

いっ—たん 一端 ひとはし、かたはし。

いっ—たん 一旦 一時、或る時、いちど。

いったん—し 一彈指 ひとさし指にて 母指を一回彈く間の僅かの時、瞬間、瞬時。

いったんの—し—いっぺう—いん 一單食一瓢飲 清貧に安んずるをいふ。

いっち—一致 ひとつになること、心を同ふすること、同意。

いっちち—何處 又はいづかたにおなじ。

いっちちち—ち 一張一弛 一度は張り 一度は弛むこと、一方に氣力を注げば 一方が弛むこと。

いっちちく—しゆはん 磔手牛 佛像などの身長を計るとききの稱、即ち わやゆびと中指との間の長さに 更

に 其半を其れに加へたる全長をいふ。

いっちゆう—ぶし 一中節 淨瑠璃の一派、延暦の頃京都の人、都一中の創めて歌ひたる節なり。

いっ—ちやく—せん—に 一直線 眞一文字に、まつすぐは、なごのころ。

いっつ—五 昔時の時刻の數へ方、今の午前又は午後の八時にあたる。

いっつ—あこめ 五拍 あこめを五枚重ねたるもの、あこめの條を見よ。

いっつ—ぎぬ 五衣 五枚の襦を重ねたるやうに仕立てたる昔の婦人の服なり、其の重ね方によりて さくらがさね、うめがさねなどの名稱あり。

いっつし 五車 五車に積むはたに藏書の多きをいふ、莊子天下篇の文字より出づ。

いっつ—の—もじ 五文字 支那にて婦人の備ふべき五つの徳、即ち貞、清、美、謙、胎の稱、轉じて 之はをんなの異名となる。

いっつ—の—むし 五教 仁義禮智信の五つをいふ、

いっ—て 一手 われ一人の手、ひとて。

いっ—てい 一定 一つに—まりたること、一機。

いっせいじ 一丁字 一文字、一箇字、文字を知らざることを「目無一丁字」といふ。

いっせう 一朝 期せざる時、一旦。

いっせういっせき 一朝一夕 僅か一日、暫時。

いっせつ 一轍 同しむと、同じ道、同じすち。

いっせつもの 一轍者 ひとすちに思ひ込みて動かぬ人、頑固なる。

いっせつふね 五手船 五人にて漕船なり、一説に伊豆國より造り出す船の稱にて、伊豆出なりともいふ。

いっせつてん 一天 空ことごとく、空一面。

いっせつてん 一點 一、ひとつの點、いささかなること

二、漏刻の刻みの印にて、一時を、五つに分ちたる始めの點 例へば辰の一點といふが如し。

いっせつてんこう 一點紅 一、もと 妓女の異稱なりしが後、尤物の義に用ゐる、或は、すべての物より秀でたる、又すべてと異なりて、目にたつものをいふ。

いっせつてんしがい 一天四海 一、あめの下、世界、宇内。

いっせつてんばんじょう 一天萬乘 一、天下をしるしめす天皇のこと。

いっせつてんばり 一點張 一、ある事を思ひ込みて、ただその事のみを氣を入れ、他を顧みざることを。

いっせつどう 一統 一、つにすぶること、一つにまとむること。

いっせつどう 一統 一同、皆々、一般に、悉く。

いっせつてんいっせつ 一得一失 一、一方に利あれば一方に害あり、一利一害にたなし。

いっせつてんま 一斗樽 一、斗の量を容れ得らるる樽、方一尺五分、深さ五寸九分一厘、體積六五・一五七七立方分なり。

いづのしちたう 伊豆七島 一、伊豆の東南海中に散在する島の稱にして、大島、利島、新島、式根島、神津島、三宅島、御倉島をいふ。

いづのば 一派 一、流儀、或は宗教等より分岐したる一つの流派をいふ。

いづのはい 一杯 一、物の十分に器に満ちたること、二、物事の全體に亘ること。

いづのはいさぎ 一杯意 一、動物、鳥の名、鷺の一種にして、形、極めて小さきもの。

いづのうのあらうひ 鷓鴣争 一、戰國策より出でたる語、二人相争ふとき、他の人、之に乗じて奇利を博すること、をいふ、漁夫之利といふも亦たなし。

いづのばん 一般 一、一同、總體、二、普通、なみ、

いづのばん 一斑 一、全部中の一部、たはよそ、一端。

いづのばんのたん 一飯恩 一、一度の食物を恵まれたるほどの僅かの恩、此の如き些少の恩と雖も忘れずとの文を書く時に用ゆ、之れは漢の韓信が、漂母に一飯を恵まれたる故事より出づ。

いづのぼりごい 偽言 一、偽りの言葉、そらごと、虚言。

いづのび 溢美 一、過賞、はめすぎるをいふ。

いづのびん 一品 一、一つの品、二、殊に勝れたる品、絶品。

いづのぶらうりう 一風流 一、風流りたる流儀、尋常の他人と異りたる氣象、氣質をいふ。

いづのぶく 一腹 一、同じ母より生れたること。

いづのぶくーいっせつ 一腹一生 一、同じ母より生れたる兄弟姉妹のことをいふ。

いっせつす 鑄造 一、金屬の器を熔して、地金とする。

いっせつてん 嚴鏡 一、神を祭る時に用ゐる陶器。

いっせつてんのあふき 五重扇 一、はしを五つ重ねたる扇、貴婦人の用ゐるもの。

いっせんしやうじん 一蓮上人 一、人名、高僧、伊豫の人にして、天台の奥義を極め、後、念佛宗に歸し、別に融

通念佛と稱する一派を開きし人なり、正應二年八月寂す、年五十一。

いづのほん 一品 一、諸親王の位階の第一なり。

いづのほんごしよーけん 一本御書所 一、内裏の東、建春門内の侍從所の南にて、書所と並びてあり。

いづのほんだち 一本立 一、他人の力をからず、己れ一人にて、事をなすこと、即ち、獨立なり。

いづのまつりごと 嚴政 一、嚴格なる政治、又は、善き政治のこと。

いづみ 泉 一、地文、地下水が地中を流動する際に、偶々、裂罅に會するとき、其の處より地表に湧出するものをいふ。

いづみ 和泉 一、國名、古代、茅渚と稱せし地にして、後、河内に屬し、天平寶字元年、河内の和泉大島日根の三郡と割きて、和泉國を置きしより有り、今は二郡一市に分つ、文治の初、源行家の殺されし所也。

いづみがは 泉川 一、川の名、山城國木津川の別稱、又伊勢國鈴鹿川の別稱にも用ゆ。

いづみちかひら 泉親衛 一、人名、源清仲の弟、建保中頼家の子千壽丸を奉じ、北條氏を亡ぼさんと謀り、事露る時、之を討ず、親衛奮戦却て之を破り、逃れて行く所を知らず。

いづみ ちゆうあい 泉仲愛 人名 其吏、熊澤番山に
 學び、後、池田光政に仕ふ。
いづみ さぶらう 和泉三郎 人名 藤原秀衡の子、忠
 衡のことなり。父の遺命を守り、源義經を輔け、其兄弟と
 戦ひて死す。
いづみ しきぶ 和泉式部 人名 歌媛、越前守大江雅
 致の女、和泉守橘道真の妻たり、和歌をよくせり。道真の
 死後、上東門院に事へ、藤原保昌に再嫁す。
いづみ しきぶ ものがたり 和泉式部物語 書名、和泉
 式部の書きたる日記。
いづみ どの 泉殿 泉の上に差し出して作りたる殿
 之を亦、淵殿ともいふ。
いづみ も 出雲 國名、山陰道の中央に位し、天孫降臨
 の以前、大己貴命、少産名神等の經營せられし所なり、出雲
 大社、葦川等の史蹟多し。
いづみ かな 出雲假名 名、ひらかなにれなし。
いづみ ざき 出雲崎 崎の名、紀伊國牟婁郡見岬の
 東南にあり。
いづみ たいしや 出雲大社 出雲國葦川郡杵築村にあ
 り、大國主神を祀る。
いづみ の たぐに 出雲のたぐ 人名、京都の女優に
 して、出雲大神宮の巫女なりき、歌舞伎のたぐと言ふ、室
 町家の臣名古屋山三と通じ、俳優となる、女體の元祖にして
 文祿中秀吉の觀劇に會し、其技を賞せられ、珊瑚の珠數を
 賜はる。
いづものくに の みやづこ 出雲國造 天穗日命の後
 にて、代々出雲大社に仕へて、祭祀を掌れり。
いづ や 乙夜 夜の二更、即ち午後十時なり。
いづ や の らん 乙夜覽 天子の讀書し給ふをいふ。
いづ ーらく 逸業 遊びたのしむこと。
イツルヒテ Ithide 人名、メキシコの將軍にして、
 西紀一八二一年兵を起し、イヌマニアの領土よりメキシコ
 を脱せしめ、遂に王となりしも、後止むを得ざる事故あり
 て位を去り、後射殺に遇ふ。
いづ れ 何 不定の事物に用ゐる代名詞。
いづ ーわ 逸話 書名、大宰舞台、新井白石の談話をし
 るせるもの、一名、可觀小説。
いづ な もつて らうな まつ 以逸待勞 勞は疲るる
 こと、逸は安んずること、大に元氣を貯へて、勞れたる者
 に對するをいふ。
い ーて 射手 弓を射る人、弓手。
い ーて 一、他を誘ひ立つるとき、又は思ひつきたるとき

に發する聲、二、いやもう。
い ーあふ 出合 人と相遭ふ、人に行き合ふ。
い ーてい 異體 尋常に異りたる風體、異風。
い ーてい 異 されされ、いざいざ。
い ーてう 異朝 一、異國の朝廷、二、異國、外國。
い ーてう 異狀 常より異りたる狀態、氣分又は身體の
 平日より變りたること。
い ーがて 出難 出でがたく、いでにくく。
い ーてき 爽秋 秋のいづす、いみじ。
い ーてしほ 出汐 月の出でんとする時の差潮、せしほ
 みちしほにをなし。
い ーてろよ 出立 出立、いさ、いさ、いさ、なにて。
い ーてたち 出立方 出立すること、二、よそはひ、
 みなり、支度、扮装。
い ーてたち がた 出立方 出立つ時、發足するとき。
い ーて たつ 出立 一、發足する、二、立身する、三、
 身支度する。
い ーてつ 鑄鐵 化學 炭素、磷、硫黃、砒素等を含有
 する不純の鐵にして、脆く、鍛接する能はず、然れども
 熔融し易きを以て、諸種の鑄物を製するに用ゆ。
い ーてん 遺傳 物、親或は祖先の性質及形體が子
 孫に傳はるをいふ。
い ーて の ろう 射手奏 古 五月五日の節會に、左右
 近衛の馬場にて、騎射を行ひしとき、其の人々の名を、天
 皇に奏すること。
い ーて ばい 出榮 出し出でて榮のあること、出来ばい
 結果。
い ーて まし 出座 一、いませすこと、二、行幸。
い ーてん 位田 歴史 親王以下五位以上に賜りたる封祿
 にして、大寶中の制なり、其賜ひたる田地より規定の租を
 官に納めたり。
い ーてん 移轉 移り轉すること、住所、宿所を變ずる
 こと。
い ーてゆ 出湯 温泉におなじ。
イテリウム Yttrium 化學 記號 Y。原子量は
 一七三・〇〇、土金屬に屬す、極めて稀なる金屬なり。
い ーてら の みなご 伊寺水門 地名、陸前國石巻港の
 邊なり。
い ーてゐ 出居 内より出でて客に應對する室、即ち
 客殿、寢殿のこと、之に伺候することを、いでの侍など
 とす。
いと 絲 一、繭、綿、麻等にて細くより作りたるも

の、二、すべて 絲のかく細長きものの稱、線、三、琴、三味線などの弦のこと。

いと 最 團 至りて、甚だ、最も、極めて。

いと 緯度 天文、地球表面上に地軸に直交する大圓を描き之を赤道と稱し、緯度を測る座標とし、之と並行する圓線と書きたるものを緯線と稱す。

いと いたし 甚 團 最も甚だし、甚だきつし。

いと 入り 絲入 團 絹絲を入れて、織りたる綿布。

いと とう 等 團 特別に他人と異なる所ありて、人にすぐれたるをいふ。

いと とう 異同 團 異ると、同じこと。

いと とう ち 伊東氏 團 姓名 祖は藤原氏にして、永曆中伊豆の豪族河津祐親、其居所伊東に因みて、伊東氏を稱したる。

いと とう きんり 伊藤錦里 團 人名 越前侯の儒官、平安の人にして、資行謙謙、最も經史に通ず、安永元年三月歿す、年六十三。

いと とう くわかう 伊藤華岡 團 人名 書家、伊勢の人に於て、細井廣澤、關鳳岡の門に遊び、後、超文敏の筆意に達し、遂に一家をなす、安永五年十一月歿す、年六十八。

いと とう こさくもん 伊藤小左衛門 團 人名 工業家、伊勢國三平郡山村の人、茶と製糸との工業に従事し、三重縣に、洋式の製絲場を設けたるは氏を以て嚆矢とす、屢々官廳より、賞典に預れり、明治十二年五月二十一日歿す、年六十二。

いと とう じんさい 伊藤仁齋 團 人名 一世の鴻儒、平安の人、名は維禎、仁齋は其號なり、古義堂、堂陰等の號あり、學問該博、實に我邦古學の祖たり、且、篤行を以て稱せらる、寛永二年三月十二日歿す、年七十九、古學先生と號す。

いと とう じやくちゆう 伊藤若仲 團 人名 畫家、寛政十二年九月歿す、年八十五。

いと とう たんあん 伊藤坦庵 團 人名 越前侯の儒官、京都の人なり、寶永五年八月歿す、年八十六。

いと とう ちくり 伊藤竹里 團 人名 久留米侯の儒官、仁齋の第四子、曆六年九月歿す、年六十五。

いと とう ちやうい 伊藤長英 團 人名 福山藩の儒官、詩文をよくす、延喜二年十月歿す、年六十三。

いと とう ちやうかう 伊藤長衡 團 人名 高槻藩の儒官、仁齋の第三子、經史に通じ、又書畫をよくせり、安永元年十月歿す、年八十八。

いと とう とうがい 伊藤東涯 團 人名、有名なる碩儒者、

仁齋の長子なり、經義に通じ、文をよくし、性温良恭謙、仁齋の家學を發揚す、元文元年歿す、年六十七。

いと とう ひろぶみ 伊藤博文 團 人名 政治家、長州の人にして、明治政府の初め、工部大輔たり、岩倉具視の特別全權公使として、歐米各國を巡歴するや之に従ひ、明治十五年三月、憲法及び議會制度調査の爲に歐洲に往し、制度取調局長となり、新内閣成立するや、總理大臣となり、二十一年、樞密院議長となり、二十三年七月、貴族院議長となり、韓國問題に付き、天津に至りて天津條約を結び、日清役には馬關條約を締結する等、功績甚だ多く、今上天皇の信任極めて厚し。

いと とう らんぐう 伊藤蘭晴 團 人名 紀伊侯の儒官、仁齋の第五子なり、家學をつぎ、聖賢の道を發揚す、安永七年三月歿す、年八十六。

いと とう り 絲瓜 團 植物 へちまに似たもの。

いと とう ひめ 絲織姫 團 名なばたひめに似たもの。

いと とう かけがひ 絲掛貝 團 動物、貝の名、螺の類、形になに似て小さく、殻のすぢ、太くして白絲をかけたが如し、いとがひ、又はねだまきかひともいふ。

いと とう さきやう 糸桔梗 團 植物 草の名、原野に生ず、葉はなでしこに似て、薄く、四時、桔梗に似たる紺色の花

を開く、ひめぢきやう。

いと とう ば 糸切齒 團 人の牙。

いと とう べん 懿徳 團 懿は醇美なり、美徳といふに似たもの。

いと とう ち 緒 團 一、絲のはし、二、事の始まり、即ち端緒のこと。

いと とう ぐつ 絲履 團 生糸にて編みたる草履。

いと とう てんわう 懿徳天皇 團 人名 人皇第四代の天皇、在位三十四年、即位の三十四年九月崩す、御壽七十七。

いと とう べん 糸座 團 三味線の名所、棹の上部、絲巻を置く所をいふ。

いと とう べん 糸籠 團 琴などを弾き比べて、其技を競ひ争ふこと。

いと とう なご 幼 團 いとけなしに似たもの。

いと とう なし 幼 團 未だ成人とならず、れさなきなり。

いと とう のん 糸毛車 團 古 院 中宮、内親王攝政、關白などの用ひられし牛車、車蓋に紅白の糸を簀の如く垂らし飾れるもの。

いと とう ちゆう 從兄弟、從姉妹 團 父母の甥又は姪なり、即ち父母の兄弟姉妹の子なり。

いと とう たほなち 團 祖父母の從兄弟。

いと とう たほなば 團 祖父母の從姉妹。

ウツク 委奴國 地名 筑前國怡土郡にして 古伊觀縣と言ひたり、同國那賀郡遊賀島に於て天明四年漢の委奴國王の蛇紐金を掘出したるより、漢の稱呼せる所なりしと言ふ。

ウツク 苦 植物 苦の名、陰地の樹根に生ずる、葉は深緑にして長さ二三尺、莖は細くして絲の如し、纏草なり。

ウツク 糸先 伊勢太神宮に奉る新しき絲。

ウツク 愛子 かはゆき子、大切なる子。

ウツク 怡土城 地名 筑前糸島郡怡土村大字大門より、南方高祖山の頂に亘りてある城趾なり、昔言備真備の修めて、唐朝の亂に備へたる所なり、後黒田政冬此城に封せられて、高祖城と言ふ、徳川時代に廢城となる。

ウツク 系杉 植物、杉の一種、幹直上し、枝柔かく、葉細かにして、下垂すること絲の如し。

ウツク 系菅 植物、草の名、山崖又は陰地に生ずる、葉極めて細く、深緑なり、夏、莖を出し黒き小花を開く、實を結ぶ。

ウツク 糸海 植物、すすきの一種、莖葉根共に細かし、夏の中に花を開く、一名、こすすき。

ウツク 糸底 一、陶器の底のいさきり、二、轉して

て 陶器の底にある座のこと。

いとだけ 絲竹 一、樂器の總稱、絲は琴、三味線などの類にして、竹は笛の類なり、二、轉じて、音樂。

いとだけ 一、こゑ 絲竹の聲 一、琴、笛などの音、二、人の臨終の際、浄土より御來迎の諸菩薩の吹き玉ふ音樂のこと。

いとだけ 絲立 絲を入れてわく流紙の袋。

いとだけ 絲徑 麻糸を纏とし、藁、緯として、織れる布のこと。

いとづつみ 絲包 細き麻糸をまきつめ、漆をぬりたる弓。

いとづつみ 最良 一、よいよきだし。

いとづつみ 管 一、いとなむこと、二、用意、仕度、準備のこと。

いとほし 厭 厭ふべし、嫌ふべし。

いとほし 最早 甚だ早くも。

いとひたし 絲緋織 緋色の糸にて織したる織。

いとひたし 絲檜葉 植物、木の名、このてがしに似て葉は柔かく、下に垂りたるもの。

いとびん 糸袋 徳川時代に行はれし髪結び方の名

にして 頂の髪を剃り、両方の髪をせまく、殘して結びたるもの。

ウツク 厭 一、惡み嫌ふ、イヤがる、思ひ、二、したはる、かばふ。

ウツク 一、あわれなり、不便なり、二、いとし、かはゆし、可憐。

ウツク 暇 一、事なきこと、ひま、二、主人より時を定めて賜はる暇、賜暇、三、裏中に暇を賜はりて引き籠り居ること、四、仕を辭して去ること、致仕、五、罷り去ること、別れを告ぐること。

ウツク 糸柱 木のまさまの絲の如く細きもの。

ウツク 挑 挑み争ふ状なり。

ウツク 眼文 病中などに、出仕の暇を賜はらんことを願ふ文書。

ウツク 挑合 相互に争ふ、たたかふ。

ウツク 挑事 相争ふこと、勝負事、いとみわざのこと。

ウツク 一、ごみ 猗頓之富 猗頓は、古の富豪なり、之れよりして、富豪者をさして、猗頓の富といふ。

ウツク 鑄留 金屬製の器物などのこれ、又はこれわらかかりたることを、しかけて、保たしむやうにする

ウツク やなぎ 絲柳 植物、しだれやなぎにたなひ。

ウツク 一、だひ 絲淺鰯 動物、魚の名、形、あまだひに似て、色は赤、黄と青との數條、頭より尾に至る、尾の上には、一本の黄線を引く、長さ身長に等し、泳ぐときは、金糸を捲るが如し、略して、いとより、いとを、いとくりやを等とす。

イトリウム Yttrium. 化學、記號 Y. 原子量は八九〇、土金屬に屬す、極めて稀なる金屬原素なり。

いとる 射取 一、射殺して獲物を作る、二、的に射あてて、暗物を取る。

いな 鱈 動物、魚の名、ばらの小きもの、なよし、くちめ。

いな 否 打消しの詞、いや、しからず。

いな 以内 これよりうち、そのうち。

いな 一、たほせ どり 稻垣鳥 動物、鳥の名、鶴鶴なりといひ、ときなりといひ、或は雀、山鳥、雁、水鶴などとして、諸説紛々、未だ一定せず。

いながき 一、せいさい 稻垣清斎 人名、有名なる醫師、三河國の人なり。

いながき 一、ちやうしやう 稻垣長章 人名、越前國大野

藩の老職、武藝、學術、律曆の諸技に通ず、安永年間、江戸に於て歿す。年八十三。

いながき-どうあん 稻垣棟庵 人名 歌人、伊勢國松阪の人、本居宣長の門に學びたり、寛政十二年四月歿す、年七十一。

いな-かけ 稻懸 稲 いねかけにたなじ。

いな-ぎ 稻置 一、古は邑長の號、二、後には姓の名となる。第八等に位す。

いな-ぎ 稻置 地名、尾張國丹羽郡犬山の舊稱なり。

いな-ぎ 稻木 刈りたる稻をかけてはす具、竹木を立てて作る。

いな-く 啤 馬がわへく。

いな-ご 稻子 動物 昆虫類

直翅類に屬す、體は頭胸腹の

三部より成る、頭部は一對の感觸

肢、一對の複眼、及び二個の單眼

あり、其下方に口あり、胸部は三

關節よりなり、各關節には一對づ

つの歩行肢あり、最後の一對は殊

に大にして之は跳るが爲めなり、

後の二關節には各一對の翅あり、

前翅は狭く、後翅は廣く、

して飛翔

に羽せず、只後翅を保護するに止まる、後翅は専ら飛翔の

用をなす、腹部は明了に關節より成る、肢を有せず、此部

に聽官及氣孔を有す、變態は不完全なり、色は綠色と茶色

との二種をなす、此等の虫は群をなして飛行し、稻田に降

るや、稻葉を食し、遂に綠葉なからしむるの大害をなすこと

あり、之を捕へ炙りて食ふ人あり。

いな-こぎ 稻扱 稲 いねこぎにたなじ。

いな-ご-まろ 稻子磨 動物 昆虫類、直翅類に屬す、

いなごに似たり、しやうりやうば、た。

いな-さ 東南風 東南の間より吹き來る風の稱、即ちた

つみの風をいふ。

いな-しき 稻敷 一、稻をしきたるところ、二、田舎

のことをいふ。

いな-せ 否諾 稲 いやたう。

いなだ 鰻 動物 魚の名、ぶりの少しく小さいもの。

いなだ-ひめ 稻田姫 人名 手名推定名推の女にして

素盞尊に婚し、須賀の宮に住み給ひしなり。

いなづ-ぎくう 稻津祇堂 人名、有名なる俳人、芭蕉

の門人、享保十八年四月歿す。年七十一。

いなづ-の-うら 稻津浦 地名 伯耆國にあり、後醍

醐天皇の隱岐をのがれ出でたまひて、名和長年によらせ

給ひし時、船を着けさせられし地なり。

いな-づま 稻妻 物理、異性の電氣の中和によりて生

ずる、遠方の電光なり。

いな-とみ-い 稻富伊賀 人名 稻富流砲術の祖なり

細川忠興に仕ふ、文殊頃の人。

いな-なく 嘶 馬が、聲高く鳴く。

いなのみ-の-うらべ 稻實卜部 大嘗會の時に遣はさ

る卜部。

いなのみ-の-や 稻實屋 大嘗會の時、神に供ふる稻

を置く所。

いなのも-の 稲 明くといふ語にかけていふ、轉じて直に

天明、あけぼの、しのめにかけていふ。

いなば-いつつ 稻葉一徹 人名 剛力者、美濃の人

にして、初め齊藤家に仕へ、後、信長に仕ふ、天正十六年

十一月歿す。年七十三。

いなば-うさぎ 稻葉辻齋 人名 唐津藩の儒官、江戸

の人、寶曆十年十一月、江戸に歿す。年七十七。

いなば-むしろ 稻掃席 名を扱ふに用ゐる席。

いなば-の-せんじ 因幡前司 人名 大江廣元の異稱。

いなば-じやう 稻葉城 地名 岐阜井口城にして、元

近傍に稻葉山あるを以て稻葉城と呼びたり。

いなば-まさやす 稻葉正休 人名 幕府の若年寄なり

大老堀田正俊の專横を諫め容れられず、攝津の人河を渡は

んとす、正休巡察四萬金を授けしと言ひしも、正俊二萬

金にて密に川村瑞軒をして役を起さしむ、正休怒りて、正

俊を殿中に殺し、自殺す。

いな-びかり 稻光 稲 いなづまにたなじ。

いなふ-こうけん 稻生恒軒 人名 澁侯、侍醫、且儒

者、大阪の人、延寶八年歿す。年七十一。

いなふ-じやくすゐ 稻生若水 人名 有名なる本草學

者、其著書一千有餘卷に及ぶ、江戸の人、京都に歿す、時

に正徳五年七月、年六十一。

いな-ぶね 稻舟 稲を載せて運ぶ船。

いなほし-ざん 稻干竿 稲をかけて乾すに用ゐる竿。

いなみ-ほし 牽牛星 星の名、いねかひほしに同じ。

いなむ 否 一、否といふ、承知せず、二、辭退する、

ことば。

いな-むし 稻虫 動物、一、稻を害する虫の名、種類

多し、蝗、二、いなごまろのこと。

いな-むしろ 稻筵 一、稻の實入りて倒れたるを、席

をしきたるにたとへていふ語。二、稻、種なごにて織りた

る席のこと。

いなむら 稲藪 一、稲を釋ながら積み重ね貯ふるもの、いなづかのこと、二、稲を刈りたるままにて、竿にかけて曝すもの。

いなむらーがーさき 稲村崎 崎の名、相模國鎌倉郡の南隅、七里が瀧と山井ヶ瀧との間にあり、元弘三年、新田義貞が、飯を海中に投じて、波を静めたりといふ故事あるを以て著名なり。

いなむらーさんばく 稲村三伯 人名、因幡侯の藩醫、長崎に至り、シーボルト氏の門に入り、醫學と蘭學とを修む、因幡地方に於ける洋學の鼻祖たり。

いなもーせーも 團 いちども、わうども。

いなもりーさう 稻盛草 植物、草の名、深山に生ず、高さ七八寸、葉ははこべに似て廣く、夏、薄紫又は白き花を開く。

いなや 否 直に、即ち、同時に。

いなりーまうて 稻荷詣 山城國伏見の稻荷神社の祭禮、即ち、二月初午の日に參詣すること。

いなわーしろ 猪苗代 地名、岩代國耶麻郡の一都市、同名の湖水に臨み、遙かに會津と相對す、明治元年、白河口の官軍は此地より進みて、會津を圍みたり。

イニゴージョーニス Inigo Jones 人名、有名なる建築家、ロンドンに生る、其名作は、ホワイトホール、セント、カルデン、ヒサ、及び、セント、ポールの支關及同寺院の改築等なり、(西紀一五七三—一六五二年)。

いにしーとし 往年 過ぎにし年、さきの年。

いぬ 犬 動物、哺乳類、食肉類に屬す、性、伶俐にしてよく人に馴る、走ること速に、狩に重用せらる、又夜を守らしむ等、人生に利益僅少ならず、種類亦多し。

いぬ 成 一、支干の名、尙支干の條を見よ、二、方角の名、即ち西北にあたる、三、時の名。

いぬ 寝 臥床につきて眠る。

いぬ 往 一、行く、去る、二、過ぐ、歴。

いぬ あは 大栗 植物、草の名、花は黄色にて、粟粒に似たり。

いぬ いぬ 大往 植物、草の名、一年草にして大小二種あり、大は葉大にして往の如く、小は長小にして、にんじんばくの如し、莖は方形にして、枝葉對生し、葉莖みな毛あり、秋、紫色の小花を開く、長刀の形をなすを以て、なぎなたかうじゆの名あり。

いぬ たふもの 犬追者 騎射の式の名、十形の馬場をつくり、竹垣などをめぐらし、馬に跨り、栗袍、直衣などを着し、ひきめの矢にて犬を追ひかけ、射中てて勝負を決するなり、十二騎を一手とす、二手、三手あり。

いぬ たふものがたり 犬追物語 書名、林春齋の著、正保年間、島津侯、武藏國にて犬追者を興行せし次第を記したるもの。

いぬ かうじゆ 大香薷 植物、草の名、原野に生じ、其形、いぬに似て全體小なり。

いぬ かいひ 犬飼 鷹狩の犬を飼ふもの、狩に用ゐて鳥を追ひたてしむ。

いぬ かひ 犬飼星 犬飼星 犬飼星にたなし。

いぬ かみ 犬上河 地名、近江犬上郡三國山より發し、一の瀬川を合せ、湖水に入る、千申の亂官軍の將數萬の兵を以て此川の邊に陣せり。

いぬ がや 犬樞 植物、草の名、かやの一種、葉大きくして薄く、背白し、實は熟すれば、赤し、食ふ可からず、油を取りて燈油となす、へばがや又めがやともいふ。

いぬ がらし 犬芥 植物、十字科植物の草本なり、春季開花す、花は小形黄色にして、山野到る所に自生す、たがらし、のがらし、あせがらし。

いぬ ぐす 犬楠 植物、樹の名、楠の一種にして、ゆづりはに似たり、夏、葉間に結實す。

いぬ くばう 犬公方 人名、徳川綱吉の異母。

いぬ ころしなし 犬殺梨 植物、樹の名、梨の一種、實は非常に大にして、周圍一尺四五寸餘なり、北國に多く産するなり。

いぬ こま 犬胡麻 植物、草の名、山中に自生し、葉は對生し、長さ三寸許にして、鋸齒あり、夏、小花、群り咲く、色白し、秋に至りて實熟す。

いぬ さくら 犬櫻 植物、樹の名、樹葉共に櫻に似て、三寸餘の穗状をなして、小花群り垂れ咲く、夏の末に結實す、山椒に似て黄色なり、鹽漬にして食らう。

いぬ じに 犬死 いたづらにしぬること、むだじに、徒死、無益の死。

いぬ つくはし 犬筑波集 書名、山崎宗鑑の著、宗紙の筑波集に擬して、俳諧の連歌を集めたるもの。

いぬ つげ 犬黃楊 植物、木の名、冬背科植物にて、山地に自生す、枝密茂し、葉は圓く、之を火に焼けば烈しく音を發す、本邦特有の植物の一なり。

いぬ とくさ 犬木賊 植物、草の名、形、すぎなに似て大きく、枝なし、年を歴れば長大となる、夏、葉を生じ、花を開く。

いぬ なぎのたき 犬鳴瀑 瀑の名、和泉國和泉郡、尾山にあり、高さ三丈、幅三間。

いぬなき—やま 大鳴山 山の名、和泉國日根郡の東南隅にあり 山中に七瀑あるを以て 大鳴山七瀑の稱あり。

いぬの—はき 大萩 植物 草の名、萩の一種 高さ二尺ばかり 葉は萩に似て それよりも厚く 共に毛あり 秋は萩の如き白花を開く。

いぬ—はじかみ 大蓋 植物 草の名、生姜の一種、香甚だ佳なり 根は食ふに堪へず 花は赤く 蕾を擧げにして冬を越ゆれば 琥珀色となり 味 甚だよし。

いぬ—ばしり 大走 城の塙又は 築地などの 塙との間にある狭き空地。

いぬ—はりこ 大張子 小兒誕生の時、傍に置けば 邪を避くといふ、犬の形をなせる紙の張子細工なり 今は小供の玩具となれり。

いぬ—びと 犬八 古 宮城にて犬吠を發せし軍人、いぬばの條を見よ。

いぬ—ぼう—が—さき 犬吠岬 岬の名、下邊國海上郡の東端にありて 宏麗なる燈臺の設けあり。

いぬ—ぼい 犬吠 古 大嘗會の時 軍人が宮門を守りて 外藩の参朝の時 發せし聲。

いぬ—ほほづき 犬吠粟 植物 草の名、一年草、高さ三尺 枝葉共に互生す、葉はほほづきに似て短毛多し、

夏 葉間に五瓣の小白花を開く 實はなんてんの如く 初め青く 熟すれば 紫黒となる。

いぬ—まき 大楨 植物 樹の名、楨の一種、互生葉の植物にして中三分長さ二三寸 先端少しく尖れり 革質にして 表は緑 裏は青白色なり 花被は 實にして 熟すれば紅色となる、材は 土中 水中に用ゐるによく、箱桶等を作るによし、ひとつば又ははばのまきともいふ。

いぬ—もどり 犬戻 喰しき山路のこと。

いぬ—やま 犬山 獵の名、獸を犬に逐はせて 獵することなり。

いぬ—わらび 大蕨 植物 草の名、しだの一種 葉は細く且柔かなれども食す可からず。

いぬ—ゐ 犬居 犬のつくばりたる如く 踏踏することはいふなり。

いぬ—ゐ 戌亥 方角の名、戌と亥との間、西北。

いぬ—稲 植物 被子類 禾本科植物にして 葉は互生二列なり、舌狀片明了なり 莖に中空圓筒にして 結節あり、花は穎花風蝶花にして 花絲長し 果實は穎果なり 水田 陸田共に栽植す、植付後七八日にして穂に出づ 實は即ち米にして 吾人日常欠く可からざる食物なり 其の熟期の差に従ひ 早稲 中稲 晚稲の別あり 米の種類

は甚だ多し 例へば 白玉、都、關原、神上等なり、白玉都は輸出米なり。

いぬ—かうじ 植物 隱花植物、菌類に屬す 稲の穂に寄生して穂を食ひ 甚しき大害を爲すものなり、いぬかうじは生活力ある稲に寄生するを以て 之を活物寄生の一なりとす 之れ死物寄生に對して稱するなり。

いぬ—がて—に 雜篠 團 いぬがたし ぬすりかたし。

いぬ—かり 稻刈 秋 稻の熟したるを刈りとること、即ち 刈入れ、收稻なり。

いぬ—さわがし 葉騒 物の音が 寝耳にひびきて さわがし。

いぬ—つき—うた 稻春歌 大嘗會の時 神前に供する稻を春く時に 唱ふる歌。

いぬ—の—わら 稻藁 植物 水稻陸稻の總稱なり。

いぬ—の—かゝる 井上馨 人名 政治家、長州の人、

明治十三年 外務卿たりしより朝にあるときも 野にあるときも 外交界に活動せり 殊に著名なるは 明治十三年 各國條約改正事件、明治二十年 條約案事件にして共に失敗せり、明治十八年朝鮮と五事を約せり、其後 實業界にも靈力する所あり。

いぬ—ただよし 伊能忠敬 人名、有名なる曆學者且つ測量學者なり、下邊國佐原の人、寛政 文化の間 五畿七道盡く跋涉して測量を行ひ 地圖を作製す、推歩測量の精密 確實なる 實に驚くべし、文化四年四月歿す 年七十七、明治十六年 正四位を贈らる。

いぬ—ひでのり 伊能顯則 人名 國學者、下邊國佐原の人、古代の法制に精通し兼ねて和歌をよくせり、明治十年七月歿す 年七十三。

いぬ—ち—じやう 井口城 地名 美濃岐阜城の昔の名なり、元齋藤氏の居城たりしが、信長之を陥る、改めて岐阜城とし、天正十八年遠信長の居城とせり。

いぬ—しし 野猪 動物、有蹄類に屬す、深山に棲息し豚に類似す、體肥大にして頸短く、鼻端平にして土を掘るに適し、牙は上下ありて 上牙は下牙と共に向上す、牙はいのししにありては唯一の武器なり、夜間山麓に下り來りて 芋を掘り食ひ 未明再び山中に歸るを常とす、肉軟に

いのち 命 ①、玉の緒、壽命、生命、二、たのみ、たして美味なり。

いのちがけ 命掛 ① 命を失ふを顧みずして事をなすこと、死ぬる覺悟にて 危険を冒すこと、懸命。

いのちがへ 命換 ① 生命にかゆる程 貴重なる物、又は非をらふ。

いのちこひ 命乞 ①、命の長からんことを祈ること 二、殺さるべき命を助けられんことを乞ふこと。

いのちしらす 命不知 ① 命の危きことを顧みずして 敢て事を行ふこと、敢死。

いのちのたや 命親 ① 己が死ぬべきを救ひくれし人をいふ。

いのちみやうが 命冥加 ① 死すべかりし命が 意外の仕合にて助かりたること。

いのちなこつまつよりもかろんず 命輕於鴻毛 ① 義に臨みては 身命を抛ちても遂行するをいふ、君國の爲めに命を惜しまずして盡すこと。

いのり 祈 ① いのること 祈禱。

いは 岩 ① 地文、地殻を構成する物質にして 層層をなす 其成因により分ちて 火成岩、水成岩、變成岩の三種

いはいちご 岩莓 ① 植物 草の名、へびいちごに似て 小く、黄色の花を開く、山奥の岩上に生ず。

いははう 異邦 ① 異國にたなし。

いはかがみ 岩鏡 ① 植物 草の名、葉は ゆきのしたに似て 春日 薄紅色の花を開く、其形 花鏡に似たり、ちやせんさうともいふ。

いはかき 岩垣 ① 岩石の自然に 垣の如くなるものをいふ。

いはがきけつしう 巖垣月洲 ① 人名 京都の儒者、經濟實踐を主とす 明治六年九月歿す 年六十六。

いはがきしみづ 岩垣清水 ① 岩垣より湧出する清水。

いはがきぬま 岩垣沼 ① 岩の垣の如く立ち繞れる中に ある沼をいふ。

いはがきぶち 岩垣淵 ① 岩の垣の如く立ち繞れる中に ある淵。

いはがきまつなへ 巖垣松苗 ① 人名 京都の儒者、國史に通ず、嘉永二年十二月歿す 年七十六。

いはかせ 醫博士 ① 古の官職の名、典義寮の博士、醫術を諸生に教授す、相當は從七位下、後には五位。

いはがね 岩根 ① いはねにたなし。

いはきがみ 磐城紙 ① 磐城國磐城郡の地方より産出する紙、種類甚だ多し。

いはきじま 岩城島 ① 島の名、伊豫國の東北方の海中にあり。

いはきのくに 磐城國 ① 國名、東山道十三國の一、福島縣と宮城縣との分轄に屬す、十四郡より成る。

いはきるなみ 岩切波 ① 岩をも切り崩す波。

いはく 醫旧 ① 醫師を敬ひていふ語。

いはくぐり 岩潜 ① 動物 鳥の名、ははるるに似て大きく 頭は灰色にて 脊に黒褐の斑あり、翅は黒くして 其端 赤褐なり、尾も亦同色なり、いはすすめともいふ。

いはくすぶね 岩楠船 ① 神代に用ひし船。

いはくすり 岩薬 ① 植物 草の名、深山の岩石に自生す、木賊に似て ややく、節毎に葉を生し 夏季 白花を開く、形 蘭に似たり。

いはくせき 墨卵石 ① 燧物 輝石の一にして 單斜輝石類の一種なり、塊状又は葉片状にして、灰又は褐綠色なり。

いはくに 岩國 ① 地名 周防國玖阿郡にある市街、吉川氏の舊藩地なり。

いはくにがは 岩國川 ① 川の名、石見國の境界より流出して岩國をすきて二派に分れ 海に注ぐ。

いはくにちちみ 岩國縮 ① 周防國岩國より産出する縮のこと。

いはくにやま 岩國山 ① 山の名、周防國玖阿郡の南部にある山なり。

いはくも 岩雲 ① 夏の雲、形 岩石の峙ちたるが如き故に名づく。

いはくら 岩座 ① 岩石の御座なりとも 又岩の如く堅固なり、意より 高御座の稱呼なりともいふ。

いはくらともよし 岩倉具視 ① 人名 大政治家、名は月丸 人となり奇邁、維新の大業を翼賛して大功あり、明治三年 外務卿より右大臣に遷り 明治十六年七月 大勳位公爵を以て薨す、年五十九、太政大臣を贈らる。

いはけなし 稚 ① 小兒らし、あどけなし、をさなし、

いはげら 岩啄木 ① 動物 鳥の名、きつづきの一種、深山に棲息す、大きめしるの如く、全身深綠色にして 頂と腹とに紅色あり。

いはこがね 岩黄金 ① 岩の中より出づる黄金。

いはさきやたらう 岩崎彌太郎 ① 人名 富豪、土佐國安藝郡井之口村に生る 三菱郵船會社の創立者にして 本邦航海業に功績あり、從五位に叙せられ 一代にて第一流の富豪となる、凡ならずといふべし、明治十八年二月歿す

年五十二。

いはさ—またへゑ 岩佐又兵衛 人名 浮世繪師、世人呼びて 浮世繪又兵衛といふ、土佐派の繪を學び 遂に一家を成す、寛永年中 歿す。

いは—しほ 岩鹽 地名、山鹽ともいふ、獨乙等より産出す、山中を掘りて 鹽塊を取り出し、を粉末として用ゆ 其片は無色又は灰色 褐色を呈し、打てば平かに割るもの多し、其味は剛辛くして 海水より取りたる鹽と異ならず、焼けば無色の焰となりて黄色を帯ぶ。

いは—しみず 岩清 岩間より湧き出づる清水。

いはしみず—はちまんぐう 岩清水八幡宮 宮の名、山城國綾部郡八幡町にあり、有名なる神社にして 官幣大社なり。

いは—せすあけん 伊庭是水軒 人名 有名なる劍客、心形刀流劍術の祖なり。

いは—だけ 岩茸 植物 地衣類にして 深山の岩石に自生する菌なり、形 さくらげの如く 重なりて生ず 色の色 面は褐色にして 裏は黒色なり、毛あり 足は短し 乾して食用に供す。

いは—だたみ 岩疊 疊をしきたるが如き岩のこと。

いは—ちどり 岩千鳥 動物 鳥の名、ちどりの一種、

全身黒くして 胸白し 尾に波ありて燕の如し 川上に群集して飛ぶ。

いは—はつ 衣鉢 佛教の語、師の僧の説きたる説。

いは—つき 岩槻 地名、武藏國南埼玉郡にある市街、大岡氏の舊藩地。

いは—つばめ 岩燕 動物、つばめの一種、日光山中に多く棲息す。

いはつ—な—つたふ 傳衣鉢 佛教の語より出づ 師の道を傳ふこと。

いはて—けん 岩手縣 地理、陸中國全と 陸奥國の二郡と、陸前國氣仙郡とを管轄す、縣廳は陸中國盛岡市に設けあり。

いは—どの 射場殿 大内に設けられし弓射る處。

いは—の—うら 石戸浦 浦の名、因幡國の沿岸にある佳勝なる濱なり。

いは—ご—やま 岩月山 山の名、近江國にある山、月の名所なり。

いは—な 岩魚 動物 魚の名、谷川の岩穴に住む魚、形 鱗に似て小く 白色なり 鱗魚ともいふ。

いは—ね 岩根 一、岩の根、二、岩、巖。

いはね—さくみて 岩根踏つて 岩を踏みわけて、山河

を敗渉するなり。

いはね—の—やま 岩根山 山の名、近江國にあり 松時鳥の名所なり。

いは—の—ひめ 磐之媛 人名 仁德天皇の皇后、葛城襲津彦の女、履仲、反正、允恭の三天皇を生む。

いは—ばしる 岩走 水が岩の上を はげしく流る。

いはひ—うた 祝歌 人の功徳を稱揚して詠める歌、即ち 頌なり。

いはひ—ぐろく 祝具足 武家にて元服の祝に 着用する具足なり。

いはひ—ご 齋兒 かしづき育つる兒。

いはひ—づま 齋妻 鐘愛する妻。

いはひ—どの 齋殿 古 不淨を清め 謹慎して 神を祭らし殿堂。

いはひ—ぬし 齋主 神を祭る人、かぬぬし。

いはひ—て 齋瓮 古 酒を盛りて 神に供へし陶器の壺、いむべのこと。

いはひ—や 祝矢 合戦を初むるとき 双方より 射かはす矢。

いは—ほ 巖 大なる岩石。

いは—ほ—い—ん—ん 巖凝重 岩石の重疊せるをいふ。

いは—ま—くら 岩枕 岩の上などに宿ること。

いは—ま—ほし 言ひたし、言はんことを欲す。

いはんかた—なし 言ふべきすべなし、言語の外なり、不可名状。

いはむ—や 况 まして、其の上に。

いはむ—やん 人名 イバン四世はイバン三世の子にして 西紀一五四五年 十五歳にして位に即く 韃靼人の勢力を挫けり、(西紀一五三〇—一五八四)。

いはも—ご—しやうげん 岩本將監 人名 武將且畫家、信濃の人、徳川忠輝に仕ふ、後 畫に志し甚だ 達す、寛永十九年七月歿す。

いは—や 岩屋 一、巖を穿がちて作れる住家、二、岩間の洞。

いはら—がき 茨垣 刺ある小木を植ひ並べて 垣としたるもの。

いはらき 茨木 地名、攝津三島郡の一部市なり、戦國時代富富氏茨木城に居る、後中川清秀之に封せらる、秀吉の時片桐且元此地に二萬五千石を領せしが、大阪の役起り此城は廢せられたり、今の梅林寺の邊なりと言ふ。

いはらき—けん 茨城縣 縣名、常陸國全部と 下總國の六郡とを管轄す、縣廳は水戸にあり。

いばら—さいかく 井原西鶴 人名 元祿の頃大阪にて戯作に従事せし人なり、五人女、一代男等は氏の作なり。
 いばり 尿 俗ばりの轉化、小便のこと。
 いはれ—ほのめく 言灰 言はるる様子なり、噂せらるる様子なり。
 いは—れんげ 岩蕨華 植物 草の名、古き瓦の上などに生ず つめれんげの一種にして 葉闊くして尖らず、形蓮華の如くにして 粉白色を帯ぶ 夏 黄色の花を開く。
 いは—わたり 岩曲 岩の輪の如く、まはりたる處。
 いは—の 岩井 岩間の泉を井とせるもの。
 いは—の—たき 岩井澤 澤の名 美作國西條郡上齊原村にあり、高さ百八十丈 幅四間餘。
 いひ 飯 一、古は米を蒸したるもの、二、後に 米を炊きたるもの、固粥、めし。
 いひ 棧 遠隔の地より水を引く爲めに 板にて作りたる箱。
 い—ひ 思避 思みてさくること、都合ありてさくることとをいふ。
 いひ—あつかふ 言扱 噂をす。
 いひ—あはす 言合 互に言ひて約す、申し合す。
 いひ—あひ 言合 一、言ひ合ふこと、二、いさかひ、

口論、争論。
 いひ—あへず 言不敬 言ひたはせず。
 いひ—たどす 言賤 卑しめいふ、あしざまにいふ。
 いひ—がかり 言掛 一、いひあひて意地になること、二、無實を懸ひて責むること。
 いひ—かたむ 言固 言葉にて固く約束す。
 いひか—あきとも 飯河秋共 人名 書家、大阪の人 上代風又は 加茂流の書法 中興の祖なり、天正所の人。
 いひ—かはす 言交 一、互に言ふ、語り合ふ、二、言西にて替ふ。
 いひ—がひ 飯匙 飯を器に移し盛るに用ゐるもの、即ちしやもし。
 いひがひ—なし 言甲斐無 一、言ふだけの詮なし、いひて益なし、二、卑怯なり、臆病なり、膽無し。
 いひ—かへす 言返 一、返答す、言葉をかへす、二、再び言ふ、繰り返していふ、三、逆ひていふ、くちさたへをする、四、來たる人を斷りて かへす。
 いひ—かまふ 言構 強くいひたつ、いひ争ふ。
 いひ—がみ 飯嚼 乳母の類 飯粒をかみくだきて 兒の口に含まする人。
 い—がみん Ibigamin. 山の名、ヒョウヤ山系中の一

峯なり。
 いびき 肝 眠れる間に 高く發する鼻息、之れ吸氣が懸垂に觸れて發する音なり。
 いひ—きたり 言來 古より 言ひ傳へたる事柄。
 いひ—ざり 飯桐 植物 樹の名、葉はわかめがしはに似て 稍長圓形なり 端は尖り 春 小白花を開く 實は雨天の如し、熟すれば紅となる、古は 此樹の葉を以て飯を包みしとなり。
 いひ—さる 言切 一、言ひ果つる、いひ終る、二、必ず然りといふ、斷言す。
 いひ—ぐさ 言種 言ふべき種、いふべき事柄、口實、辭柄。
 いひ—くろむ 言黒 誣ひて 賊らしくいふ、だます、ごまかす。
 いひ—け 飯筭 飯を盛る器、わはち。
 いひ—けす 言消 一、我いひて 他の語を斷つ、二、先きのことを變へていふ、いひなはす。
 いひ—こむ 言込 言ひ入る、申し込む。
 いひ—こらす 言察 理を説きて 非をこらす、叱る。
 いひ—したみ 飯糲 古 米を蒸すときに瓶の底をわらふに用ゐし竹籠、今のせいろの類。

いひ—しらす 言不知 何ともいひやうなく。
 いひ—すじ 言過 言ひすこと、過言、失言、分外にいふこと。
 いひ—ろひる 言損 折なくして語らずにすこと、いはんとして いはずに仕舞ふ、いひそこなふ。
 いひ—ろむ 言初 言ひかく、いひ初む。
 いひ—だこ 飯蝸 動物 蝸の類の小さいもの、春の初め腹中に 飯粒の如き白き肉 滿つ。
 いひだ—ただひこ 飯田忠彦 人名 周防國備山の藩士にして 大日本史を續けんと志し 結核勉勵三十八年にして 業を卒ふ 野史之れなり、人となり忠烈、勤王の志篤し、櫻田の變に座して 文久元年五月自殺す 年六十三。
 いひ—たつ 言立 一、とり出でて言ひ述ぶ、二、事を強くいふ、ことだつ、三、上へいふ。
 いひだ—としひら 飯田年平 人名 鳥取藩の國學所の教授となる、明治年間 朝廷に仕へ 從六位に叙せられ 明治十九年歿す 年六十七。
 いひ—たはぶる 言戯 いひなぐさむ、せうだんをいふなり。
 いひ—だゆ 言絶 一、話 たゆ、言葉をかはすことがたゆる、二、交際中絶す。

いぶかし 訝 一、疑はし、怪し、不審なり、二、心

いひがひ 言詮無事 言つても詮なきこと、

いぶき 息吹 一、息を吹くこと、呼吸、二、かせに

いぶき 伊吹風 吹き下ろす風、いは發語也。

いぶき 伊吹酒舎 人名 平田篤胤の異稱、鹿

いぶき 伊吹酒舎 鹿島に養する歸途、天のいぶきを拾ひ得たるにより 其の

いぶき 伊吹酒舎と稱せり。

いぶき 伊吹酒舎 植物 草の名、葉の形

いぶき 伊吹酒舎 胡蘿蔔に似て 毛無く 深緑なり、高さ二三尺の莖を出し

いぶき 伊吹酒舎 枝を分ち 小白花ひらがり開く 芹の如し 根を防風

いぶき 伊吹酒舎 にかへて 薬用とす。

いぶき 伊吹酒舎 植物 「びや、しん」に同じ。

いぶき 伊吹酒舎 風に吹きまどはさるること。

いぶき 伊吹酒舎 山の名、鈴鹿山脈中 近江國坂

いぶき 伊吹酒舎 田郡伊吹村 美濃國理斐郡春日村に亘る大山なり、景行天

いぶき 伊吹酒舎 皇の朝 日本武尊東夷征討の途次、此山中に於て賊を平ぐ

いぶき 伊吹酒舎 戦國時代には 京極氏 太平寺額、上平寺額等を建つ、現

いぶき 伊吹酒舎 今の伊吹寺は靈龜年中の建立たり。

いぶきよむぎ 伊吹艾 植物 草の名、艾の一種、近

いぶきよむぎ 江國伊吹山の麓に多し、高さ十餘に及ぶ 多くもぐさに製

いぶきよむぎ す、一名 ねはよもぎ。

いぶきよむぎ 異腹 父は同じくして 母の異なるもの、は

いぶきよむぎ らがは。

いぶきよむぎ 畏伏 畏れて平伏すること、畏れて降服する

いぶきよむぎ こと。

いぶきよむぎ 燻 一、いぶすこと、二、確黄をいぶし 其煙

いぶきよむぎ にて 金銀器に黒き色をつくること、三、かやうび。

いぶきよむぎ いぶし 邑集 多くの人の相集まりて 村落をなす

いぶきよむぎ こと、即ち部落にたなし。

いぶきよむぎ いぶしやう 畏懼 禮拜して 謹ること。

いぶきよむぎ イブシラチ Yp. Ind. 地名、アメリカ合衆國のミ

いぶきよむぎ シガンガ 一、國立師範學校の附けあり。

いぶきよむぎ イブシラチ Y. palant. 人名 キリシヤの愛國者な

いぶきよむぎ り、ロシアの軍隊に入り 大將となり 以てキリシヤの獨

いぶきよむぎ 立を譲りしも遂に成らず、オーストリアに逃る、(西紀一

いぶきよむぎ 七九二一—八二八)。

いぶきよむぎ いぶせし 幽霊 一、ねぼつかなく、ゆかし、二、心晴

いぶきよむぎ れず、氣が塞ぐ。

いぶきよむぎ イブソス 地名、古戰場 小亞細亞のフイギヤ

いぶつ 異物 常にかはりたるもの、珍奇なるもの。

いぶならく 説道 人の言ふには。

いぶばかりなし 無言許 言ふも盡されず、不可言

いぶばかりなし なり。

いぶん 異聞 かはりたる話、めづらしき風聞。

いぶん 以聞 天上に奏すること、聞の上ぐること、

いぶん 奏聞。

イブンアラブシヤー Ibn Arabshah. 人名 歴史家

イブンアラブシヤー 十五世紀に於けるアラビア人なり。

イブンシナ Ibn Sina. 人名 有名なる醫師、アラ

イブンシナ ビアの人、又 哲學の造詣も深し 其著醫學字典あり、ハ

イブンシナ マタンに死す、(西紀九八〇—一〇三七)。

イブンアウカル Ibn Haukal. 人名 有名なる地理

イブンアウカル 學者にして且つ旅行家なり、大西洋よりインドス川の間に

イブンアウカル 敗涉す、西紀九七六年歿す。

イブンエチル Ibn al-Ethir. 人名 アラビアの教皇。

イブンエチル なる航海者にして 東に支那迄來る、(西紀一三〇四—

イブンエチル 三三七年頃)。

イブンハリカン Ibn Hallikan. 人名 歴史家、詩

人にして 且傳記作者たり「偉人の死」、「地名字典」の著

イブンフォスラン Ibn Fozlan. 人名、アラビアの

イブンフォスラン 教皇。

イブンホルダヘ Ibn Khordadbeh. 人名 ヘルシ

イブンホルダヘ アの地理歴史家(—912)。

いぶもたろか 言愚 言ふまでもなし。

いぶもたろか 言更 殊實 言ふまでもなし。

いぶもたろか イブラヒム Ibrahim. 人名 エジプトの副王なり、イ

いぶもたろか アラヒム、パシヤはムハメッド、アリの子なり、(西紀一

いぶもたろか 七八九—一八四八)。

いぶりのくに 膽振國 國名、北海道十一ヶ國の一

いぶりのくに 全國八郡より成る。

イブール Ypued. 地名 ヘルギー國西フランドル州の

イブール 一市の名、中世彫刻の好模範とすべき建築物尙ほ 存在

イブール せり、殊にイブール大伽藍は名高し。

イブリア Iyrea. 地名 ビエモンテの都會、ドラ、パ

イブリア ルチア河畔にあり。

いへ 家 一、人の住む爲めに作れる建物、二、妻、三

いへ 吾が家、自宅、四、家族、やから、五、先祖より代々相續

いへ し來れる名目 家名、六、家柄の。

いへう 意表 思ひの外、計らざる事、案外。
 いへがまへ 家構 家の造り方、いへづくり、やづく
 りのこと。
 いへがら 家柄 貴き家系、名家、門閥。
 いへさがる 家離 家をはなれる。
 いへじち 家賃 家を賃に入る事。
 いへすぢ 家筋 一家代々相續の系、その家の血統、
 家系のこと。
 いへたかし 家高 家柄貴くわり。
 いへち 家地 籠の下地に張りつくる布半の類をいふ
 多くは麻布、八丈、綴子などの 幅一尺二寸餘なるを用ゆ
 且 鐵錆を受けぬ高めに 藍にて染む。
 いへづかさ 家司 家事を司る人、家令。
 いへづと 家産 我家に持ちかへる土産。
 いへつどり 家鳥 難のこと。
 いへで 家出 一、家を出て再び歸らぬこと、出奔、
 失踪、二、法師となること、出家。
 いへどじ 家刀自 其家の妻の尊稱、いへどし、わ
 なさぢ。
 いへなみ 家並 家の相連なりたること。
 いへぬし 家主 一、家の主人、戸主、二、倉屋の持
 主、又其差一人、大屋のこと。
 いへのかぜ 家風 名家の家風を失はずして相續して
 行くこと、家の風儀。
 いへのかせな一たごす 興家風 家の名譽を揚ぐる
 こと、立身出世することなり。
 いへくろく 家具足 家の道具のこと。
 いへこのこ 家子 一、其家に生れ出たる子、二、
 貴族の子供、公子、三、分家、末流の族、四、その家に仕
 ふもの、使僕、郎番をいふ。
 いへのつたへ 家傳 其家のいひつたへ。
 いへのもん 家紋 代々、その家のしるしとして
 衣服、調度などに付ける定紋、武家の旗じるしより起る。
 いへのなご 家長 家の主人、戸主。
 いへばに 得不言 言はんとすれといへず、いふに
 いはれず。
 いへびと 家人 一、家に仕ふる人、家人、二、貴
 族の家に出入りする人。
 いへひろし 家廣 家族が多し、一門が多し。
 いへん 異變 常にかはりたること、非常のこと。
 いへん 移變 うつりかはること、變動、轉變。
 いへりあーはんたう Iberian Peninsula イベリア半島

は歐州南部の三大半島の一、西班牙と 葡萄牙とを含む。
 いへゐ 家居 家を作りて住ふこと、住居すること。
 いへいづ 出家 僧侶となる、俗家を出して 佛
 道に入る事。
 いへ庵 草木を結びて 作れる假の家、くさのかりや
 ちやう。
 いへ五百 五百、又は數の多きこと。
 いへ 疣 生理、皮膚の一部が 殊に厚化して角質と
 變じたるもの、大さ 豆又は 飯粒ほどのものなり。
 いへ 異母 是らがはりの母、繼母。
 いへう 移封 諸侯の領地を他にうつすこと、即ち
 國替へのことなり。
 いへがへる 疣蛙 動物 蛙の一種、形大にして黒色
 なり、脊に疣多くして一種の臭氣あり、がま、蝦蟇。
 いへざり 五百露 深くこめたる露をいふ。
 いへしろなだ 五百代小田 廣大なる地の稱。
 いへた 水蠟樹 植物 木の名、いはたらふを生ずるも
 の、高さ三四尺より丈餘に至る、對生葉にして楕圓なり
 夏 枝上に二三寸の穂を出し、五瓣の小白花を開く、實は
 黒色にして 鼠 糞に似たり、こめばな。
 いへたのむし 水蠟虫 動物 虫の名、いはたの木
 に生ず、形 芋虫に似て 長きは一寸五分ばかり、肺病に
 功ありといふ。
 いへたひ 疣 動物 魚の名、まながつをの類にし
 て 通常 いはせ、うばせといふ。
 いへたらふ 水蠟 水蠟樹より製する蠟、疣を治する
 効あり、又器物などを滑らかにして つやを出す。
 いへづな 五百綱 幾百筋も つなぎたるが如き長さ
 のなのことなり。
 いへづまかさき 五百真神 葉の しげく 枝の榮
 へたる木。
 いへとせ 五百年 數多の年。
 いへにし 疣螺 動物 いはにしのこと。
 いへのりのゆき 五百箭靱 數多の矢の入りたる所
 の初のこと。
 いへひ 疣結 いはふこと、灸の痕の關れ、いはり、
 灸傷。
 いへふ 疣結 灸したる痕の腫み關るなり。
 いへへなみ 五百重波 數多の波の 重りたること。
 いへへやま 五百重山 數多の山の 重りたること。
 いへん 異本 同し書なれども、傳來などの誤りより
 文字、文句などの差異ある本をいふ。

いぼやき 動物 肺腸動物の一種にして、いごぎんちやく、杯と其生殖作用を同ふす、無性生殖に依りて、虫何

度となく分裂し、遂には多数の虫相集りて、一の結合體を成し、生活するに至る。此種の虫にありては、各虫の周圍並に放射房の隔壁に石灰質の骨格、發達するを通常とす。此骨格は、虫の死後にも尙殘存するものなり。之を石灰珊瑚と稱す、いばやきは、熱帯、亞熱帯の海中に盛に繁殖す、其殻の細片、細粉、推積して遂に海中に島をなすに至る。

いぼよ 五百世 數多の世のこと。
いぼよつ 五百萬 極めて數の多きこと。
いぼり 庵 一、庵ること、庵に居ること、二、庵、三陣屋、軍營。

いぼり 煙 雲霧などの、煙の如く立つもの。
いまーいまし 忌忌 一、密み慎しむべくあり、二、思ふ嫌はし、厭ふべし、憎むべし、三、嫌はしく憎くはらだたし、残念なり。

いまかがみ 今鏡 書名 續世繼の一名、著者不詳、後一條天皇より、高倉天皇の御代に至る迄の事を、記したる歴史書なり。

いまがはーうじ 今川氏 氏の名、足利氏の族、義氏の子長氏、吉良氏となり、その子國氏に至りて、駿河國に居る。之より基氏、國範等を経て義元に至りて亡ぶ。

いまがはーうちざね 今川氏眞 人名、美元の長子、武田信玄に破られて、家康に頼り、厚遇をうけしも、後、食邑を失ひ、京師に入り、僧となり、宗關と號す、七十七にして、江川に寂す、時に慶長十九年。

いまがはーうちちか 今川氏親 人名、義忠の子、父歿して、伊勢長氏による、永正十三年遠州を領有す、氏親豪邁京流を定めんと欲し、遠江尾張を畧し、西方の路を開かんとし、成らず、年五十六にして、大永六年卒す。

いまがはーき 今川記 書名、今川氏代代の事蹟を、伊勢長氏の茶々丸を討ちし始末を記したるもの、一名、富麗記といふ。

いまがはーさたよ 今川貞世 人名、文學者、殊に和歌をよくす、上總國介、新國の次子、足利義詮、義滿に仕ふ難太平記、今川双紙、九州合戦記、道行ぶり等の著書甚だ多し、永應の末年歿す。

いまがはーのりくに 今川範國 人名、足利氏の族、遠江守護となり、延元中尊氏に従ひ官軍を討ち功あり、正平中師直と共に楠正行を四條畷に破りたり、元中元年 九十にして歿す。

いまがはーのりた 今川範忠 人名、範政の子、永享十一年結城成朝を征し、享徳四年足利成氏の反するや、之を鎌倉より逐ふ、嘉吉元年三十三にして歿す。

いまがはーよしもと 今川義元 人名、英雄、今川氏親の第三子、初め、僧となりしが、後、還俗して、兵衛の封を襲ぎ、威を、駿、遠、參の間に振ふ、永祿二年、桶狭間に於て、織田信長の軍に襲撃せられ、遂に陣歿す、年僅に四十二。

いまーき 今來 新に來れること、いままゐり、新參。
いまーざね 今后 今上天皇の皇后。
いまざれ 今切 地名、遠江國濱名湖の海に通ずる口をいふ、明應七年東海溢れ、並井崎、壞れて濱名湖に通ず、一説には、永正七年八月廿七日の津嘯によりて、東海道の驛路を中斷して、今切となれり。

いまし 汝 なんじ、みましにたなし。
いましめ 戒、警 一、しましむること、心づくること、縛ること。

いましめーなは 縛繩 人をしはる繩。

います 座 一、往くの敬語、二、座さしむ、在らずの敬語なり。

いますがーごうまごうなーつす 如在靈誠 回 父母の死せし後と雖も、其存在の時の如く、誠をつくして、事ふることをいふ。

いますがり 座 在ます、ありたまふ、ははす。

いますべらぎ 今上 當今の帝を申す、いまのうへ。

いまーた 未 其時にならずして、まだ。

いまーた 今内裏 天皇の御所を出でて、暫しおはします所、里内裏。

いまーたし 未 三 はまだなり、まだし、まだ其時至らずなは早し、未熟なり。

いまーづ 今津 地名、筑前國志摩郡にありて、博多灣の西に臨む、王朝時代には航明の要津たり、時宗の時即ち文永八年に元使趙長弼、今津に入來して、國書を呈す、此時、今津は戦巷となり、小貳、大友等の兵、大に元兵を破りし所なり。

いまでかはーかねすゑ 今出川兼季 人名、後醍醐天皇に仕へて、右衛門となる。

いまでかはーくばう 今出川公方 人名、足利義親のこ

いまでがは—これぞ 今出川伊季 人名 武臣、右大臣晴季の玄孫、内大臣 右近衛大将に累進す、琵琶をよくす、寛永六年二月歿す 年五十。

いまでがは—はるすゑ へ出川晴季 人名 豊臣秀吉と親しく、常に一議に與かり 從一位右大臣に進む、天和三年二月歿す 年七十九。

いまは—今際 今は限りの意にして 死ぬる時にいふもの、最後、末期、臨終。

いまは—忌 忌むべくあり、不吉なり、嫌はし。

いまは—むかし 今昔 物語などの初めに 用ゐる語、今より見れば昔の事なりといふ意なり。

いまは—はる 今治 地名 伊豫國越智郡にある市、久松氏の舊藩地。

いま—ひと 今人 現今の人、この頃の人。

いま—へ 射前 弓を射る時の姿勢。

いま—まわり 今参 新に來り仕へたる人、新参。

いま—みや 今宮 一、當代の天皇の皇子、二、今生れ給へる皇子。

いま—めかし 今 當世めきたり、當世風なり。

いま—めく 今 當世風となる。今様なり。

いま—ものがたり 今物語 書名、樞太夫信實の作、今昔物語 宇治拾遺などの體にならへる隨筆のもの。

いまも—みてしが 今見 以前に見たりし如くに 今も見たりとの意。

いま—やう 今様 一、今のはやり、當世の流行、二、いまやうたのこと。

いまやう—あはせ 今様合 今様歌の歌合のこと。

いまやう—うた 今様歌 一、七五調にて八句或は十二句の歌、中古以來、越天竺の意にあはせて歌ふ、二、はやうた、流行歌。

いまやう—なごり 今様踊 天正の頃 三河國に流行せし踊なり。

いまり 伊萬里 地名 港名、筑前國西松浦郡有田の隣にある市街、人口五、餘にすぎず、伊萬里鐵道の便あり、其隣地の有田よりは盛に有田焼を産出し、之を伊萬里港に於て荷造りして輸送するを以て 伊萬里焼と稱す。

いまわ—かねひら 今井兼平 人名 仲の四天王の一 中原禰守兼遠の子、根井行親、頼親忠、及兄樋口兼光と共に義仲の四天王たり、壽永二年四月 近江の粟津にて 義仲と共に戦死せり。

いまわ—ろうきう 今井宗久 人名 茶の宗匠、豊臣秀吉に仕ふ。

吉に仕ふ。

いまわ—ろうきん 今井宗薫 人名、茶の宗匠、宗久の子、初め秀吉に仕へ 後 家康に仕ふ。

いまわ—ぶね 今井船 昔時 宮中へ奉りし魚を運ぶ用に供せし船、大阪と伏見との間を往復す。

いま—な 今尾 地名 美濃國安八郡にあり。

いま—な—きよか 今尾清香 人名 國學者、和歌をよくす、下野國足利の人、明治六年四月歿す 年六十九。

い—み 忌 一、忌むこと、二、神事祭禮などに穢を思ふこと、三、物忌、方違など、四、裏の中の時限の稱。

い—み 意味 一、このころ、わけがら、このころも、意義。

い—み—あけ 忌明け 忌の期の終りたること、表明、除服のこと。

い—み—がたき 忌敵 忌み嫌ふ仇、讎敵。

い—み—き 忌寸 姓の名、第四等なり。

い—み—きよむ 齋清 心身の穢れを清め慎む。

い—み—くら 齋蔵 歴史 三蔵の條を見よ。

い—み—ことば 忌詞 忌みて言はぬ言、齋宮に於て言はぬ詞、之に内の七言、外の七言あり、内の七言は なかご(佛)、そめがみ(徳)、あらかき(塔)、かはらぶき(寺)、かみなが(僧)、めかみなが(尼)、かたごな(齋)、外の七

言は なる 死ぬ、やすみ(病)、しはたる(笑)、わせ(血)なす(打つ)、その(穴)、つちくれ(墓)、其他にかうたき(堂)つのはす(優婆塞)、あり。

い—み—ごめん 忌御免 官吏などが 忌服を免されて出仕すること、除服出仕。

い—み—さぶらひ—や 忌侍家 身を淨めたるもの居る家、伊勢太神宮にあり。

い—み—じ 一、忌み慎むべくあり、二、甚し、勝れたり。

い—み—しんちやう 意味深長 意義の奥ゆかしきこと、文章などに付ていふ。

い—み—どの 齋殿 不淨を清めたるやかた、齋み清めたる殿、伊勢太神宮にあり。

い—み—な 諱 一、人の名を死後よりいふ稱、二、轉じて實の名、三、又轉じて 諱。

い—み—へ—ひろなり 齋部廣成 人名 古語拾遺の著者、嵯峨天皇の大同年間の人、神官なり。

い—み—んてき—しよくみんち 移民的植民地 文明國中、人口過多の國より 其風土 氣候、本國と 似し 文明は自國より劣るなる 生活の激變せざる新開の地方に 團體をなして移住するをいふ。

い—み—やう 異名 一、別に一つの名にして即ち別名、

二、おだな、渾々。
いみやうぶんのめいせう 異名分類抄 書名 入江喜の著、天、時節、居所、器材、衣食、魚貝、鳥獸、虫、地、神祇、人倫、草木等の類を分ち、其異名を記したるものなり。
いむ 忌部 一、嫌ひ避く、二、憚る。
いむかふ 射向 敵に向ひて弓を射る。
いむかま 忌鎌 齋に清めたる鎌、太神宮の社内にあ
 る草木を刈るに用ゆ。
いむけのうろて 射向袖 鎧の左の袖、弓を射る時
 敵の方に向くる故にいふ、矢石の間を進むときは、肩より
 外し、眞向にかざして、櫛の代りになして進む。
いむこ 忌子 一、大嘗會の供奉につかへまつる童、
 二、齋院に仕へまつる女。
いむさつき 忌五月 物忌する、陰曆五月、昔時は正
 五、九を物忌する月とせり。
いむし 蟻 動物 蟻形動物中、環虫類に屬す、八寸内
 外の長さを有し、肉色にして、腹摩芋の如き形をなし、體面
 に小皺あり、伸縮自在なり、口は腹面の前部に開き、小に
 して突出し得る喙を具へ、尾端に肛門ありて少しく前方に
 輪狀に二列の鈎を有す、海底の砂泥中に棲息す、漁夫は之

を餌として鯛を釣る。

いむたな 忌部 神座に用する欄。

イムニデン Imuden 港の名、北部オランダの一

港。
いむひのいごはん 忌火御飯 忌火にて炊きたる御飯、
 六月十一月十二月の一日くごに奉るもの、忌火とは
 清めたる火のこと。
いむべ 忌部 祭器を作り、祭事に與かることをなす
 職をいふ。
いむべーやき 因部焼 陶器の名、備前國因部にて作る
 陶器、びせんやき。
いむみぢ 忌御衣 清めたる衣、齋宮又は齋院の着給
 ふもの。
いん 印 一、文字を、木片又は蠟石などに彫刻し、或
 は綱を以て鑄出したるものなり、朱又は墨にて文書圖畫に
 捺して契とす、二、眞言宗にて、呪文を稱ふるとき、両手
 の指を種々に組むこと、之を行ふを、印を結ぶといふ。
いん 因 事の成らしたる基、即ち原因。
いん 因 國號、支那に於て昔時、成湯が夏を亡し、代
 りて王位に即きし時の國號なり、初め祁商といひしが、盤
 庚より以後改稱せり、紂に及んで、凡そ二十八世六百十

四年にして亡ぶ。

いん 尹 彈正台の長官。

いんあく 陰惡 かくしてわらはれぬ惡事。

いんい 因依 互にたのみあふこと。

いんイオン 陰イオン Anion 化學、酸類又は金
 屬鹽類と電氣分解するに際し、解離したる部分の中、アノ
 ードに集まるものをいふ、例は NaCl, H₂SO₄, Cl₂
 SO₄ の如し。

いんいつ 淫佚 遊興に耽ること。

いんいつ 隱逸 世を遁ること、遁世のこと。

いんいん 陰陰 物淋しき狀にいふ。

いんいん 殷殷 一、物の盛なる狀にいふ、二、雷
 の鳴る音にいふ、ごろごろと。

いんう 陰雨 曇りて雨ふること。

いんうづ 陰鬱 一、氣の塞ぐこと、二、樹木の蔽ひ
 茂れること。

いんうん 陰雲 四方よりむらむらと集まり來りて
 大空を蔽ひかくす雲、暗き雲。

いんうん 網緇 天地の氣、相合して和するをいふ。

いんい 陰影 物理、陰影は光の直線に進むに依り
 て生ず、圓を以て示せばAを發光體とし、Bを其光を遮る

物體とす、A、B兩體を圍む圓錐形のBの後方の部分にはA
 の何れの部分より發する光も達
 することなし、之を本陰影といふ
 又本陰影の周圍にAの一部分より
 光の達する所あり、此部分を半陰
 影といふ、而してC點が本陰影に
 近ければ陰影の暗さを増し、遠れば
 暗さを減す。

いんい 胤裔 血統を引けるもの、子孫。

いんいん 因縁 佛教の語、ゆかり、いんねん、由來
 由緒。

いんいん 夤緣 連續せること、他につきまつはるこ
 とをいふ。

いんか 印可 佛教の語、師の僧が、其弟子の悟道を
 みとめて、許して與ふること、傳悟。

いんか 允可 ゆるし、許可、允許。

いんか 引火點 化學、瓦斯體及液體の燃焼の始
 るに要する溫度をいふ、總ての物體各其引火點なるものわ
 りて、此溫度に達せざれば燃焼せず、又燃焼せるものも、

此温度以下に降れば燃焼止む、引火點なる語は氣體、液體の場合に用ゐる、固體の引火點としては發火點なる語を用ふること多きも、固より精密にかく一定せるものに非ず。

いんかん 殷鑑 國支那殷の紂王は無道にして、國亡びたれば、後世、國王となるものは宜しく殷を鑑みよといふ意より起りし語なり、前人の鑑、失敗の實證、見せしめなるといふ義なり。

いんかん 印鑑 印形の見本、之を鑑として、其印形を照し合せ、眞偽を判別するに用ゐる。

インキ 墨汁 ① マンニン酸と第一鐵鹽とに依りて製せる汁なり、紙上に文字を著くに用ゐる。

いんき 陰氣 ① 物靜かにひっそりとしたること、二、氣分の開けぬこと、いふせきこと、幽鬱。

いんきう 飲泣 すすりなきすること、聲を立てずに泣くこと。

いんざん 懲勉 ① 丁寧、鄭重、二、ねんごろにし、たしむところ、よしみ。

いんさよ 隱居 世務をさけて閑散の身となること、遁世すること。

いんきようてんわう 九華天皇 人皇第十九代の天皇、在位四十二年、即位の四十六年正月崩す、壽八十一。

いんきよく 陰極 物理 電池の極中、電流の流れ入る方なり。

いんきよくはうさんせん 陰極放射線 物理 放射性線のことなり。

いんきよくはうしやせん 陰極放射線 物理 放射性線のことなり。

いんくんし 隱君子 植物、菊の異名。

イングランド England 大ブリテンの南部をいふ、英國中最も重要な部分なり、全土、運輸交通の便頗るよく、河川、運河、鐵道、縱横に交叉して、銅、石炭の産額、甚だ多大なるを以て、工業從て隆盛を極む、氣候は溫和なり。

いんぐわ 因果 ① 因と果と、原因と結果と、二、佛敎の語、善行あれば、善報あり、惡行あれば、惡報あること、因果應報、三、不仕合、不幸。

いんぐわい 陰晦 曇りて暗きこと。

いんぐわい 隱晦 曇りて暗きこと。

いんぐわいこくし 員外國司 定員外の國司なり、眞に國司としたるにあらず、聖武帝の頃、國庫の欠乏を補ふ爲め、金銀穀物等を献上したる者に、國司の待遇を與へたり、之を員外の國司といふ。

いんぐわいのかん 員外官 歴史、大寶令の施行後、事務繁多にして、定員にては辨じ難くして置きたる官。

いんぐわん 隱官 愚人、世話にならし人。

いんけい 陰莖 生理 動物の雄の生殖器を云ふ。

インゲルハイム Ingelheim 地名 獨乙の市名、カロロ大帝はニール、インゲルハイムより出てたり、同大帝の建てし宮殿の跡存せり。

いんけん 引見 引きよせて見ること、引き入れて對面すること。

いんけん 陰險 わるがしきこと、狡猾なること。

いんけん 隱見 隠れたり現はれたりすること、みわがくれ。

いんけん 隱元 人名 高僧、承應元年將軍家綱公の足利氏の故事により一禪寺を建て、高僧を支那に求めし時、三年七月、我に歸化したる僧なり、山守治の黃蘗山萬福寺を建てて之に居らしむ、歸依したる諸侯甚だ多し、延寶元年四月寂す、年八十、勅して大光尊照國師と號す。

いんげんささげ 隱元紅 植物 苳科に屬す、明の僧隱元が始めて我朝に齋らし來れりといふ、苗、葉共に藤豆の如く、葉間に、白、紅、紫等の花を開く、果實の莢は、扁長にして四五寸あり、未熟なるは、莢と共に煮て食すべし。

インケルマン Inkermann 地名 セバストポルの東方に位し、クリムに近き一小村なり。

いんご 鷓鴣 動物 鳥の名、印度地方に産す、おはむの屬にして、形小く、亦稱、人語を學びうるなり、色は種々にして甚だ美麗なり、音呼とも書く。

いんごう 院號 天皇が禪位せられたる後の尊稱、宇多天皇が仁和寺に住し、宇多院と稱せしより始まる。

いんごう 咽喉 ① のどにねなし、二、重要な土地のこと。

いんごう 限嶺 礦物 地文 流星の破片の地上に落下せるものなり、限石、限鐵の二種あり。

いんさい 允裁 允可すること、裁可すること。

いんさつ 印刷 版にて、文字繪畫を摺ること。

いんさつさやく 印刷局 紙幣の製造、活字の鑄造、及び凡ての印刷事業をなす役所、大藏省に屬す。

いんさつようばん 印刷用鉛版 化學、印刷所等に用ゐる鉛板はステロと稱するものにして、鉛百十二分、アンチモン十八分、錫三分の合金なり。

いんさん 陰山 山の名、清國蒙古の南方に聳ゆる山にして、甚だ高く、大青山といふ。

いんし 印紙 一、印形を捺したる文書、証文、證券の類、二、収入印紙、三、郵便切手。

いんし 淫祀 祀るべき理由なくして、妄りにまつることをいふ。

いんし 院司 院政に與る官吏の總稱なり、別當、判官代、主典代、殿上人、藏人、廳官、召次所、仕所、御書所等あり。

いんし 印置 一、印形、印判。

いんしき 陰式要法 書名、藤枝藤藏の撰、婦人の作法、故實を、こまかに記せるもの。

いんしふ 因襲 従來のしきたり、ならはせ、之れまでの習慣。

いんしじようれい 印紙條例 歴史 一七六五年英政府が諸殖民地に發したる條例にして、政府發行の印紙の外貼用すべからずと云ふ租税法なり、アメリカに於ける人民は其不法を唱へ、遂に廢せられたり。

いんしん 音信 ねどづれ、たより、ねんしん。

いんしん 殷賑 一、ぎやか、ゆたか、殷富。

いんしやう 印章 一、いんぎやうにれなし。

いししやう 印象 一、印を白紙に捺す時、其の痕跡を残すと等しく、五官より感じたる結果が、腦中に留まること。

いんじゆ 綬 綬は印を佩ぶるくしひもなり、印綬とは官印なり。

いんじゆん 因循 一、何事も故舊に循ひて行ふこと、二、進みなす心なきこと、意氣張なきこと、決斷に乏しきこと。

いんじよ 隱所 一、人に知られぬ所。

いんしやう 引證 一、書籍、他人の論議などを、引きて證據となすこと。

いんじよく 茵褥 一、しきもの、しとね、夜具。

いんしをいはる 貼印紙 一、其の事を確に保証することを示す語なり。

インスブルク Innsbruck 地名 奥國チロルの一市にして、一六七二年大所在地となれり。

いんせい 院政 一、歴史、白河天皇が讓位の後、尙院にて政を聽けるより起り、安徳天皇に至る迄、九十七年の間、上皇親ら院政を以て、天下に令せしをいふ。

いんせい 陰晴 一、くもるとはるる。

いんせい 隕星 一、流星の地上に落下したるものをいふ。

いんせい 陰性向水性 一、植物、背水性に同じ。

いんせい 陰性向地性 一、植物、背地性に同じ。

いんせい 姻戚 一、結婚したる上に付きての親戚、縁者親戚のこと。

いんせい 隕石 一、隕物、隕石、隕石の一にして、黒粒状の石基よりなり、此中に橄欖石、古銅石及鉄ニッケルの合金を含み、鏡を含むこと少し。

いんせい 引接 一、接待すること、あしらふこと、引見すること。

いんせい 引接 一、佛教の語、彌陀佛の來迎し、引導し給ふこと、轉じて、誘ふこと。

いんせん 院宣 一、歴史、後白河天皇より以來、上皇院中にありて政をきかせ給ふを院政といふ、其命令を院宣とも、院の宣旨ともいふなり。

いんたい 允漚 一、人名、清聖祖の子、噶爾丹を敗り、拉薩を平げ、西藏を平定せり、以て清の威を西域諸國に振はしめたる人なり。

いんたい 隱退 一、世を棄つること、又仕を辭して退くこと、致仕すること。

いんたう 允當 一、正しく當れること、適當なること。

いんたう 引導 一、導くこと、手引すること、二、

いんち 引致 一、引き立つること、拘引すること。

インチ 吋 一、尺度の名、Inch、フットの十二分の一、我國曲尺にて、八分三厘八一に當る。

インチアナ Indiana 一、州名、北米合衆國中、最小なる州にして、ミシガン湖畔にあり、土地肥沃、礦物、石油の産額甚だ多し、一八一六年、合衆國の聯合に加はれり。

インチアナポリス Indianapolis 一、地名、インチアナ國の中央に位する首府、鐵道の一大中心點なり。

インヂウム Indium 一、化學、記號、I、原子量、一一四、重金屬類に屬す。

いんちゆう 一、はつせん 一、飲中八仙 一、支那八人の文人、常に杯をあげて、詩文を友とせし人、即ち、李白、賀知章、季適、王湛、崔完之、蘇晋、張旭、焦遂、之れなり。

いんてい 隱帝劉承祐 一、人名、五代漢二代の帝なり、太子承訓襲し、高祖悲んで崩せしかば、帝極前に於て即位せり、乾祐三年郭威反し、大に猖獗なりしが、帝崩するに及び、漢遂に亡ぶ、年二十、在位二年。

いんてつ 限鐵 一、礦物、地文、隕石の一にして、殆んど純鐵にして、他に多量のニッケル及少量の硫黄、磷を含む。

み、時として炭素を名む。

インデペンデント Independent. ④ 歴史 イギリス革命

時代の議會黨の一派にて獨立黨と言ふ、クロムウェルを戴き、王を廢し共和政治を布かんとする黨派なり、時にカロロ一世議會と衝突す、クロムウェル兵力にて無黨を壓し、王を裁判し、一六四九年王を死刑に處したり。

いんてんき 陰電氣 ④ 物理、フランスチルを以て封蠟又はエボナイトを摩擦する時に生ずる電氣をいふ、之を表はすに(一)號を以てす。

インド India. ④ 地名、アジア南部の最大半島にして

現今英國の管轄に屬す、氣候は不順なり、草木は熱帶的植物にして繁茂す、米、砂糖、煙草、礦物、石炭に富む、人種は維多にして、印度總督の下に司法、行政の部を置きて之を支配し、マドラス、ボンベイ其他の諸州には各知事を置きて之を治めしむ。

いんごう 明頭 ④ 生理、口腔の後方にして食道又は氣管の起始部なり。

いんごん 陰徳 ④ 人知れず 善事をなすこと。

いんごん 陰匿 ④ かくすこと、かくまふこと、秘密にすること。

いんごん やうばう 陰徳陽報 ④ 陰徳を行へば必ず善き

報の現れ来るなり。

インドゲルマニ しゆくく インドゲルマニ種族 ④ カ

カシア人種中の主要なる種族にして、歐米に於ける多數の國民は、大抵之に屬す、文明の程度最も進歩せる種族なり例へば 英 佛 獨 米等の國民の如し。

いんごう 印度藏志 ④ 書名、平田篤胤の著、印度の古き傳説をあつめたるもの。

インドシナ Indo-China. ④ 地名、印度支那は、ベン

ガハ湾と 支那海との間に突出せる一大半島にして、英佛諸國の領地より成る、土人はモンゴル人種なり。

インドス Indus. ④ 河の名、印度の大河にして源を西藏

の高原に發し、全長一八〇〇哩、舟航の便あり。

いんごう 印度象 ④ 動物 象の一種にして、我國に

来るものは皆印度象なり、琥珀質の楕圓形をなすと、耳の甚しく大ならざるを以て、亞弗利加産の象と異れり、尙ほ「ちようびるあ」の條を見よ。

インドやう Indian Ocean. ④ 洋の名 印度洋はア

リカの東より、オーストラリア、シバ、スマトラ等の西に亘る 廣大なる大洋にして、群島 珊瑚礁の數頗る多し喜望峯岬より、タスマニアに至る全長約六〇〇〇哩にして深さ平均一四〇〇〇呎あり。

インドーのしせい 印度の四姓 ④ 印度に於ける人民の

四階級なり、一、波羅門にして僧侶、二、クシャトリヤスにして武人、三、ブライシャにして商人、四、スードラにして奴隸なり。

インドーごへいーのはらん 印度土兵の叛亂 ④ 西紀

一八五七年、英領印度の土兵、英國の制度を怨み、獨立を企てたる亂なり、二年後平定せり。

インダヤ Vindhya. ④ 地名 印度の中央を走れる山脈、

十六世紀の頃 回教徒其南部に起る、モガルのアクバル帝は屢々之を征せり。

インドラギリ Indragiri. ④ 地名 スマトラ島の一土人

の部落地方の名、サルダンの治下にあれども 實權はオランダ政府にあり。

いんにく 印肉 ④ 印をつけて押すに用ゐる肉、朱 黒

青、茶色、等種々あり。

いんーのーくらん 院藏人 ④ 官名 中古院藏の官、白

河法皇始めて院中に置き、藏人の如く、機密の文書及び諸

訴を掌らしむ。

インノケント Innocent. ④ 人名 ローマ法王にして此名

を有するもの甚だ多し 其中有名なるものは三世なり、三世は 耶蘇教國を統一せんとするの理想を抱き居り 十字

軍を起し、オット四世を破門し、英王ジョアンを廢せし人なり 西紀一九八一—二二六六年間 法王の位にあり、(西紀一六一一—二二六)。

いんーのーしつじ 院執事 ④ 堀河天皇の時始めて置かれ

し職にして、院別當を輔佐して、院政を執行するものなり。

いんーのーしやう 院莊 ④ 地名、美作國苦田郡院莊村にあり、兒島高徳が遂に車駕を奉らんせし地なり。

いんーのーしやうてん 院昇殿 ④ 元來は武臣は卑賤にして昇殿を許されず、平忠盛が 白河法皇の殊遇を受けて 院

の執權となるに及び、特に昇殿を許されしより始まる。

いんーのーしつけん 院執權 ④ 白河法皇が、平忠盛をして院政を掌らしめしより始まる。

いんーのーちやう 院廳 ④ 院政を行ふ役所なり。

いんーのーべつごう 院別當 ④ 院政を執行せし長官にして、始めて之に補せられしは院實季父子(嘉保二年)なり

いんーぶ 殷富 ④ 豊かに富み榮ゆること、繁昌することなり。

いんーぶ 印譜 ④ 種々の印影を集めたる書、篆刻などの

手本とす。

いんぶんーいんぶ 允文允武 ④ 文武の二ながら 長じた

るをいふ、允文允武なる皇帝などいふに用ゐる。

いんぶーもん 殷富門 宮城十二門の一、宮城の西にある三門の一。

インフルエンザ 流行性感冒 図 インフルエンザ菌と稱する桿状細菌に原因して發作する流行性の寒冒なり、發熱甚しく傳染す、又肺炎などを續發することあり。

インフルエンザーキン インフルエンザ菌 植物 インフルエンザ病原となる菌にして、一千八百九十二年バイフル及北里博士の兩氏により確定せらる。

いんべーうち 齋部氏 其初め天太玉命の孫、天富命より出で、中臣氏と並び神祇官に列し、朝廷の祭祀を司りし族なり、朝廷より世々宿禰の族稱を賜はりたり。

いんべーひろなり 齋部廣成 人名 神官にして大同二年古語拾遺を著したる人なり、此書は諸姓の來歴を詳にしたるものにして、此書を著したる意は全く中古中臣氏獨り盛んとなりたるを以て、已れも亦大祀に與らんと欲したるにありしなり。

インペラトール 尊號にして羅馬軍隊の指揮官との意なり、ケーザルも此地位にありたることありき。

インペラトールローマノルム 図 インペラトールのことなり。

いんぼう 隱謀 図 密に企る謀、わるだくみ。

いんぬいーもん 陰明門 内裏の内廊十二門の一、内裏の西にある三門の一。

いんぬつ 潭滅 図 埋れ宿ゆること、亡ぶること、絶ゆること。

いんもつ 音物 図 好みを通ずる爲に贈る物品、つかひもの、送るもの。

いんーもん 陰門 生理 動物の雌の生殖孔の入口なり

いんーやう 陰陽 図 易學の語、萬物相對したるものは陰と陽となり、例 日、火を陽とし、月、水を陰とす。

いんーやく 隱約 図 隱微にして 簡約なること。

いんーやく 印鈔 図 印と かぎと。

いんーやう 音容 図 聲と 貌と、音聲。

いんーらく 淫樂 図 淫色の樂。

いんーりん 淫霖 図 ながあめ。

いんーりよく 引方 図 物理、宇宙間にある物體は 其遠近を論せず 互に相牽引する力をいふ、之を唱へしはイタリヤのガリレオにして之を大成せしはニウトンなり、此引力は物體の各部分が 他物體の各部分を引くものにして宇宙間の萬物皆此力を見せざるはなし、故に之を又萬有引力ともいふ、其力の強さは 兩物體の質量の相乘積に正比例し 其間の距離の自乗に反比例をなす。

いんーれき 陰曆 図 たいしんれきの略。

いんーろう 印籠 図 小さい匣、三重又は五重にして、上の底は下の かぶせふたとなるやうに作り 兩端より紐を貫き履に提げて 禮服の具としたり、初めは印を入れたりしが後には 専ら薬を入れるに用ゆ。

いんろうーつけ 印籠漬 図 胡瓜 越瓜などのなかごを作りに 内に紫蘇、蕃椒などを入れて 鹽漬にせるもの、輪切にすれば 形 印籠に似たりといふ。

いぬ 夢 図 ゆめにねなし。

いも 芋 図 植物 蔬菜の名 地下莖植物なり、さといも たうのいも、はすいも、やつがしら、やまのいも、つくねいも、かしらいも、じやがいも等種々あり 各其の條を見らるし。

いも 妹 図 一、男より女を親しみて呼ぶ稱、二、さもうとのこと、女の子の後に生れたるもの。

いもとうーぶん 妹分 図 かりに定めたる妹、義妹。

いもーがしら 芋頭 図 里芋の根、たやいも、芋魁。

いもーがひ 芋貝 図 動物 螺の類、形 いものこに似て 大小種々あり 色 白くして赤 黒などの斑あり。

いもーがゆ 薯粥 図 一、山の芋に おまづら、水飴などを交へ煮たる粥、二、米の中へ さつま薯を入れて 煮たる粥。

いもーがら 芋幹 図 芋の幹を乾したるもの 食用に供す 其生なるものをすまきといふ。

いもーせ 妹脊 図 一、妹と夫と、男と女と、二、めをと夫婦、三、兄と妹と、姉と弟と。

いもせーどり 妹脊鳥 図 動物、鳥の名、はととぎすの異名なり。

いもせやまーなんなーていくん 妹脊山女庭訓 図 書名 近松半二の作 戯曲。

いもーたけ 芋茸 図 植物 茸の一種、形 こめじょうろに似て 木陰などの軟き土地に生ず、味美なり、近江國の名産たり。

いもーたご 芋蛸 図 芋の子と 蛸とを共に煮たるもの。

いもーでんがく 芋田樂 図 さといもを串にさして 豆腐の田樂の如く 味噌をつけて炙りたるもの。

いもーにーこひ 妹戀 図 待つといふ語の枕詞。

いもの 鑄物 図 金屬を鑄して 型に入れて鑄て作れるもの惣稱。

いものーこ 芋子 図 さといもの いもがしらに生じたる芋子。

いものーし 鑄物師 図 鑄物を造る工人、いもし、鑄工。

いものつかさ 典鑄司 大寶令の制に「正一人 掌造 鑄金銀銅鐵 塗鋳瑠璃玉作云云」とありいもんづかさともいふなり。

いものやま 芋山 連歌にていふ語、すべてやまのいもといふべき所をいものやまといふが如し 語を顛倒していふこと、連歌にては餘に之を擬ふなり。

いもばたけ 芋畑 芋を栽培する畑。

いもひ 齋 芋のこと、ものをいみすること、精進。

いもひさうじ 齋精進 精進潔斎すること。

いもひのたま 齋玉 精進潔斎を玉の清きにたとへていふ語。

いもひのさご 齋床 物忌をする時の臥床。

いもひのには 齋場 物忌みする所。

いもむし 芋虫 動物 虫の名、昆虫 鱗翅類の幼虫なり 芋の葉に棲む、大き二寸より三四寸に至る 色は緑 黒 褐等種々なり 後 變態して 蝶となる 種類多し。

いもんぐさくせん 衣文愚童訓 書名、壺井義智の著 衣冠、直衣、直垂、狩衣など 凡て 衣服に關せることを記したるもの。

いもんのがみ 倚門之望 親が郷里に待ち居ること

とをいふ、外に居るものにて 故郷に母の存するものを「倚門之望」ありともいふ。

いもり 蠓蟻 動物 兩棲類 淡水に棲息し 大き四五寸あり 背面 四肢 尾は黒色を呈し 腹面は朱赤色に黒斑あり 四肢の發達不充分にして歩行に適せず 尾は 縱扁にして 游泳の用をなす 肺を以て空氣を呼吸し 時々水面に現れて空氣を吸入す、又皮膚も呼吸の用をなすものにして 肺の小にして水面に來ること少きは 一は皮膚呼吸あるに原因す、幼虫は黒色にして小魚の如し、やもりと名稱 相似れども分類上の位置 等しからず。

いもゐ 齋居 物忌をして 居ること。

いよ 否 欲せぬこと、忌み嫌ふこと、厭ふこと。

いよ 齋 同 意いよ、ますます、最も。

いよいよ 齋從弟 父のいよこの子、つたいでこ、またいでこ、再從兄弟。

いよいや 否 否を重ねて 意を強めたる語。

いよやう 異様 かはりたる様、異なりたるさま。

いよたひ 彌生 一、草木の いよいよ重り生ずること、二、陰曆三月の異稱、草木 日に日に茂ればなり。

いよたひのつき 彌生月 陰曆の三月のこと。

いよがうへに 彌上 意いよ、其の上に。

いよごよ 否 他人の語を承諾せぬ時に 此方より先づ發する語。

いよはし 彌端 一番のはし、極端。

いよましに 彌増 意いよますます、ますます。

いよむ 否 否み嫌ふなり。

いよめ 否 心配なるさまの目、涙ぐみたる目つき。

いよぬ 癒 病 治する、全快す、治す、本復す。

いよきはばかる 行憚 意いは發語にて 行き憚る、即ち 行きかぬるなり。

いよ 彌 意いよの轉なり。

いよ 伊豫 國の名 南海道四ヶ國の一、上古 二名の州といふ、歴史に甚だ關係多し、殊に允恭天皇の時 輕皇女の流されしより 此地に流刑せらるるもの多し、承平六年に 藤原純友 伊豫の條となり 後天慶三年 亂を爲す 南北朝の時 河野、得能、土居の諸勤王家現はる 豊臣時代には 小早川隆景を封じ 徳川時代には 松山の久松氏 宇和島の伊達氏等あり。

いよと 彌 一、其上に進みて、ますます、いとと、愈、二、事極まりて、終に、到頭、三、きつと、どうして、等の意あり。

いよう 異容 かはりたる姿、人と異りたる態度。

いよい 意譯 文章などの根本の意味を取りて翻譯すること、多く外國書類に付ていふ。

いよん Tago, Diego, Diego. 人名 イスマニアの高僧にして、曆史家なり、(西紀一五三二—一六一四)。

いよし 賤、卑 一、尊からず、身分低し、下賤なり、二、劣りたり、下品なり、三、卑劣なり、潔からず、四、わるし、けしからず、よくわらず。

いよしきな 賤名 罪ありとて 官位を下げられたる意、わるき名。

いよしん 彌頭 意いよしん。

いよしんも 荷 かりそめにも、かりにも。

いよしみ 賤 意いよしむこと、さげすみ、輕蔑。

いよす 癒 病を治す、直はす、療治す。

いよたかし 彌高 意いよたかし。

いよたかやま 彌高山 山の名、一、近江國にあり、二、備中國河上郡にあり 雪の名所たり。

いよちんばに 彌繼繼 長く 後をいつて、いよちん、おちんばに。

いよちん 陪臣 またげらら、ばしんのこと。

いよちん 彌常 意いよちん。

いよーかつら 伊豫葛 植物 蔓草の名、すずめのをこけの蔓生したるもの、秋 葉間に 紫黒なる五瓣の小花を開く。

いよーしんわう 伊豫親王 人名 桓武天皇の皇子、母は藤原吉子 大同二年十月 教臣 藤原宗成に 首謀者なりと誅せられ 十一月 藤原寺に幽せられ 母と共に毒を仰ぎて薨せり。

いよーじろめ 伊豫織 成分は砒化アンチモンにして色は錫に似たり、質 堅くして碎け易し、薬用に供し、活字金となす、伊豫國温泉郡、阿波海部郡、肥後の天草島等より 産出す。

いよーすだれ 伊豫蓆 伊豫より 産出するすだれのことで、露の峰に生ずる蓆にておむといふ。

いよーたつ 彌立 寒さ 又は恐怖のために 身の毛がたつ、よだつ。

いよーと 伊豫砥 砥石の名、色白く、質軟し、伊豫より産す。

いよーのーわうじ 伊豫皇子 人名 孝靈天皇の第三の皇子、今岡皇子とも申す、武勇にして 伊豫の國の賊を平げ 其國主とならせ給ふ、越智氏の始祖。

いよへーらうまかひ 伊豫部馬糞 人名 持統天皇に仕へ

皇太子の學士となり、從五位下に叙せられ 大寶中 律令を撰みたるの功を追賞して 朝廷より その子に 功田と封戸とを賜ふ。

いよーまさ 伊豫紙 伊豫國の東方諸郡より産出する枉目紙にして 錦繪などを摺るに用ゆ。

いら 刺 一、草木のどげ、はり、二、いらくさ、三、魚の脊鰭。

いらい 依頼 他人に 依り頼むこと、人を力とすること、人を頼みに行ふこと。

いらい 以來 一、それよりこのかた、二、これより後、以後、前後。

いらいらし 苛苛 心 せきて もどかしく思ふさまなり、氣をいらつかせるなり。

いらか 藁 一、屋根に葺きたる瓦、二、瓦葺の屋根。

いらがなし 刺悲 悲むことらしくて悲しきなり。

いららく 意樂 木のればめして 自身自ら樂しむことをいふ。

いらくさ 刺草 藪中に多し 高さ三四尺 叢生す 莖は方形にして葉は からむしに似たり 尖りて對生す、莖葉共に棘あり ふるれば刺す、果實は からしむしに同じ、葉の皮より絲を製す、いら、れにあざ、いたいた

いらいーやぎ 伊真胡崎 崎の名 三河國渥美郡の西南端にあり崎なり。

いらーだつ 苛立 心急ぐ、いそぐ、いらつ、焦燥。

いらつ 苛 いらだつにちなし。

いらつーつ 耶子 年若き男子を愛しみ、親しみて呼ぶ語、いらつめに對していふ。

いらつーめ 耶女 年若き女子を愛しみ 親しみて呼ぶ語、いらつめに對していふ。

いらなけし いらなしにちなし。

いらなし 苛甚 苛苛し、ことごとし、烈し。

いらふ 應 答ふ、返答す、返辭す。

いらふ 應 いらふること、返答。

いらーぼ 伊真保 朝鮮より渡來せる一種の陶器、茶家にては 非常に珍重す。

いらーむし 刺虫 動物 虫の名、毛虫の中の大きなものなり、柞、林檎、桑等に居て 葉を食ふ、長さ七八分、形 扁く、色 黄黒にして毛を生し 人を刺す 其巢とすずめのたごといふ 夏 巢より出て 褐色の蛾に羽化す 即ち姑蠶之れなり。

イラン Iran 地理 高原の名、メソポタミア、アフガニ

スタン 及び、メソポタミアを含む高原なり、アリア人種の土地なりしが 今は メソポタミアの政治上管轄地の名となれり。

いらめく 苛 いらいらしく見ゆ、かどかどし。

いらもみ 植物 松杉科植物にしてマラモミに類す、我國にては富士山 及 日光山に在り、小枝 赤褐色にして多少の毛を有する所其特徴なり、樹皮は灰褐色にして小鱗状なり。

いららく 苛 さらつく、かどだつ、いかる。

いらる 煎 心を煎りつけらるる如く感ず、いらいらとするなり。

いられーがまし 煎 心を煎りつけらるる如く感ずるさまなり、いららし。

イラワチ Irrawadi 河の名、バルマの大河にして 水源は西蔵、マンガル湖に注ぐ 長さ一五〇〇哩の舟航の便あり。

イリ 一、河の名、バハーン湖に注ぐ中央アジアの河にして下流は舟航の便あり。

いり 入 一、入ること、はいること、二、目に見えずなること、三、入用。

イリアード Iliad ギリシアの詩聖ホメロスの詩篇に

して、トロイ戦争をしたるものなり。

いりあひ 入相 一、日の山の端に入るとき、日のく

る頃、たそがれ、日没の頃、二、いりあひのかねの畧。

いりあひのかね 入相 夕暮を告ぐる寺の鐘。

いりうご 入人 入夫にたなし。

いりうみ 入海 海の陸に入り込みたる所、入江、内

海、灣のこと。

いりい 入江 岸に入り込みたる江、海 湖の陸地に

入込みたる所、灣。

いりいひろかた 入江弘毅 人名、勳王家、長州の藩

士、慷慨の氣に富み、尊王攘夷の説を唱へ、諸藩を率ゐ

山崎天王山に屯集し、建白願して用ゐられず、元治元年

七月禁闕に迫り、諸兵を戦ひ、遂に自刃す。

いりいまさよし 入江喜喜 人名、大阪の商人にして

國學者、中年已後に至りて遂に國典の研究に志したり、寛

政十二年八月歿す 年七十八。

いりがね 入金 所得、收入金のこと。

いりかはりたちかはり 入替立替 人の出入の繁き機

にふ語。 入替 出で行くべき他人 或は物に代り

て 内に入る、交代す。

いりかよふ 入通 入りて往來す。

いりから 煎殼 一、鯨肉の脂を煎り取りたる後のも

の、食用とす、二、豆腐のからを煎りて 味をつけたるも

のなり。

いりぐち 入口 一、入るべき戸口、門口、二、物事

の初め、端緒。

いりくむ 入組 物事が難し難る、複雑になる。

いりこ 煎海風 煮まこの腸を去りて 煮て乾かしたる

もの、再び水に浸して煮て食ふ、一名、はしこ、之を串に

貫きたるものをくしこといひ、藤にからけたるものを

かこといふ、海參。

いりこ 炒粉 米の粉を炒りたるもの、菓子原料と

するもの。

いりごみ 入込 差別なく入り難ること、入込む事。

いりざけ 煎酒 古酒に 醬油、鹽、麴などを加へ

て 造りたるもの、酔、刺身などに用ゆ、煉酒。

いりしご 入仕事 手間仕事にたなし。

いりしほ 入汐 ひきしほにたなし。

いりしほ 煎鹽 鹽を炒りたるもの。

いりじようやく 伊犁條約 清の光緒七年に 清露阿

國の大使が 伊犁の事に關して露都に會し オルトス河を

以て此兩國の境界とし 且清國より九百萬ルーブルを出す

事を約せし條約なり。

イリヂウム Iridium 化學 記號 Ir. 原子量日九十

三、此は光澤ある白色金屬にして 酸水素吹管の焰にて

辛ふして熔く、故に細工甚だ難し、比重二十二・三八、硬

度は少しく銀へたる鋼鐵等に等し。

いりぢみ 熬炭 炙りて 濕氣を去り 火の移り易き

やうにせる炭。

いりだけり 入猛 我家に歸りて 暴行すること。

いりたち 入立 一、いりたつこと、二、許しを受け

て 庵中に入り 女房たちと同座すること。

いりたまご 煎玉子 難卵に 醬油 砂糖などを加へて

煎りたるもの。

いりどうぶ 煎豆腐 豆腐の水を去りて、椎茸の細か

にしたるものなどを交ぜ 醬油 味淋、砂糖などを和し

て 煎りつけたるもの。

いりなべ 炒鍋 米 豆などを炒るに用ゐる淺き土鍋

のこと、はうらく、いりがはら。

いりなみ 入浪 沖よりさして来る浪。

いりに 入荷 貨物の滿國より到着すること、入津。

イリノイス Illinois 地名、北米合衆國の一州にして

ミスシッピ河、オハイオ河の水利を享け 地味肥沃にし

て 廣野多し、小麥 煙草 穀類等甚だ多し、又巨額の石

炭を産す、此地 本來は佛人の占領せし地にして之を英國

にゆづり、一七八三年再び をアメリカ人にゆづり、一

八一八年聯立に加入せり、首府をスプリングフィールドと

いひ 最大都市をシカゴとす。

イリバリク Irbalik アルマタクの舊都にして 今の

クルサアなり。

いりひ 入日 西に没せんとする日、落日、斜陽、夕

日のこと。

いりひのひかり 入日光 ゆふひかげにたなし。

いりふ 伊里布 人名、支那の政治家、清宣宗の道光二

十二年鴉片の事に依り 英軍江寧府に迫りしかば 帝の命

を奉じ 欽差大臣香英と共に英國大使と會し 所謂南京條

約を締結せし人なり。

いりぶち 入淵 河海などの陸地に入り込みて 水の

深く なりたる處。

いりふね 入船 港に乗入る船。

いりほが 心の入り湯ぎて 實事に遠ざかること。

いりむぎ 炒麥 麥を炒りて 粉にしたるもの、むぎ

こがし。

いりむこ 入聲 婦の家に夫となりて入る男をいふ、いへむすめの聲養子、入夫。

いりめ 入目 置いたる金銭の高、入費、入用。

いりめく 苛 置いたる金銭の高、入費、入用。

いりもの 炒物 豆 米などを炒りて砂糖などをかけたるもの。

いりもみ 煎揉 揉みに揉みて 烈しく吹く風。

いりもみち 濃紅葉 極めて色の濃き紅葉。

いりやくせう 醫略抄 書名、丹波雅忠の著、投薬の所方を記せるもの。

いりゆ 煎湯 飯の炒り焦したるものを 湯に入れ其香をうつしたるもの、吸物などす。

いりよう 入用 いろいろ、入用、入費。

イリリア Ilyria 古き地名、ギリシア本部の北方バルカン半島の西部海岸一帯の地方の古名にして、今のモンテネグロ及びオーストリア、トルコ帝國の一部を包含す、首府をスコドラといひ一時は重要な地位を占めし地方なりしが、西紀前一六八年、ローマに征服せられて衰亡せり。

イリリアせんろう イリリア戦争 イリリア種族とローマとの間に起りし戦争なり、紀前二二九年より翌二

百二十八年に跨りて、ローマは二隻よりなれる大艦隊を編制して、イリリアの海賊を討ちて之を驅逐し、時の女王テウタに迫りて條約を締結し、終にアドリア海上に主權を獲得したり、其後イリリア王ケンチアス、マケドン王ペルセウスに與へしを以て、紀前一六八年羅馬はマケドンを平げ、次でイリリアを征し遂に之を略したり。

イリリウム Ilyria 地名、ローマ帝國が其晩年に於て分れたる四大艦の一にして、今のマケドニア、ギリシア、クレタ、アルバニア、セルビアに相當す。

いりわけ 入譯 事のすぢみち、事のなりゆき。

いりわり 入刺 事の詳細なるすぢみち。

いり 射 矢を放つ、矢を射て中つ、用ひて矢を放つ。

いり 鑄 金屬を熔して 鑄型に入れ、器を作る。

いり 沃 注。

いり 入 一、内へやる、中に置く、二、藏めたく、收む、三、納む、償ふ、四、用ひる、費やす、背つ、承知す、容、六、懐く、さしはさむ。

いり 煎 鍋にて水氣の盡くるまで煮る、煮詰むる。

いりか 海豚 動物、哺乳動物、海水に屬す、形に似、全身圓く肥りて長さ六七尺、黒くして毛無し、前肢は鰭の如く變じ、後肢は、僅かに其痕跡を止め、別に尾

様のものを生ず、背は背の正中にあ

り、鼻は頭上に於て二孔相合し、牛

月状をなす、皮、厚くして脂多く、煙

油とすべく、肉も食ふべし、何れの海

にも産す、屬々大河を溯ることあり、

主として魚類を食す。

イルカン 伊兒汗 地名、汗國の名

にして、元の旭烈兀が蒙古西藩の亂を

平定し、本國より封册せられて、西亞

細心の諸國を統べ、タブリスに都して稱したる、

後欽察、察合台と共に蒙古三大藩なりしも、終に西紀一三

九三年帖木兒の滅ぼす所となる。

イルクツク Irkutsk 地名、首府の名、イルクツク州

の首府なり、東方西比利亞官廳の所在地にして、又商業の

中心たり、茶の貿易を以て著はる。

いるーざ 入方 いるかた、露尾のさの字は、かへるさ

のさになし。

イルチシ Irish 河の名、西部西比利亞の大川にして

オビ河の支流なり、源をアルタイ山に發し、シベリヤ平原

を西北に流る、冬季は結氷し、楫にて往來す、沿岸には

セミパラナンスク、オムスク、トボルスク等の都市あり。

イルメン Ilmen 湖の名、ロシアのノボゴロッド州に

ある湖なり、ボルコフ河に依り、ラドガ湖に注入す。

いーる 衣類 身に着服するもの總稱、きもの。

いーるいざよう 異類異形 ばけもの、妖怪。

いれう 醫術 醫術にて治療すること。

いれがしら 入頭 釘をかす爲めに、打つ金物。

いれがみ 入髪 髪を結ぶとき、我が髪に足して入れ

用ひる毛、そのがみ、入れ毛、派毛。

いれーき 入木 彫刻物などをなほすとき、他の木を入

れ合すること、埋木。

イレクカン 地名、回紇の西部なる喀什噶爾(カシユカ

ル)の汗なり。

いれこ 入籠 匣 文庫などの製造に大小數個、互に

組み合はして、中に入るべきやうに作れるもの。

いれこーごば 入子詞 文章の中へ、挿入したる詞、

即ち挿入語。

いれこーさかづき 入子蓋 順次に下なるものは、大なる

ものに、組み重ねたる名稱、即ち組み蓋のこと。

いれこーざけ 入子鮭 兒持の鮭のこと、ここもりざけ

内子鮭のこと。

いれこーちゆう 入子重 いれこになる鱈に大小組み合

せたる所箱。

いれこぶた 入子蓋 入子になりて蓋はれるもの。

いれごみ 入込 男女 貴賤の別なく 打雑せて入ること、諸所のものを一所に入ること。

いれずみ 入墨 一、刑の名、肌を傷けて 墨汁をさす後の標とするなり、徳川時代の刑制には 追放 敲等の附加刑として之を行ふ、二の腕に幅三分づつ二條入るなり

いれつゝわう 威烈王 人名 周の三十二代の王にして其の二十三年晋の魏 趙 韓の三代を諸侯に封す 而して周室は 之より益々衰微し 所謂戦國時代となるに至る。

(西紀前五世紀の人)。

いれぢぢ 入智恵 自分に考へ付きたるにあらずして他人よりつぎいれたる智恵。

イレナ Irena. 人名 ビザンチオン帝國の女帝、アテ子に生れたる賢兒にして且孤兒なりしが 其容姿と秀才及罪惡とを以て名高し、西紀七九七年 其子の位を奪ひ明を失せしめたり、八〇二年追放せらる、(西紀七五二—八〇三)。

イレシオ Irenaus 人名 有名なるギリシア教會の闢祖、小アジアの人、フランスのロンの僧正となる、ギリシア語の著書多し、(西紀二〇二年頃死す)。

いれば 入歯 天然の齒の欠損したるを補ふ爲に入れたる人造の齒のこと、即ち義齒なり。

いればな 入花 一、狂歌の點をすり出す板料、二、狂歌 發句などの點料。

いれひも 入紐 狩衣、直衣、袍などの紐に 雄紐雌紐とて 結びつけて玉にしたるを 輪に差し入れて かけらるものなり。

いれめ 入目 盲目の眼に はむる人造の眼、硝子などにて作る、即ち義眼なり。

いれもじ 入文字 詩歌などの中に 異れる文字をかくして讀むこと。

いろ 倚置 表中に籠り居る假屋のこと、學屋。

いろ 色 一、光線に固有なる或特殊の性質のものにして 物體が其の中の或ものを吸收し 或るものを反射するにより 特異の見を 物體に呈せしむるものなり 其の主なるものは 紫 紺 青 綠 黄 橙 赤の七色なり 古より五色といふは 青 黄 赤 白 黒なり、又 綠の如きを白色と稱せり、二、紫色、三、裏服の鈍色、四、顔色、五、顔色の體にして戀ひ慕ふべき情を起さしむること、六、髪の色をつくしきこと、七、典、狀、襪子、八、ひびき調子、九、品、類、十、醬油の異名、むらさき。

いろうあひ 古き布帛などの染色の褪せたるを再び染めて鮮にすること、染め返し。

いろあひ 色合 塗 染などの色のがりたる程合、色氣。

いろいろ 色色 一、種々の色、二、種々、くさくさ品々、種々。

イロイロ Iroiro. 地名、フィリピン群島の一なるベチ三屬州中の最大なるもの、同名の首府あり。

いろいと 色紙 種々の色の糸を以て 織をれとしたるものなり。

いろいと 色紙 種々、かかれこれ。

いろか 色香 一、花などの色と香のこと、二、顔の艶なること、みめよき顔容。

いろがみ 色紙 色に染めたる紙、染紙、色紙。

いろく 位祿 大寶律令にて、四位及五位の有位者に賜はりたる封祿なり。

いろくさ 色種 色々の種類、種々の草。

いろけしーレンズ 色消レンズ 物理、通常のレンズは色收差を生じて 物體像と不鮮明ならしむる故に 之を補正する爲に 色消レンズを用ゐる 之は異質のレンズ二枚を重ねたるものにして 通常は クラウン硝子にて作れる

凸レンズと フリント硝子にて作りたる 凹レンズとを合したるものなり、其作用は凸レンズの爲に分散されたる光が 種々の點に焦點を結ぶに先ち 凹レンズを通過せしめて 屈折の大なる紫を 多く發散して 其焦點を遠からしめ 屈折率の小なる赤を 少しく屈曲せしめ 以て同一點に集合せしむるにあり。

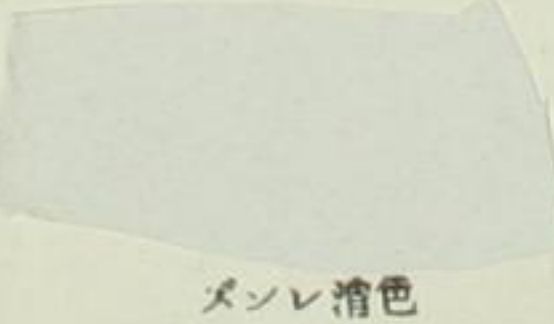
いろこきぬにーしろさあこめーきたらんやうにーみにて 色濃衣に白拍着たらん様に見わた 富士の白雪に 紫雲の柵引けるさまを 下に白き拍を着て 上に紫の濃き色なる衣を着たるさまに見たてたるなり。

いろごも 色衣 一、正月元日の裝束、二、色の美しき衣のこと。

いろざし 色差 一、いろあひ、二、處々に色をさし入ること、いろとり、着色。

いろさむ 色醒 一、色淡くなる、色衰ふ、褪す、二、色の變ずる。

いろしづさ 色收差 物理、光線が凸レンズを通過すれば屈折す、而して 屈折率は 色によりて異なるが故に レンズの焦點の位置も 色によりて異なるが故に



メニレ消色

即ち 白光色を送れば 屈折率の大なる紫色は レンズに遠き點に集合し 屈折率の小なる赤色は レンズに遠き點に於て集合す、かくの如く色によりて 其焦點を異にするを色の散差と稱す、之れは物體の像を不鮮明ならしむる一原因なり。

いろしな 色品 ④ 數數の物、しなしな。

いろずり 色摺 ④ 色とりて 摺りたるもの。

いろせ 家兄 ④ 兄にちなじ、又通じて弟、其他 敬愛すべき男子を親しみていふ語なり。

いろづく 色付 ④ 一、色を生ず、色がつく、二、熟するなり、成熟す。

いろどろ 色取 ④ 一、種々の色を以て濁く、彩色す、二、顔に紅粉 黛などをつく。

いろつき 色取月 ④ 陰曆九月の異稱、九月頃は草木の枝葉が色づくものなるよりかく名く。

いろなほし 色直 ④ 色なき衣類を色ある衣類に着替へること、婚禮の後三日 或は産後百日まで着用せし白小袖より 色小袖に着かゆるなほにいふ。

いろね 色音 ④ こわれ、ぬいろ。

いろのたんず 色御衣 ④ 美麗なる衣服。

いろは 以呂波 ④ 一、假名四十七字の總名、以呂波歌の

首の三字をとりて名けたるもの、二、以呂波歌のこと。

いろはうた 以呂波歌 ④ 假名四十七字を八句に詠したるもの、即ち「色は匂へど散りぬるを 我が世誰れぞ常ならむ 有爲の奥山 今日 越へて 淺き夢見し 酔ひもせず」なり 是は弘法大師の作にして 涅槃經の「諸行無常 是生滅法 生滅滅已 寂滅爲樂」の四句を 演べたる今樣歌なりといひ傳ふ。

いろはがな 以呂波假名 ④ ひらかなにたし。

いろはたんか 以呂波短歌 ④ 以呂波四十七の音を冠せてつらねたる短きたとへの謔、かるたなどとして 小兒の教訓とす。

いろはもみぢ 以呂波楓 ④ 植物 紅葉の一種、葉の七つに分れたるものなり。

いろひ 争 ④ いろふこと、あらしひ。

いろふ 争 ④ いろふこと、あらしひ。

いろふ 彩色 ④ 色を添へて、更に麗はしくする。

いろふ 綺 ④ 一、取扱ふ、二、係り合ふ、口をだす、關涉する、三、弄ぶ、いぢる、手にふる、四、こぼむ、ことばるなり。

いろふし 色節 ④ はればれしきこと、さらびやかなること、榮耀。

いろみぐさ 色見草 ④ さくらの異稱。

いろん 異論 ④ 他に異りたる議論。

いろめ 色目 ④ 一、衣服の染色の名目、二、物のいろあひ。

いろめく 色 ④ 一、時めきて色を顯はす、いろづく、はなやかになる、二、敗け色が見ゆ 敗るる兆見ゆ。

いろゆり 色許 ④ 禁色を許さること。

いろわけ 色分 ④ 一、圓の線、界などの上を 色取りて區別すること、二、物を種類によりて分けること。

いろゑ 色繪 ④ 彩色したる繪、錦繪、着色畫。

いろなまき 伊呂尾崎 ④ 岬の名 伊豆國伊豆岬の別稱にして 燈臺の設けあり。

いろなもてきく 以色聽 ④ 大寶令の獄舎に「凡そ察獄の官は まづ五聽をそなへよ」とあり、五聽とは 辭、色、氣、耳、目をいふ、色聽とは 察獄の官が 罪人の顔色を見て 善惡を察するをいふ。

いわい 磐井 ④ 人名 筑紫國造にして大彥命の後なり、繼體天皇の其二十一年近江毛野をして、新羅の倭地を復せんが爲め、六萬の大軍を率ひ、征を出さしめられたる時 磐井は新羅より、悉聽して毛野に抗し、豊後によりて高麗以下の貨物を奪略し、州を掩せんとせしを以て、帝は

物部麤鹿火をして、毛野を討たしめられ、筑紫御井に囃ひ終に斬殺せらる。

いわい 忌靈 ④ 上古 神前に酒を奉る時、用ひし土器なり、朝鮮土器と稱するも此一種にして、此は内に紋あり。

いわう 硫黄 ④ 礦物、ゆわうにれなし。

いわう 以往 ④ 一、これより後、以後、後來、二、誤て以前。

いわう 醫王 ④ 藥師如來のことなり。

いわうじま 伊王島 ④ 島の名、肥前國西南方の海中にある島にして 周圍は一里十九町餘あり、燈臺の設けある島なり。

いわかみでんもん 岩上傳右衛門 ④ 人名 蒲生氏郷の臣にして、天正十六年三月同臣山科勝成等外十二名と共にローマに使し、黄金百枚を呈して 教書一卷をけ歸りたる人。

いわく 童 ④ 小兒らしき事をする。

いわけなし 童 ④ 小兒らし、あせけなし、尙 いはれなしの條を見よ。

いわし 鱈 ④ 動物 魚類 硬骨魚に屬す、秋の末より冬季にわたる 漁せらるる魚にして 背青黒く 腹白く 鱗は細く、剥け易し、常に 群ををして 海の上層に棲息

す、味 佳なれども 脂肪多く 鯨の捕食する所となる
此魚は食料に供し、魚油を取り、肥料となす等 用途 甚
だ廣く 我國にとりては 重要な海産物の一なり。

いわしくちら 鯨 動物 鯨の一種にして 南海に
多し、大なるは三丈ばかり 胸腹の皮 縦線をして 竹
を編めるが如し、故に之を黄子皮といふ、昔に鱈あり、鱈
短かく 脂少し、常に鱈を好み食料となすなり即ち 鱈を亦
鱈鯨ともいふ。

いわしくも 鱈雲 鱈の群がりて 來る時の雲の換極
をいふ。

いわふね 磐船 地名 越後國磐船郡内にある地にして
孝德天皇四年櫛を築き、信越の民を運び移らしめて之を守
らしめ、以て東夷に備へられしにより名あり。

いわふねのき 磐船櫛 越後國にありて、孝德天皇の時
始めて櫛戸を置き、信越の民をして守らしめ、東夷に備へ
られし重要な防塞なり、文武天皇の時修繕されしが、和
銅年 出羽秋田の諸塞起るに及んで廢せられたり、現今の
岩船郡岩船町明神山の沙丘に此遺跡ならんと云はる。

いわみ 石見 地名 山陰道の一國、山岳重疊して平地
少きより此名出づ。

イワン 人名 イバンの條を見よ。

いの 依違 決しかねる説。

いののき 異域 異國 又は異邦にたなし。

いののくに 異域鬼 外國にて死ぬることはいふ
即ち 他邦に於て死亡すること。

いののちゆうぎやう 異位重行 公事 儀式などの時
公卿たちの 内裏の庭に立ちならぶこと。

いの 動物 魚の名 鯿の一種、身圓くして 鯉の如き
もの、之をまるふなどいふ。

いののくし 魚串 魚を炙るに用ゐる串。

いののすき 魚動 植物 草の名 やまこけふにたなし
即ち商陸。

いののぬ 寝を寐の義に用ひたるもの、寝ぬ、安眠
するなり。

いののふね 魚鱈 動物、うきぶくろにたなし。

いののめ 魚目 うをのめにたなし。

いののめ 疣に同じ、いはの條を見よ。

